

2018年9月期
関西大学審査学位論文

フォーカシングの成立と実践の背景に関する研究
— その創成期と体験過程理論をめぐって —

関西大学大学院 心理学研究科
心理学専攻（臨床心理学特殊研究）

14D8503 田中 秀男

論文要旨

ユージン・ジェンドリン(1926-2017)が提唱したフォーカシングという心理援助法(Gendlin, 1981)が紹介されて以降、「フォーカシングは重篤例に適用可能か」など、様々な議論が国内の研究者間でなされてきた。しかし、フォーカシングの成立に先立つ様々なリサーチの流れや理論的背景は断片的にしか紹介されないまま今日に至っている。そのため、フォーカシングを実践し、伝えるにあたって、用語の使い方に混乱が起こり、研究者間の相互理解が阻まれている。

こうした問題点を解決するため、本研究(論題:「フォーカシングの成立と実践の背景に関する研究 — その創成期と体験過程理論をめぐって —」)では、先行するカール・ロジャーズ(1902-1987)のクライエント中心療法とフォーカシングとの相互影響関係を再検討し、現代のフォーカシング実践が持つ射程範囲を理論的に明らかにすることを目的とする。そのために、彼の初期主著『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)を中心としたテキストや、近年になって公開された彼の公刊前の業績を、ロジャーズ学派の先行研究と照合しながら時系列に検討する。また、検討の結果を踏まえ、再吟味された用語の定義や理論を、現代のフォーカシング逐語記録の考察へ適用する。

本研究は、問題と目的を提示する「第Ⅰ部(第1章)」、ロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけを検討する「第Ⅱ部(第2章、第3章、第4章)」、ジェンドリンの初期体験過程理論から見たロジャーズ用語の再検討を主とする「第Ⅲ部(第5章、第6章)」、同じく初期体験過程理論から見たフォーカシング実践の再検討を主とする「第Ⅳ部(第7章、第8章)」、これらの議論に関する総合的考察を主とする「第Ⅴ部(第9章)」の5つから構成される。

第Ⅰ部(第1章)では、フォーカシングが成立した背景として、ロジャーズ学派の統合失調症治療プロジェクトから生まれたとする紹介のされ方が、のちのフォーカシング研究へ過剰に影響を及ぼしてしまった問題を指摘した。まず、問題を検討するにあたって、同プロジェクトへジェンドリンが参加する前後を中心に、彼の活躍の時代区分を行った。区分の結果から、従来のフォーカシング研究において、同プロジェクトへ参加する前にジェンドリンが挙げた業績が注目されてこなかったことに起因する問題点3点を挙げた。(1)同プロジェクト以前のロジャーズ学派におけるどのようなリサーチがフォーカシングの先行研究となったかが明らかになっていないこと、(2)ロジャーズのパーソナリティ理論に問題

点を見出したジェンドリンの主張の論拠が十分に紹介されていないこと、(3)ジェンドリン初期の理論的著作と近年の実践的著作との間で用語の対応関係が明らかにされていないことの3点であった。続いて問題点(1)については続く第Ⅱ部で検討し、問題点(2)については第Ⅲ部で検討し、問題点(3)については第Ⅳ部で検討するという本研究の構成を論じた。

第Ⅱ部(第2章、第3章、第4章)では、ジェンドリンがどのような問題意識をもってロジャーズの心理療法研究に参加し、ロジャーズ学派の先達による様々なリサーチをどのように継承したかを検討した。検討によって、ロジャーズ学派とジェンドリンとの連続面を主に明らかにすることで、初期ジェンドリンの位置づけを確定させた。

第2章では、ジェンドリンの哲学修士論文において、のちのロジャーズ学派やフォーカシングの発展に寄与する論述が見られることを指摘した。続いて、クライアントが「何を話すか」から「いかに話すか」へという、ジェンドリンによるリサーチ変数の取り方の転換には、二人の先達がいることを明らかにした。この「いかに」のリサーチがのちの「体験過程尺度」につながることを明らかにした。

第3章では、上記リサーチを考察する際にジェンドリンが導入した、「内容変数」対「過程変数」という概念が、従来の心理療法研究における「結果研究(outcome studies)」対「過程研究(process studies)」と指し示す対象が異なる点に注目した。しかし、こうした変数における新しい用語法の導入は、ジェンドリン個人の恣意的な発想に基づくのではなく、ロジャーズ学派の先行研究者による分類を継承したものであることを明らかにした。最後にこうした新しい変数の導入によって、ロジャーズ学派が「現在の重要性」や「治療関係の重要性」ということで何を指しているのかがより鮮明になることを理論的に明らかにした。

第4章では、フォーカシング成立のきっかけの一つとされる、心理療法失敗の予測研究が、第2章で論じた「いかに話すか」の研究とは別の流れに由来することを明らかにした。予測研究の結果は、ロジャーズの必要十分条件を覆すものであり、当初ジェンドリンは抵抗を示したが、ロジャーズ学派の先達によるこの予測研究が、後年の「フォーカシング教示法」の成立にかかわることを明らかにした。

第Ⅲ部(第5章、第6章)では、第Ⅱ部同様、ジェンドリン初期の業績に着目しつつ、ロジャーズのパーソナリティ理論・心理療法理論との非連続面を明らかにした。とりわけ、ロジャーズの構成概念「一致」に対する、体験過程理論に基づく再検討を行った。

第5章では、ロジャーズであればセラピストの「一致」というべき態度が、ジェンドリンの著作においても詳細に論じられているにもかかわらず、一致という用語が一度も使用されていないことを確認した。

第6章では、ロジャーズの構成概念「一致」に対する、初期ジェンドリンの著作に散見される批判的論述を統合的に論じた。これにより、経験と概念の「不一致／一致」という説明図式により、心理療法で起こっている変化で見落としやすい側面3点を指摘し、その理論的解決案を提示した。

第IV部（第7章、第8章）では、初期ジェンドリンの著作による、現代のフォーカシング実践の理論的考察を行った。

第7章では、経験に対応する概念がない状態を表す用語としてジェンドリンが導入した「直接参照」の意義を論じた。また、明確な言語化と「直接参照」と象徴化、それぞれ3つの用語について、従来の日本のフォーカシング研究とジェンドリンとは区分法にずれがあることによって、混乱が起こっていることを指摘し、その解決案を提示した。

第8章では、ジェンドリンが理論的著作の中でしかほとんど用いてこなかった「直接参照」という用語を、現在のフォーカシングの逐語記録の考察に用いた。これにより、フォーカシング中に起こる有意義な沈黙が成立する際に、セラピストが行っている応答の役割を明らかにした。

第V部（第9章）では、以上の知見を踏まえたうえで、本研究の総括を行い、続いて、本研究における課題と今後の展望について検討した。

目次

第 I 部 本研究における問題と目的	1
第 1 章 序論：問題と目的	3
第 1 節 導入：ウィスコンシン重篤例治療の神話	3
第 2 節 学者ジェンドリンの時代区分：カール・ロジャーズとの関係を中 心に	4
第 3 節 ジェンドリン用語の概説	7
第 4 節 従来のジェンドリン研究における問題点	9
第 5 節 リサーチ研究者としてのジェンドリン	9
第 6 節 ロジャーズへの控えめな言及	10
第 7 節 ジェンドリンの理論と実践との乖離	12
第 8 節 本研究の目的と方法	12
第 9 節 本研究のスタンスと構成	13
第 II 部 ロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけ	17
第 II 部 序	19
第 2 章 修士論文から初のリサーチまで	21
第 1 節 導入：ロジャーズ門下生として業績を挙げるまで	21
第 2 節 ジェンドリンの修士論文（1950 年）	21
第 3 節 哲学から心理療法へ（1952 年以前）	25
第 4 節 論文：体験過程の特質とその変化（1955 年）	26
第 5 節 ジェンドリン初の学会発表（1956 年）	29
第 6 節 結語	31
第 3 章 ジェンドリンの心理療法研究における過程変数	33
第 1 節 導入：「過程」は何と対比されるのか	33
第 2 節 「過程」という用語の多義性	34

第3節	従来の過程研究への異論	36
第4節	結語	38
第4章	フォーカシング創成期の二つの流れ：EXP スケールとフォーカシング 教示法の源流	43
第1節	導入：2つのリサーチの区別	43
第2節	「いかに”話すか”の先行研究：フィードラー・シーマン・ジェ ンドリンら	44
第3節	失敗が予測されるクライアントに関する研究：カートナーの研究 とそのインパクト	45
第4節	2つのリサーチの流れの合流	50
第5節	結語	51
第II部	結	55
第III部	初期体験過程理論の観点から見たロジャーズ用語の再検討	57
第III部	序	59
第5章	ロジャーズ中核条件としての「一致」	61
第1節	導入：研究書『一致』（本山・坂中・三國, 2015）レビュー	61
第2節	『一致』（本山・坂中・三國, 2015）の出版経緯	61
第3節	『一致』（本山・坂中・三國, 2015）の構成と特色	62
第4節	筆者の立場から	65
第5節	結語と課題：ジェンドリンはセラピスト側の「一致」を論じたか	68
第6章	「一致」という用語にまつわる問題点とジェンドリンによる解決案	71
第1節	導入：「一致」や「ぴったり」という用語法を再検討する意義	71
第2節	ロジャーズにおける「一致」	73
第3節	用語「一致」に対して：フォーカシング指向の先行研究から	75

第4節	用語「一致」に対して：筆者の立場から	76
第5節	結語：フォーカシングにおける「ぴったり」への留意点	80
第Ⅲ部	結	85
第Ⅳ部	初期体験過程理論の観点から見たフォーカシング実践の再検討	87
第Ⅳ部	序	89
第7章	一致と直接参照	91
第1節	導入：経験の対応する概念が存在しない状態：直接参照	91
第2節	シンボル化の一種としての直接参照	91
第3節	結語：一致／不一致を問えない直接参照	92
第8章	沈黙における直接参照と聴き手の役割	95
第1節	導入：沈黙と直接参照をめぐる先行研究	95
第2節	方法	98
第3節	「直接参照」の中核的意味：文献解題	99
第4節	逐語記録と考察	101
第5節	結語	106
第Ⅳ部	結	109
第Ⅴ部	総括	111
第9章	総合的考察	113
第1節	本研究で明らかになった知見	113
第2節	課題と今後の展望	117
文献		119

謝辭131

第 I 部 本研究における問題と目的

第1章 序論：問題と目的¹⁾

第1節 導入：ウィスコンシン重篤例治療の神話

本研究は、ユージン・ジェンドリン(Eugene Gendlin, 1926-2017)が提唱した心理実践法「フォーカシング」を理解するために、その背景となる『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)を中心とした彼の初期の研究を検討する。検討を踏まえて、フォーカシングとクライアント中心療法との相互影響関係の捉え直しを考察する。こうした考察を経た上で、現代のフォーカシング実践の理論的理解をジェンドリン以上に明らかにする。

学者ジェンドリンには様々な側面がある。ジェンドリンの著作目録(Depestele, 2007)に挙げられている315件にわたる業績を見てみると、彼の研究業績が様々な分野にわたることが示されている。研究業績のうち、世界的にみて、いちばん認知されているのは、心理実践法「フォーカシング」(Gendlin, 1981)の創始者としての業績である。他には、「フォーカシング指向心理療法」(Gendlin, 1996)の提唱者としての業績がある。また、心理療法の逐語記録を評定する「体験過程尺度」(Klein, Mathieu, Gendlin & Kiesler, 1970)を共同で提唱したリサーチ研究者としての業績もある。さらには、心理療法の理論である「体験過程理論」(Gendlin, 1964)の創始者としての業績もあり、早くから日本で知られてきた。更に、近年になって、日本でも紹介され始めたが、彼の本業である哲学者としての業績もある(Gendlin, 1962/1997; 1997/2018)。これらに加え、近年は彼の理論構築法「辺縁で考える(TAE)」(Gendlin & Hendricks, 2004)の業績もあり、国内で知られるようになってきた。

このように様々な業績を持つジェンドリンは、従来のフォーカシング研究においてその経歴を主に次のように紹介されてきた。シカゴ大学大学院で哲学修士になった後、カール・ロジャーズ(Carl Rogers, 1902-1987)と出会って心理療法の世界に活躍を広げる。ロジャーズを追ってウィスコンシン大学へ行き、統合失調症治療プロジェクト(1958-63)に従事する。その後、シカゴ大学へ戻った後、フォーカシングを提唱するに至る。以上のような経歴(村山, 1982, p.231)である。

現在から見ても、フォーカシングの成立に関して、上記のジェンドリンの経歴に間違いと言えるほどのものは含まれていない。しかし、本研究の立場からすると、上記経歴のうち、統合失調症治療からフォーカシングの提唱へ至るまでの間に、日本の研究者を中心として、ある「神話」が生まれ、のちのフォーカシング及び心理療法の研究へ過剰に影響を及ぼしてしまったと思われる点がある。それが、「フォーカシングはウィスコンシンでの統

合失調症治療から多くの着想を得た」という神話である。例えば、田嶋(1987)においては、「ジェンドリンが、フォーカシングないし体験過程療法の着想の多くを彼がロジャースと共同で行った分裂病 [=統合失調症] などの重篤例のクライアントの心理療法経験に負っている」(田嶋, 1987, p.128)という知識を著者自身もその読者も共有していることが前提とされている。より近年の、フォーカシングの起源を解説した書籍においても、ウィスコンシン・プロジェクトのロジャースやジェンドリンらの共著(Rogers, 1967)を挙げた上で、セラピストの態度が「セラピーの成功と関連していましたが、統計的に優位な要因とまでは言えませんでした」が、そうした研究において「心理療法の成功を予測できた唯一の優位な変数が、クライアント側の体験過程レベル(Klein, Mathieu, Gendlin & Kiesler, 1970)でした」(日笠, 2003, p.26)と論じられている。こうしたフォーカシングの起源の紹介から、「フォーカシングは重篤例の経験から着想された」という神話が生まれた。その神話をもとに、だからと言って「重篤例に有効ということとを混同しないよう」(田嶋, 1987, p.74)という注意が喚起されるに至るのである。

上記の神話で暗黙の前提となっているのは、「ロジャース学派において、ジェンドリンが実質的に頭角を現したのは、ウィスコンシン統合失調症プロジェクトの時代である」という考え方である。長年、日本のジェンドリン研究がフォーカシングの背景として「人格変化の一理論」(Gendlin, 1964)と『フォーカシング』(Gendlin, 1981)のみに依拠せざるを得ない時代が続いたので、致し方なかったといえよう。Gendlin (1964)で、現象としてのフォーカシングが提唱され、Gendlin (1981)で方法としてのフォーカシングが提唱されたとすれば、シンプルに紹介しやすいからである。しかし、ジェンドリンは、ウィスコンシンに移る前、何も業績を挙げていなかったのだろうか。そうではないというのが本研究の見解である。フォーカシングという用語が提唱された Gendlin (1964)一つをとっても、この論文には地層のようなものがあり、より古い地層に属するものは、より以前の業績として扱う (田中, 2004b, p.59) 必要があることを本研究では論ずる。これにより、ロジャース学派におけるジェンドリンの位置づけを再検討する。再検討の成果をもとに、現代のフォーカシング実践が持つ射程範囲を明らかにするための基盤を提示する。

第2節 学者ジェンドリンの時代区分：カール・ロジャースとの関係を中心に

具体的な考察を始める前に、まず、学者ジェンドリンの経歴を簡単な年表にして、彼の

活動の大きな節目を確認する(ジェンドリン, 1993; Krycka, 2018)。

1950 シカゴ大学哲学部に修士論文を提出する。

1952 シカゴ大学カウンセリングセンターで、カール・ロジャーズのもと、心理療法の仕事を始める。

1958 シカゴ大学哲学部に博士論文を提出する。

ロジャーズを追ってウィスコンシン大学へ移り、精神医学研究所のリーダーとなり、実践と研究に打ち込む。

1963 ウィスコンシン大学からシカゴ大学に戻り、心理療法家として、哲学者として活躍する。

上記の経歴をもとに、本研究では以下のように彼の活躍を時代区分したい。

1950-1958 第一次シカゴ時代

1958-1963 ウィスコンシン時代

1963-2018 第二次シカゴ・ニューヨーク時代

このように、ジェンドリンの場合、活動場所によって時代を区分することは有益である。

2つのシカゴ時代のあいだに、ウィスコンシン時代が含まれているが、この時代は、統合失調症患者を治療の対象としていたという点で、前後の時代と研究の性格が大きく異なるからである。また、このように時代区分することは、彼が心理療法家として頭角を現した、ロジャーズ学派の中で位置づけを確認するうえで整合性が取れるからである。

ロジャーズ学派は、現在に至るまで、Hart (1970)の時代区分に基づいて、下記のように時代区分することが多い(村山, 1998; サンダース, 2007)。

1940-1950 非指示的(non-directive)療法の時代

1950-1957 クライエント中心療法(リフレクティブ心理療法)の時代

1957-1963 体験過程療法の時代²⁾

1963- パーソンセンタード・アプローチの時代

上記、「クライエント中心療法の時代」が始まったところに、ジェンドリンは、シカゴ大学に在籍していたロジャーズ³⁾の門下に入る。ジェンドリンの第一次シカゴ時代である。この時代、ロジャーズは、『クライエント中心療法』(Rogers, 1951)においてパーソナリティ理論を初めて定式化し、その数年後に、セラピーにおけるパーソナリティ変化の必要十分条件を下記のように提唱する。

1. 二人の人が心理的な接触を持っていること
2. 第一の人（クライアントと呼ぶことにする）は、不一致の状態にあり、傷つきやすく、不安な状態にあること。
3. 第二の人（セラピストと呼ぶことにする）は、その関係の中で一致しており、統合していること。
4. セラピストは、クライアントに対して無条件の積極的関心を体験していること。
5. セラピストは、クライアントの内的照合枠に対する共感的理解を体験しており、この体験をクライアントに伝えようと努めていること。
6. セラピストの経験している共感的理解と無条件の積極的関心が、最低限クライアントに伝わっていること。（坂中・本山・三國, 2015, p.ii）

上記 6 つの条件の中でも、とりわけ、セラピスト側の態度条件である、第 3 条件「一致」・第 4 条件「受容」・第 5 条件「共感的理解」の 3 つが、現在では中核三条件(坂中・本山・三國, 2015, p.i)と呼ばれて重視されている。

なお、上で「Rogers (1951)の数年後に」とぼかして述べたことの詳細を論じたい。一般に、上記の必要十分条件は、Rogers (1957)が典拠として用いられることが多い。しかし、実際には、のちに公刊された「クライアント中心療法の立場から発展したセラピー、パーソナリティ及び対人関係の理論」(Rogers, 1959)に先立って、その学内紀要版(Rogers, 1955)の時点で 6 つの必要十分条件は既に提唱されていた。したがって、クライアント中心療法の時代に、ロジャーズの門下生が 6 条件に刺激を受けてどのような動向を見せたかについては、1955 年を境目として考えることが有益であろう。

以上のような時代背景のもと、第一次シカゴ時代のジェンドリンは研究者として活動を始めた。この時代に、公刊雑誌に寄稿していなかったとはいえ、ジェンドリンは何も業績を発表していなかったわけではない。調べたところ、当時の彼には少なくとも「学位論文」「学会発表」「大学学内紀要」という、3 種類の表現媒体があったことがわかった。

学位論文は、上記年表のとおり、修士論文(Gendlin, 1950)・博士論文(Gendlin, 1958a)ともに、第一次シカゴ時代の産物である。また、学会発表は、アメリカ心理学会大会にて、1956 年から行っていた(Gendlin & Jenney, 1956; Gendlin, 1958b)。

大学学内紀要とは、シカゴ大学カウンセリングセンターが発行していたディスカッションペーパーのことである。ディスカッションペーパーは、いわゆる公刊雑誌ではない。未

出版稿と公刊論文の中間に位置する媒体であると言えよう。ディスカッションペーパーは、公刊する前のアイデアやリサーチ結果を印刷して大学学内やごく身近な人々に配り、フィードバックを求めるためのものだった。配布のされ方からすると、日本でいえば、「〇〇大学附属カウンセリングルーム紀要」に相当するものである。また見た目は、タイプ原稿を輪転機で回したようなもので、昔の日本でいえば、ガリ版刷りに相当するものである。なお、この冊子は、初代編集者をカール・ロジャーズがつとめ、1955年から1963年まで発行されていた。ロジャーズが必要十分条件を公刊前に初めて内部文書(Rogers, 1955; Rogers, 1956)として発表したのがこの紀要であり、ジェンドリンの先達やジェンドリンが公刊前に内部文書(Cartwright, 1956; Gendlin, 1957; 1958b; 1959; Gendlin & Zimring, 1955; Gendlin, Jenney & Shlien, 1957)として発表したのもこの紀要であった。このような事情から、決して多くの人の目にとまる資料ではなかったが、第一次シカゴ時代のジェンドリンにとって、ディスカッションペーパーは、インプットの素材としても、アウトプットの素材としても、貴重な媒体だったといえる。

クライアント中心療法の時代に続く、体験過程療法の時代が、ウィスコンシン統合失調症治療プロジェクトの時代に相当する。一般にジェンドリンが頭角を現したといわれていた時代である。しかし、この時代に公刊されたジェンドリンの資料の中にも、ウィスコンシン・プロジェクトの成果が上がる前の業績に基づいた著作(Gendlin, 1961; 1962/1997; Gendlin, Jenney & Shlien, 1960)も何点か見受けられる(田中, 2004b, pp.61-62)。とりわけ、彼の初期の主著『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)は、第一次シカゴ時代の集大成として書き上げられた彼の博士論文『象徴化における体験過程の機能』(Gendlin, 1958a)を改訂・改題の上、公刊されたもの(田中, 2005, pp.64-65)である。

第3節 ジェンドリン用語の概説

ここで、先行研究の問題点を挙げる前に、ジェンドリンの各時代に通底する彼独自の用語を最低限解説する。

「フォーカシング」とは、成功した心理療法で、相談に来た人(クライアントと呼ばれる人)たちが概ね共通しておこなっている内的行為をジェンドリンが発見し、これに命名したものである。また、フォーカシングという行為が面接室以外で誰でも行えるような教示法も彼は提唱した。

「フェルトセンス」とは、必要とあれば、「この感情」と注意を向けることができるひとまとまりの体験である。言い換えると、うまく言葉で表現できなくても感じてはられる体験である。フェルトセンスに一定の時間注意を向ける（＝焦点を合わせる）行為がフォーカシングである、と言える。

「体験過程」とは、注意を向けようと向けまいとそこにある体験の流れである。プロセスとしての側面を強調するため、体験を *ing* 形にして、ジェンドリン独自の用語としたものである。彼の著作において、体験(*experience*)は数えられる名詞として主に使われるが、体験過程(*experiencing*)は数えられない名詞として原則的に使われる。すなわち、不定冠詞の *an* が前に付いたり、*experiencings* と複数形になったりすることは、ほとんどない。

体験過程は多様で、数えられない(*multiple, non-numerical*)。一つの体験とは、シンボリックな創造物である。一方、体験過程とは、2つとか5つとか100万とかいった単位からなるものではない。単位などはないのだ。単位となった体験(*a unit experience*)はどれも、いつでも結果として生じた産物なのである…。(Gendlin, 1962/1997, pp.152-153)⁴⁾

体験過程とは、人間の生の恒常的な(*constant*)側面である。例えば、身体的生、新陳代謝、感覚入力などのような側面である。このように恒常的な点において、体験過程は、生の断続的な(*intermittent*)側面とは異なる。断続的な側面とは、例えば、なにかを見たり、足を動かしたり、考えたり、話したり、眠ったりするような側面である。というのは、後者の側面は、何かを見ることもあれば見ないこともあるし、足を動かすこともあれば動かさないこともあるからである。従って、体験過程は、生において、刻一刻と生じる様々で個別な出来事の根底にあるといえる。(Gendlin, 1962/1997, p.14)

「シンボル」とは、フェルトセンスと相互作用するものすべてのことである。例として、言葉、目を閉じたら浮かんだマリモのイメージ、手を振ること、指で差すこと、音楽や絵画などの表現、ぱっと入り込んだ部屋の中の状況などが挙げられる。ただし、Gendlin (1962/1997)の中核部分で、シンボルの例として主に挙げられているのは、言葉、すなわち、一定の文法構造を持った言語的シンボルである。

「体験過程理論」とは、フェルトセンスとシンボルとの働き合い方を論じた理論である。国内では心理療法の理論として有名だが、その射程範囲は、思考、行為、会話、芸術、宗教等々における人間の様々な認知の働きに及ぶ(Gendlin, 1962/1997, pp.63-81)。

第4節 従来のジェンドリン研究における問題点

以上、学者ジェンドリンの時代区分をし、基本用語の概説を行った。その上で、本研究は、のちに公刊された資料のみに基づいた従来のジェンドリン研究における問題点を、三点挙げて、以下で論ずることとする。第一点目として、フォーカシングの成立にかかわる心理療法のリサーチ研究において、ジェンドリンの先達となるリサーチ研究者が十分に紹介されていないため、ロジャーズ学派との連続面が見えにくくなっていることである。第二点目として、ジェンドリンがロジャーズの理論のどこに問題を見出し、批判したのか、その論拠が曖昧にしか記載されていないため、ロジャーズとジェンドリンとの非連続面が見えにくくなっていることである。第三点目として、ジェンドリンの理論的・哲学的な著作と実践的な著作とで使われている用語が異なるため、理論と実践の対応関係が見えにくくなっていることである。以上の問題点三点を、続く第5節から第7節で概説する。

第5節 リサーチ研究者としてのジェンドリン

『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)は、哲学の論文ではあるが、この中には、心理療法の実践、並びに、リサーチによる検証への言及も多い。このため、尺度研究をはじめとした数量的研究に対してジェンドリンはどのようなスタンスを取っていたのか、また本研究が彼のリサーチ研究をどのように位置づけるのかを明らかにする必要があるだろう。なぜなら、三村 (2015)が、Gendlin (1962/1997)を同じく主な考察対象としながらも、『『超越論的機能として』のフォーカシングを解明しようとする』(p.22)スタンスとは、本研究はスタンスが大きく異なると思われるからである。

ジェンドリンの本業が哲学者であることは、彼の業績の大部を占めるのが哲学論文であることから明らかである。アメリカのニューヨークに拠点を置く **The International Focusing Institute** が公開する **Gendlin Online Library**

(http://www.focusing.org/gendlin/gol_intro.asp) では、論文 137 のうち、哲学論文が 75 本であり、続いて、心理療法の論文が 58 本、心理援助法としてのフォーカシングが 24 本、その他の論文が 71 本である。リサーチの論文は、第一次シカゴ時代からウィス

コンシン時代に集中し、第二次シカゴ時代以降は年々減少する。彼の論文のうち、リサーチの仮説提起を目的とする論文や、検証結果を理論的に考察する論文に関しては、単著で書かれたものが多い。しかし、彼の論文のうち、仮説の検証そのものを目的とした論文に関しては、ほとんどのものが共著で書かれている。このことが意味するのは、ジェンドリンは新しい種類の変数を提唱するのは得意としていたが、統計を駆使した実際の検証は、心理学者としての訓練を受けた他のエキスパートに任せていたということである。実際に、彼がかかわった尺度研究「体験過程尺度(experiencing scale)」は、草稿(Gendlin & Tomlinson, 1960)の執筆当初こそ第一著者であったが、尺度が完成した際(Klein, Mathieu, Gendlin & Kiesler, 1970)には第一著者の座を他の研究者に譲っている。

このように、業績の中で量こそ少ないものの、ジェンドリンは数量的研究にかかわっており、かかわったことについては後年も哲学的著作において好意的に言及している(Gendlin, 1973, p.312; Gendlin, 2004, p.150)。これは、哲学者として数量的研究にかかわりながら、同時に嫌悪を感じていたテオドール・アドルノ(Theodor Adorno, 1903-1969)とはかなりスタンスが異なる。

哲学者であり、社会学者でもあったアドルノは、ナチスの迫害から逃れてアメリカへ亡命中、「糊口の資を得なければならなかった」(徳永, 1980, p.2)こともあり、ラジオの調査研究に協力した。その後、『権威主義的パーソナリティ』(Adorno, 1950)の尺度(F尺度)研究を行ったが、彼は「共同研究者ブランツェヴィック女史の過度の数量化をしばしばチェックした」(徳永, 1980, p.2)と言われている。そして、「批判的理論と経験的方法との幸福な蜜月時代は、アドルノにとって五〇年代初頭のころまでの短い時期で終わりを告げる」(徳永, 1980, p.2)。あくまで、亡命中に生活の糧を得るための手段として尺度研究を行っていたことがうかがえる。

一方のジェンドリンは、以前自身が行った尺度研究について、研究を終えた後も積極的にその意義を心理学者に向けて執筆している(Gendlin, 1986)。したがって、年を追うにつれ後進に任せていたものの、尺度研究は、ジェンドリンの学者としての思想形成上で大きな役割を果たしていたとみなすのが本研究のスタンスであり、次章以降も折に触れて積極的に言及することにする。具体的には、彼の心理療法研究における、用語の使い方にしても、リサーチの変数の取り方にしても、彼が独力で開始したというよりは、ほとんどの研究が、ロジャーズ門下のリサーチ研究者の先達に強く恩恵を受けていることを論ずる。

以上の問題点に対する筆者の取り組みは、本研究第Ⅱ部「ロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけ」で行う。

第6節 ロジャーズへの控えめな言及

ジェンドリンの第一次シカゴ時代・ウィスコンシン時代の著作の特徴の一つとして、彼の心理療法上の師である、ロジャーズへの批判的言及が明瞭なかたちで論じられていないことが挙げられる。例えば、彼の第一次シカゴ時代の活動の集大成である『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)では、ロジャーズの中核用語である「一致」の問題点が手短かに論じられてはいるものの、文脈に埋もれがちであり、一致を論じていない他の哲学的な章と併せて読まない限りは、どこにジェンドリンが問題点を見出しているかがわからない構成になっている。加えて、ジェンドリンは、「体験過程の観点から再定式化された一致の概念」(Gendlin, 1959)というタイトルをかかげた、長文の論文をシカゴ大学学内紀要に投稿しているにもかかわらず、その本文中では、ロジャーズ学派が他学派から受ける誤解に対する擁護に終始し、ジェンドリン自身の観点から一致を再定式化した文面はほとんど見当たらない。更に、彼のウィスコンシン時代の活動の集大成である「人格変化の一理論」(Gendlin, 1964)では、従来の代表的なパーソナリティ理論にみられる問題点として、「抑圧パラダイム」と「内容パラダイム」を挙げ、草稿の段階ではその具体例として Rogers (1959)を引用して批判的に言及している (ジェンドリン, 1966, pp.68-89) が、のちの公刊の際、その文面は削除されている。一つ例を挙げれば、ロジャーズの「価値の条件 (conditions of worth)」(Rogers, 1959, pp.224-226)を具体的に引用しコメントする (ジェンドリン, 1966, pp.73-74) のは、のちのジェンドリンにはなかなか見られない貴重なことであるにもかかわらず、公刊の際には全面的にカットされている。こうした事情により、ロジャーズのパーソナリティ理論や心理療法理論との非連続面が見えにくくなっているのである。

以上の問題点に対する筆者の取り組みは、本研究第Ⅲ部「初期体験過程理論の観点から見たロジャーズ用語の再検討」で行う。

第7節 ジェンドリンの理論と実践との乖離

第一次シカゴ時代やウィスコンシン時代の代表作(Gendlin, 1962/1997; 1964)は、理論的な用語が数多く提唱されている。しかし、こうした用語は、のちの、フォーカシングの実践的著作(Gendlin, 1981; Gendlin, 1996)において、あまり使われていなかったり、もしくは使われていてもその意味合いが変容していたりするものが多い。そのため、理論的用语と実践的用语がどこまでが対応し、どこからが対応しないのかが、見えにくくなっている。例えば、フォーカシングには、「6つのステップ」という手順があるが、ここでいう「ハンドルを見つける」ステップや「ハンドルを共鳴させる」ステップが、彼の初期体験過程理論ではどこに位置づけられ、どの用語に対応するのかが、問われないままだった。こうした不問の期間が続いたため、ジェンドリン自身の著作においても、のちのジェンドリン研究二次文献においても、彼の理論は理論、彼の実践は実践と、用語を使い分けたまま乖離した状態が長らく続いた。

以上の問題点に対する筆者の取り組みは、本研究第IV部「初期体験過程理論の観点から見たフォーカシング実践の再検討」で行う。

第8節 本研究の目的と方法

以上、第5節から第7節で論じた問題点三点を解決するため、本研究は、クライアント中心療法とフォーカシングの相互影響関係を再検討し、さらに、現代のフォーカシング実践が持つ射程範囲を明らかにすることを目的とする。具体的には、まず、クライアント中心療法におけるジェンドリンの位置づけを確認する。例えば、一般に、ロジャーズとジェンドリンの相異として、次のようなことが論じられている。「ロジャーズの理論がセラピストの態度を中心にすえているのに対し、ジェンドリンの理論はクライアント個人の体験過程が中心である」(田村, 1990, p.16)。二人が最終的に理論化した結果からすると間違いはないとしても、果たして、ジェンドリンは、セラピスト側の条件を軽視していたのか、クライアント側の条件を初めから重視していたのかなどを本研究は明らかにする。続いて、ロジャーズ学派において、自己概念と経験との「一致」の重視を支持した論客としてとらえられてきたジェンドリンが、実際には「一致」という説明図式にどのような問題点を見出していたかを明らかにする。最後に、こうした検討を経た上で、経験に対応する概念を持たない状態に対するジェンドリンの詳細な論述をもとに、現代のフォーカシング実践の

理論的理解をジェンドリン以上に明らかにする。

以上のような目的を達成するために、本研究では、ウィスコンシン統合失調症治療プロジェクトの成果が反映される前のジェンドリンの業績について、テキストベースに検討することを手始めとする。具体的には、彼の学位論文・学会発表・学内紀要を時系列に並べ、そこで採用された変数の取り方、用語の採用の仕方を抽出するという方法を採用する。加えて、ジェンドリンの初期体験過程理論のテキスト(Gendlin, 1962/1997)をベースにして、ロジャーズ自己理論のテキスト(Rogers, 1959)やフォーカシング指向心理療法の逐語記録とその体験過程尺度の評定を再検討する。

第9節 本研究のスタンスと構成

以下に論述を進めていく上での、本研究のスタンスを提示する。ジェンドリンの初期体験過程理論を考察対象として、その哲学的意義を論じた三村(2015)は、以下のように論じている。

筆者の見るところ、フォーカシング実践を介することは、ジェンドリン哲学そのものの考察に対して、一定のバイアスをかけるものとなっている（それはジェンドリン自身の論述のなかにも見いだされる）。（三村, 2015, p.20）

だが、本研究の立場からすれば、フォーカシング実践を介した従来の研究（パートン, 2006; 諸富・末武・村里, 2009; 得丸, 2010; 末武, 2014）は、バイアスをかけているというより、バイアスが「無自覚なままかかっていた」というのが正確である。また、本研究の立場からすれば、三村(2015)の「われわれの意識活動のうちで、たえず必然的に機能し、われわれのさまざまな認知や行為を可能にするもの、体験そのものを成立させるもの」(p.21)を問い続けるスタンスは、時には「体験過程理論を、心理療法、セラピーセッションを手掛かりにして理解することの危険性を指摘」(p.99)することもある。こうしたスタンスにより、方法としての狭義のフォーカシング実践によってかかったバイアスを解くことに、三村(2015)の意義がある。

だが、フォーカシング実践を介した従来の研究に対する本研究のスタンスは、三村(2015)とは正反対である。むしろ従来よりも、フォーカシング実践を介したバイアスを「自覚的にかける」というスタンスである。つまり、Gendlin (1962/1997)が本来は哲学の論文とし

て保っていたバランスをあえて崩し、心理療法の実践にとって身近なところから手繰り寄せ、その意義を抽出するというスタンスである。Gendlin (1962/1997)の副題は「主観性への哲学的・心理学的アプローチ」だが、本研究は「心理学的アプローチ」にへより重きを置き、優先する。このようにして手繰り寄せ、抽出した結果得た知見が「カウンセリングやセッションという特定の場面ではなく、われわれのあらゆる日常的な体験のなかで、暗黙的にたえず遂行されているものとして捉えられる」(三村, 2015, p.21)ような射程範囲を時として持つことがあるとすれば、その都度そうした知見を敷衍させ、付記として論ずる(もしくは今後の課題とする)という論述の手順をとる。こうした論述の手順は、本研究の各章においても、本研究の全体の構成に関しても当てはまる。

第 I 部を終えるにあたり、本研究第 II 部以降の構成を簡単に論じておく。

第 II 部でウィスコンシン以前のジェンドリンの業績を論ずることで、まずは、哲学の修士論文を書いたジェンドリンがどのような経緯でロジャーズを訪れたかを概説する。そして、ロジャーズ門下に入って彼が始めた「クライアントがいかにかに話すか」の研究において、ロジャーズ学派の二人の先達と連続性があることを示す(第 2 章)。続いて、彼が始めた研究の結果をカテゴリー化する際に導入した「内容」と「過程」という変数の名称の対比が、ロジャーズ学派の別の先達に由来することを明らかにする(第 3 章)。最後に、フォーカシングの成立にかかわった研究として、「治療の成否の予測」の研究が、「いかにかに話すか」を調べる研究とは別の研究の流れに由来することを、さらに別の先達の研究を検討することによって明らかにする(第 4 章)。これらジェンドリンの先達の研究との連続性を明らかにすることにより、ロジャーズ学派におけるジェンドリンの立ち位置を明確にする。

ウィスコンシン以前のジェンドリンの業績を検討するという本研究のスタイルを維持しつつ、第 II 部と対照的に、続く第 III 部では、ロジャーズの理論とジェンドリンの理論との非連続性を示す。言葉と経験の関係をめぐる、ロジャーズの「重なり合い」という考え方とジェンドリンの「働き合い」という考え方との違いである。具体的には、まず、ロジャーズの「一致」ということで一般に知られる、セラピストの態度条件を中心とした最新の研究書をレビューする(第 5 章)。レビューをもとに、ロジャーズであれば「一致」と呼んでいた態度や状態を、ジェンドリンの体験過程理論に基づけばどのようにとらえ直すことができるかを明らかにする(第 6 章)。

以上、ロジャーズ学派におけるジェンドリンがどのような位置にあったかを確認したう

えで、第 IV 部ではそうした立ち位置の中で形成された彼の理論が今日のフォーカシング実践を理解する上でどのように新たな局面を明らかにできるかを検討する。具体的には、まず、経験に対応する概念が存在しない状態を論ずるためにジェンドリンが導入した用語「直接参照(direct reference)」を取り上げ、従来の心理療法で使われてきた、象徴化や一致といった用語との対応関係を検討する(第 7 章)。続いて、フォーカシングにおける有意義な沈黙において行われている作業が直接参照であることを、セッションの逐語記録をもとに検討する。さらに、直接参照が行われるために、話し手と聴き手がどのようなやり取りを行っているかを筆者が具体的に明らかにする(第 8 章)。

最後に、第 V 部では、第 IV 部までで明らかとなった知見を踏まえて、総合的に考察し、本研究の総括を行い、課題と今後の展望について論ずる。

注

- 1) 本章は、田中秀男 (2004b) : ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究 (上) : 心理療法研究におけるデルタイ哲学からの影響 図書の譜, **8**, 56-81. の一部を利用し、大幅に加筆修正したものである。
- 2) なお、ここでいう「体験過程療法」とは、あくまでロジャーズ学派の一時代のことを指しており、のちのフォーカシング指向心理療法の同義語としての体験過程療法とは一応区別する必要があることは、伊藤 (1998) を参照のこと。
- 3) ロジャーズがシカゴ大学に在籍していた頃、彼のもとには優秀な教え子が数多く集まっていた。中には、ジェンドリン同様、優れた博士論文を書いてロジャーズの心理療法理論に逆影響を与えた先達もいる。以下に代表的な例を提出先別に分類し、テーマを挙げる。
 - ・教育学部 : Hogan (1948) : クライエントの「防衛性」
 - ・人間発達コミッティー : Sheerer (1949) : 自己受容が他者受容につながる
 - ・心理学部 : Fiedler (1949) : セラピストの学派よりも熟練度が治療の成功と相関
 - Standal (1954) : 無条件の積極的関心このように提出先は分かれるが、いずれにしても心理学、教育学、発達といった分野であって、哲学の分野ではなかった。
- 4) 以下、本研究各章における英語引用文の日本語訳は、既訳を参照しつつも、訳書の併記がない限り、訳語を統一する都合上すべて筆者訳である。

第Ⅱ部 ロジャーズ学派における
ジェンドリンの位置づけ

第Ⅱ部 序

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で挙げた従来の研究の問題点のうち、ロジャーズの下で臨床の仕事始める前後を確認したうえで、リサーチ研究者としてのジェンドリンの業績の再検討を行う。もともと哲学専攻の大学院生だったジェンドリンによって行われたリサーチにおける用語法は、彼一人の恣意的な発想で提唱されたものなのか。加えて、そうしたリサーチ研究がのちのフォーカシングの成立に影響を与えたとすれば、リサーチは、一つの流れなのか、複数からなる流れなのか。あるいは、ジェンドリンが最初から主導的に行っていたのか、当初ジェンドリンは参加していなかったのか。以上のような点を検討する。これによって、ウィスコンシン以前のジェンドリンがどのような業績を挙げることができたか、あるいは、業績こそ挙げられなかったものの、今後の課題として、いかなる問題意識を抱えていたのか。以上のような点を確認する。以上の確認の上で、第1次シカゴ時代における、ロジャーズ学派の中でのジェンドリンの立ち位置を確定する。

第2章 修士論文から初のリサーチまで¹⁾

第1節 導入：ロジャーズ門下生として業績を挙げるまで

ロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけを知るためには、ジェンドリンがロジャーズの下で仕事をする前に何を研究していたのか、どのような問題意識をもってロジャーズの元を訪れたのか、持っていた問題意識をもとにどのようにロジャーズ学派の中で頭角を現してきたのかといったことを知る事が不可欠である。

以下、第2章では、第一次シカゴ時代のジェンドリンの業績を、未公刊資料（彼の修士論文・学内紀要論文）を中心に着想順に追ひ、解説する。この時代、当初ジェンドリンは哲学を専攻していて、のちに心理療法の世界にも入っていった。そこで、大学院生時代にどんな哲学を専攻していたか簡単に紹介し、その後どのような問題意識を持って哲学の世界から心理療法の世界へ飛び込んだか、大学院生時代に培った哲学の思考法がのちの心理療法研究における変数の取り方や理論の組み立て方にどのような影響を与えたか、といったことを中心に当時のジェンドリンの業績を検討する。

第2節 ジェンドリンの哲学修士論文（1950年）

2-1. 概要と先行研究

概要 修士論文『ヴィルヘルム・ディルタイと精神科学における人間的有意義性の把握の問題』（Gendlin, 1950）は、ドイツの哲学者ディルタイの思想を研究したものである。ディルタイの鍵概念「Erleben（体験）」の英訳語として *experiencing* が提唱されている。またこの時点で、翌年に公刊される「クライアント中心療法」（Rogers, 1951）の草稿が引用されている。

先行研究 修士論文の執筆当時を回想して、のちのジェンドリンはこう語っている。

ヨアヒム・ヴァッハがディルタイに導いてくれた。当時ディルタイは翻訳されていなかった。だが、ドイツ語を知っていた。12歳になるまでウィーンに住んでいたからである。（Gendlin, 1989, p.405）²⁾

ディルタイの死後40年ほど経った当時でも、英語圏ではディルタイの哲学がそれほど普及していなかった。そのため、修士論文巻末の参考文献欄において、ディルタイ哲学に関する英文の先行研究が挙げられているのは Hodges(1944)のみである。Hodges(1944)は、

英語圏のディルタイ研究書としては、最も早い時期に属するものである。なお、Hodges(1944)が刊行されて2年後、ジェンドリンの師ヴァッハが同書に対し、好意的な書評(Wach, 1946)を寄せている。

2-2. ディルタイとは

ジェンドリンは最近、「おそらく、今日の私の哲学への最もラディカルなインパクトはヴィルヘルム・ディルタイに由来する」(Gendlin, 1997, p.41)と回想している。Gendlin (1950)において最も言及されることが多いのは、晩年の著作・遺構を集められた、ディルタイの著作全集第7巻(Dilthey, 1927)である。ジェンドリンの修士論文について論じる前に、まず、そもそもディルタイとはどんな哲学者なのか、確認しておきたい。

ディルタイ概説 まず、哲学者ウィルヘルム・ディルタイ(Wilhelm Dilthey, 1933-1911)について、基本的なことを以下に挙げる。

- ・19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ドイツで活躍した哲学者である。哲学史においては、「解釈学」や「生の哲学」といった学派の中に入れられることが多い。
- ・ドイツ哲学の用語として、「経験(Erfahrung)」とは別に、「体験(Erleben, Erlebnis)」という用語を定着させた。

以下、これらの中では、のちの彼の心理療法に強い影響を与えたものとして、本研究は「体験」という用語に注目する。

ドイツ語の「体験」概念の成立とディルタイの貢献 ドイツ語において、「体験」という用語が持つ意味、ならびに、用語「体験」の成立におけるディルタイの役割を確認する。ディルタイの「体験(Erleben)」こそ、のちのジェンドリンの「体験過程(experiencing)」の元となった言葉だからである。

現代ドイツ語の名詞には、英語の名詞 *experience* に当たるものが複数ある。大きく分けると、以下の二種類になる。一種類目の“*Erfahrung*”は、通常日本語で「経験」と訳されているものである。二種類目の“*Erleben*”あるいは“*Erlebnis*”は、通常日本語で「体験」と訳されているものである。

ドイツ語の「体験(Erleben, Erlebnis)」は、「経験(Erfahrung)」と比べた場合、より「直接的」だというのが哲学研究者の間で共通した見解である。ガダマー(1986)は、体験とは、「ただ他人から聞いたことや、うわさから出たもの、推論や、憶測や、想像しただけのものとは正反対のもの」だという(p.87)。マックリール(1993)は、体験を外的经验と対置

してこう言う。「体験という現象は、確実性をもって与えられるが、外的経験の対象は、少なくとも部分的には推論の所産である」「実際ディルタイは、しばしば、体験と内的経験を、あたかもそれらが同じ物を指しているかのように扱っている」(マックリール, 1993, p.175)。

英語では、この2種類の用語にそのまま対応する言葉がない。あえて区別する場合には、「Erfahrung(経験)」の方を単に *experience* と訳し、「Erleben, Erlebnis (体験)」の方をまとめて *lived experience* と訳すのが定訳となっている(マックリール, 1993, p175)。

「Erleben (体験)」は「Leben (生)」に接頭語を付けてできた言葉なので、生(life)の意味合いを生かして英訳されたのであろう。実際、ディルタイの哲学においては、「生」概念と「体験」概念はかかわりが深く、ときには、両概念が置き換え可能な用語として使われていることもある。

ガダマー (1986) は「実際のところこの〈体験〉という語に概念としての機能を最初に与えたのはディルタイにはほかならなかった」と論じている(ガダマー, 1986, p.88)。

2-3. ディルタイの「体験(Erleben)」のジェンドリンによる英訳

ジェンドリンの修士論文で興味深い意識をしているのは、ドイツ語の *Erleben* や *Erlebnis* を英訳している箇所である。

ジェンドリンが初めて *Erleben* と *Erlebnis* とを区別したのは、修士論文の第3章「体験することと思考すること (*Experiencing and thinking*)」の冒頭である。ジェンドリンの主張はこうである。ディルタイ哲学において、*Erleben* は「過程ないしは機能(*the process or function*)」をさすので *experiencing* と訳す。一方 *Erlebnis* は「単位となった体験(*a unit experience*)」をさすのだというのである(Gendlin, 1950, p.13)。

この訳し分けの部分こそ、ジェンドリンが「*experiencing* (体験過程)」という用語を初めて使った箇所である。従来、ジェンドリンが用いるこの *ing* 形が何に由来するものなのかは永らく謎だった。しかし、上記のように、既にこの時点で *experiencing* と *experience* を明確に使い分けていたのである。つまり、この使い分けは、ロジャーズのもとで心理療法の仕事を始める前から行なっていたことを意味する。

確かに、ディルタイ研究者の間で、*Erleben* と *Erlebis* の間に違いが見られることを指摘する者もいた。たとえば、Bollnow (1936)は、ディルタイの遺稿を典拠に、両概念にわずかな違いが見られるときがあることを指摘している(Bollnow, 1936, p.85)。また、

Erleben は体験の動的・作用的側面をあらわし、Erlebnis は体験の静的・内容的側面を表わすことがあるという指摘も全くなかったわけではない。だが、それにしても、使い分けられているときがわずかに見られるという程度である。

英語圏においてはどうか。筆者が調べた限り、両概念がジェンドリン以前に明確に訳し分けられていた形跡は見当たらなかった。Hodges (1944)や Wach (1946)では、Erleben を experiencing と訳している形跡は見当たらない。

結局のところ Erleben と Erlebnis の使い分けは、ディルタイが明確に行なったと考えるのは難しい。両用語の区別について、三村(2015)は、「体験 Erlebnis に対して、フッサールは体験の働き、体験作用を表すために、頻繁に「体験する」という動詞の名詞化 das Erleben を用いている」(p.70)と論じている。両用語の使い分けについては、ディルタイに由来を求めるよりは、フッサールとの対応関係を論じた方が生産的であるという点では、三村 (2015)の見解に賛同する。

2-4. 修士論文におけるロジャーズへの言及

ジェンドリンの修士論文で興味深いのは、現代の学問における理解の方法論を論じ終えた後、巻末の「注記(Notations)」(Gendlin, 1950, pp.63-65)において、近年の各人文・社会科学者の論文を引用したり、若干のコメントを寄せたりしていることである。のちにシンボリック相互作用論で有名になる社会学者のハーバート・ブルーマー、新古典派の経済学者フランク・ナイト、文化人類学者のロバートレッド・フィールドなど、シカゴ大学ゆかりのそうそうたる学者の論文が言及されている。

こうした中で、のちのジェンドリン心理療法研究に最もかかわりが深いのが、公刊前のカール・ロジャーズ著『クライアント中心療法』(Rogers, 1951)の草稿を引用していることである。具体的には、「行動を理解するために個人の内的準拠枠(internal frame of reference)を活用する」(Gendlin, 1950, p.64)といった個所である。厳密な抜粋というよりは、『クライアント中心療法』の第12章「パーソナリティと行動の理論」の命題7とそれに続く論述(Rogers, 1951, pp.494-497)をおそらくジェンドリンなりに要約したものと言えよう。この時点でジェンドリンがロジャーズの下で臨床に仕事に参加したという証拠はない。しかし、少なくとも、この時点でジェンドリンはシカゴ大学学内で公刊前のロジャーズの草稿を入手できる立場にあったことは確かな事実である。

第3節 哲学から心理療法へ（1952年以前）

ここでは、研究業績の紹介はひとまず脇に置き、ジェンドリンの経歴的な側面を紹介したい。ジェンドリンが哲学の世界から臨床の世界へ、いつ、どのように飛び込んだのかということを確認する。

修士論文を書く前なのか、後なのかははっきりしないが、シカゴ大学カウンセリング・センターのスタッフになる前に、ジェンドリンはセンターをぶらりと訪れている。非指示的アプローチなるものがあるとうわさを聞きつけて訪れたのだという。

「概念を超えたところの経験とは何か」ということをもっと知りたかったのです。セラピイのなかではそれがいつも行われているのではないかと思いつきました。(ジェンドリン・伊藤, 2002, pp.197-198)

他にも、「我々は体験 [= 経験] をどのように象徴化しているのか」などといった自分の哲学の課題をはっきりと持ちながらセンターを訪れたそうである。

そして、センターを初めて訪れた時のことをのちにインタビューでこう回想している。

待合室に、センターのスタッフが書いたものが置いてあるのを見つけました。…クライアントのふりをして一冊借りて帰りました。読んでますます興味を持ちました。まさに人々は生き生きと体験を象徴化していたんです。(Gendlin & Lietaer, 1983, p.78)

その後、どのくらい後のことかはわからないが、ジェンドリンはロジャーズの面接を受け、即座に一年間の実習を許可された(Gendlin, 2002, p.xvi)。実習を終了したのち、翌年にはインターンとなっている。以上が哲学の世界から心理療法の世界への順序である。なお、ジェンドリン本人の証言によれば、ロジャーズと仕事を始めたのは 1952 年からとのことである(Gendlin, 2002, pp.xi)。

心理療法の仕事をしていくうち、ジェンドリンは「その場で起こっていることに哲学の考え方を適用できる」(Gendlin & Lietaer, 1983, p.78)と思うようになった。そして、心理療法の仕事を始めてから 3 年後の 1955 年、ジェンドリンは共著論文を発表する。

では、その共著論文を次の第 4 節で解説・検討する。

第4節 論文：体験過程の特質とその変化（1955年）

4-1. 概要と経緯

概要 この論文(Gendlin & Zimring, 1955)は、「体験過程」という概念を、心理療法研究の鍵概念として初めて提唱した論文である。実証研究そのものではなく、実証研究への仮説を提案したものである。

経緯 まずジェンドリンは、同僚のフレッド・ズィムリングとともに、ロジャーズが主催する「クレイジー・アイデア」というセミナーにおいて口頭発表をした。発表内容をジェンドリンらはカウンセリングセンター・ディスカッションペーパーに寄稿した(Gendlin & Zimring, 1955)。なお、この論文は約40年後に公刊雑誌に再録された(Gendlin & Zimring, 1994)。

4-2. この論文の特徴

「体験過程」という用語を使う領域が、哲学から心理療法へと変わるに当たって、意味合いに変化が生じたかどうかを検討する。

心理療法用語としての「experiencing (体験過程)」「experiencing (体験過程)」 という用語そのものは、修士論文で使われていたが、心理療法の世界で使われたのはこの論文が初めてである。この論文での「体験過程」は、たしかにディルタイの体験概念の持つ意味合いを保ってはいる。だが、心理療法の用語となるにあたり、当然意味合いがそれなりに変化しているところがある。

特徴的なのは、「体験過程」をとりわけ感情と結び付けて論じていることであろう。

「体験過程」という用語によって我々が意味したいのは、有機体の内側で進行していて、感じるができるものすべてのことである。(Gendlin & Zimring, 1955, p.1)

ほかにも、「感じる (feel)」や「感情 (feeling)」といった言葉が、この論文には頻繁に登場する。

ロジャーズの理論との連続性 この論文には、ジェンドリン独自の用語法が見られ始めている。だが、そうした用語法が、ロジャーズの用語法とどう対応するかが言及されてい

る点が彼ののちの論文だけを参照するより、優位な点があると考えられる。例えば、この論文では、ロジャーズの「パーソナリティと行動の理論」における下記の命題 19 が言及されている。

人は、自分の有機体の経験を自己の構造の中へと知覚し受容するにつれて、大部分は歪曲してシンボル化されていた、他者からの取入れに基づく現在の価値のシステムを、連続する有機体の価値づけのプロセスに置き換えていることに気づく。(Rogers, 1951, p.522)

そして、「他者から取り入れられた価値のシステム」から「連続する有機体の価値づけのプロセス」へ置き換わっていくことと、ジェンドリンらがこの論文中で術語化する「構造的な体験過程」から「プロセスと呼ぶ別の種類の体験過程」へセラピーの中でクライアントが動いていくこととは、「同一の方向性」であると明言している(Gendlin & Zimring, 1955, p.9)。この当時のジェンドリンの論述に注目すると、ロジャーズとの連続性がより見えやすいと言えよう。

「直接性(immediacy)」について 変数の一つとして、体験過程の「直接性(immediacy)」が提唱されている。直接的でないときには、体験過程から離れていて、「観察者のような立場で感じている」(Gendlin & Zimring, 1955, p.5)状態なのだという。

クライアントが「観察者のような立場で感じている」発言を現代の心理療法の例から挙げる。池見(1995) は、内科の患者を面接していて困ったときの体験についてこう述べている。

この患者は発病前に自分が設立し、経営する会社が倒産した、という大変なストレス状況を生きていた。しかし、面接ではまったく感情表現がないのである。「どう感じているのですか」と聞いてみても、「資本主義社会だからあたりまえのことですよ、強いほうが生き残る、弱いものは倒れる」という、解説者風の発言しかない。いくら情緒的な面に触れようと思っても、解説者のような反応しか返ってこない。(池見, 1995, pp.37-38)

この患者に、「解説者風の発言しかない」のは、体験過程を「観察者のような立場で感じている」だけだからと言える。

4-3. のちの著作との関係

体験過程の「直接性」は、翌年の実証研究において、さっそく変数として用いられることになる。

そして、「直接性(immediacy)」という用語はのちの「人格変化の一理論」でも使われている(Gendlin, 1964, p.127)。また、この用語に限らず、「人格変化の一理論」で使われている多くの用語が既にこの時点で多く使われている。「体験過程の様式(manner)」「構造拘束的(structure-bound)」「凍結した(frozen)」などといった用語である。

この論文の第3部は、「心理療法を受けた結果なぜ変化が起こったのか」を理論的に考察している。ジェンドリンが、「パーソナリティ」ではなく「パーソナリティ変化」について理論的に考察し始めたのは、なにもウィスコンシンへ行ってからではなかったのである。

また、まだ仮説の段階ではあるが、クライアントの発言の分析において、何を話すか以外のものを変数に取りたいとすでにこの時点で言っている。挙げられている例は、「私は怒っている」や「私は愛されている」という発言に対する変数の取り方である(Gendlin & Zimring, 1955, p.2)。従来の研究では、これらの発言は、感情が否定的か肯定的かということで異なるカテゴリーに振り分けられていた。それに対し、内容は異なっても、体験過程の強さ(intensity)や、よどみなさ(fluidity)や、直接性(immediacy)など、新しい変数から見れば、同じと見なすこともあり得るのだとジェンドリンは主張する。こうした新しい変数のことを、当時のジェンドリンは、体験過程の「特質(qualities or dimensions)」とまとめて呼んでいた。変数の名称としての「特質」は、のちの著作では使われなくなる。しかし、「直接性」など個々の変数は、のちの著作でも「体験過程の様式(manner)」や「過程変数」などと名前を変えた総称の中で重視され続けることとなる。果たして直接性などの変数はどのような変遷と発展をたどるのか。まずは、ここで仮説として提唱された変数が、翌年の実証研究で証明されたことを続く第5節で確認する。

第5節 ジェンドリン初の学会発表：セラピーにおける過程と結果のカウンセラーによる評定（1956年）

5-1. 概要・先行研究・経緯

概要 実証研究で、治療関係に関する評定尺度を中心にした 6 つの尺度を選び、セラピーの成功との相関関係を調べたものである。

先行研究 この研究には、先行研究が 2 つある。一つは、フィードラーとシーマンの実証研究論文 (Fiedler, 1950; Seeman, 1954) である。

Fiedler (1950) の結論は、治療の成功は、セラピストの学派の違いよりも、セラピストの熟練度と相関関係がある、というものだった。とりわけ熟練したセラピストがかもし出す治療関係が大事だと主張していた。

Seeman (1954) は、カウンセラー (セラピスト) による評定尺度を 9 項目挙げ、セラピーの成功評定との相関関係を調べたものである。うち、唯一相関関係がなかったのが、第 4 項目「クライアントが治療関係自体を、とりわけセラピーの話題にしていたか」であった。この結果に対してシーマンはこう考察している。

第 4 項目の結果にはいささか驚いた。近頃クライアント中心療法では、治療関係こそが大事なのだとされていたからである。セラピーにおいてクライアントがとりわけ治療関係自体を話題にしていれば、ぐっと大きな変化が起こってくれるだろうと私たちはひそかに当て込んでいた。だが、当ては外れたのである。そうは言っても、治療関係が重要でないことを意味するわけではないことは指摘しておくべきであろう。第 4 項目が扱っていたのは、治療関係をはっきり (explicit) と口に出していたかということだけだからである。(Seeman, 1954, p.104)

治療関係が重要であるということと、治療関係を話題にしたからといって治療が成功するわけではないということ、二つの言い分の中に果たして折り合いはつくのか。この問題を引き継いだのが、今回のジェンドリンらによる学会発表である。

経緯 1956 年 8 月、ジェンドリンはアメリカ心理学会大会で初の発表を、同僚の R. ジェニーとともにおこなった (Gendlin & Jenney, 1956)。翌年には、発表をディスカッションペーパーで報告している (Gendlin, Jenney & Shlien, 1957)。なお、学術雑誌に公刊されたのは、ジェンドリンがウィスコンシンに移った後のことである (Gendlin, Jenney & Shlien, 1960)。

5-2. この研究の特徴

クライアントの発言を、いくつかの尺度でカウンセラー（セラピスト）が評定し、治療の成功／失敗との関わりを調べるという点では、シーマンの先行研究とスタイルは同じである。違いは尺度の取り方の幅が広がったことである。

尺度に使った項目を、治療の成功／失敗とのかかわりで分類すると、以下の2種類になる(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960, p.211)。まず、成功／失敗と相関がなかった項目は、「治療関係を取りわけ話題にしたか」「セラピストのことをとりわけ話題にしたか」「過去の出来事を取りわけ話題にしたか / 現在の出来事を取りわけ話題にしたか」であった。一方、成功／失敗と相関があった項目は、「治療関係から新しく重要な体験が生じたか」、「カウンセラーとの治療関係を、自分の対人関係がうまくいかないことの一例として話したか」、「感情を直接的に『表現した』か／感情について『報告した』か」であった。

最後の項目は、'55年論文で取り上げられた「体験過程の直接性」が、「表現の直接性」と名前を変えて項目に挙げられたものだといえる。また、'55年論文で述べられている「観察者のように感じている」にすぎない発言が、ここでいう尺度の低い例のあたるといえる。

5-3. のちの著作との関係

この研究で上がった成果は、のちのジェンドリンの著作において繰り返し取り上げられることになる。ここでは、ウィスコンシン時代以降にも引続き取り上げられたテーマに言及しておきたい。

「表現」と「報告」の対比について 「表現」と「報告」の対比は、のちの体験過程尺度(experiencing scale)の高低に受け継がれる。ジェンドリンの著作目録において、experiencing scale という言葉が初めて現れるのは、ウィスコンシン時代の Gendlin & Tomlinson (1960)である。これに改良が加えられ、一応の完成を見たのは、第二次シカゴ時代の Klein, Mathieu, Gendlin & Kiesler (1970)であった。

なお、クライアントによる「報告」調の発言は、ウィスコンシン時代の論文「人格変化の一理論」のなかで、「説明的旋回」(Gendlin, 1964, p.125)と呼ばれるようになる。

治療関係の重要性の意味 今回の研究によって、治療関係を話題にしたからといって治療が成功するわけではないことは改めて確認された。このことと、治療関係が重要であるという主張との間にジェンドリンは折り合いをつけようとする。彼はウィスコンシン時代の「人格変化の一理論」において下記のように論じている。

心理療法における「自己探究」は、言っている内容の点でだけ、人との「関係」と区別できるのだ。進行する体験の過程としては、どちらもいっしょである。クライアントは「ここでだけ、私は私でいられるんです」と言うかもしれない。…あるいは、ほとんど自分のことについてだけ話すかもしれない。だが、言っている内容が自分のことであろうと、人との関係のことであろうと、過程は同じなのである。(Gendlin, 1964, p.136)

第6節 結語

以上、第2章では、ジェンドリンが哲学の修士論文を書き上げ、ロジャーズの下で心理療法の仕事を始め、新たな変数を提唱し、その変数を同僚とともに検証するまでを時系列に検討した。ロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけということで筆者が注目したのは、ロジャーズの下で心理療法の仕事を始める2年前の時点でジェンドリンがロジャーズの「内的準拠性」に関する論述(Rogers, 1951)に言及していたこと、並びに、**experiencing** という用語を **experience** と区別して既に使用していたことである。ロジャーズの下で仕事を始めた初期の業績として参考になると思われるのは、**experiencing** という観点からロジャーズの「取り入れられた価値」の理論を(Rogers, 1951)を彼なりの術語で再定式化を試みていたこと、クライアントが「何を話すか」以外の新しい変数を採用することを当初から積極的に彼自身が考えていたことなどである。また、リサーチのエキスパートである同僚とともに、そうした新しい変数を検証したことである。

以上、第2章により、ウィスコンシン時代よりも前のジェンドリンの業績を確定させるための基盤を確保した。ただし、1956年の学会発表までの業績では、今日フォーカシングと呼ばれているものを支える研究としては、理論化されていないことやまだ検証されていないことが多くある。例えば、心理療法の「過程」を研究するということは何を意味し、何を意味しないかは、まだ十分に吟味されていない。あるいは、クライアント側がいかにか何を話すかを評定することと、ロジャーズの必要十分条件との関係は明らかにされていない。こうした課題は、続く本研究第3章・第4章で検討することとする。

注

- 1) 本章は、田中秀男 (2004b) : ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究 (上) : 心理療法研究におけるデイルタイ哲学からの影響 図書の譜, **8**, 56-81. の一部を利用し、加筆修正したものである。

第3章 ジェンドリンの心理療法研究における過程変数¹⁾

第1節 導入：「過程」は何と対比されるのか

前章末尾では、ジェンドリンが新たな変数の検証を行ったジェンドリン初の学会発表を概説した。この発表当時は、「過程と結果の評定」というタイトルが示す通り、「過程(process)」という用語を、「結果(outcome)」と対比の下に用いていた。しかし、のちに彼がこの検証結果を理論化するにあたって「過程」という用語を、「内容(content)」という用語と対比し、意味合いを変更して用いるようになる。この変更は、ジェンドリン個人の恣意的な発想によるものではなく、ロジャーズ学派の先達がいた。本章では、この先達から何を引き継ぎ、ジェンドリンがどう理論化を行ったかを論じ、加えて、理論化された事柄の中に現代のフォーカシング実践に通底する知見があるとすれば何かを論ずる。要約すると、本章の目的は、ジェンドリンが自身の心理学論文において、「過程」という用語を、通常用語法である「結果」の反対語ではなく、「内容」の反対語として用い始めたことの特異性に着目し、その意義を考察することである。

ジェンドリンは、元々哲学者であり、晩年まで現役の哲学者として執筆活動を続けた(Krycka, 2018)。しかし、彼の業績として一般に知られているのは、心理療法家としての業績であろう。彼はシカゴ大学カウンセリングセンターのスタッフ(1952-58)やウィスコンシン大学での統合失調症治療プロジェクトのディレクター(1958-63)として頭角をあらわし、のちに「フォーカシング」を提唱した。ジェンドリンが、クライアント中心療法の提唱者、ロジャーズのもとをどのような経緯で訪れたかについては、前章で論じた。

ジェンドリンの哲学的著作において、「過程(process)」という用語は、重要な概念である。近年の哲学的著作のタイトルが『プロセス・モデル(A Process Model)』(Gendlin, 1997/2018)であることから、その重要性は明らかであろう。Gendlin (1997/2018)をはじめとした哲学的著作において彼が使った「過程」という用語については、その意味合いが国内のフォーカシング研究者の間で解説され始めている(諸富・末武・村里, 2009; 得丸, 2010)。

一方、ジェンドリンの心理学的著作においても、「過程(process)」という用語は、重要な概念である。しかし、過程という用語で、ジェンドリン本人がリサーチにおいてどこまでを指し示し、どこからは指していないのかについては、これまでほとんど国内で論じられてこなかった。

そこで、本章では、ジェンドリンの様々な時代の一次文献を統合的なかたちで整理することによって、彼が心理療法のリサーチにおいて、「過程(process)」という用語の意味合いをどのようにずらして使ったのか、なぜずらす必要があったのかを考察する。具体的には、ロジャーズとジェンドリンの間をつなぐリサーチ研究者として、デズモンド・カートライト(Desmond Cartwright, 1924-)に着目する。これにより、クライアント中心及びフォーカシング指向心理療法の発展の捉え直しを提唱する。

第2節 「過程」という用語の多義性

2-1. ジェンドリンにおける「過程」の特異性

ジェンドリンが今日の「フォーカシング」を提唱するきっかけとなったリサーチ結果として、「患者たちが何を話すかという点に違いはない。違いは患者たちがいかに話すかという点にある」(Gendlin, 1981, p.3)ということがしばしば挙げられる。ジェンドリンが先行研究をもとにして、「何を話すか」から「いかに話すか」に変数の取り方を転換したのは、前章で論じたように1956年の学会発表が初めてのことである。

ただし、1956年の学会発表においては、変数の特徴を表す用語としては、「過程」という用語がまだ使われていない。発表から7年後になって、ようやくジェンドリンは、この変数の転換について「過程」という用語を用いて以下のように論述するようになる。論文「心理療法研究のために過程変数」(Gendlin, 1963a)から一節を挙げる。

効果的なリサーチ変数のために私が提唱したい第5の特徴は、そうした変数が内容変数というよりも、過程変数であるということである。…最近になって我々は、言語行動を単に内容の観点から——「何を」話すか——という観点から分析するだけでなく、それと同時に人が「いかに」自分自身を表現するかという観点から分析することもできるとわかりつつあるのだ。(Gendlin, 1963a, p.4)

すなわち、「何を」の方を「内容」と命名し、「いかに」の方を「過程」と命名して、2つの用語を対比するようになったのである。

しかしながら、こうした用語の対比は、「過程」という言葉の通常の用法からするといささか奇妙である。なぜなら、一般的には、「過程」を「内容」と対比するという発想がなく、

対比すること自体に無理があると思われるからである。また、通常の心理療法のリサーチにおける「過程」という用語の使い方とずれていると思われるからである。そこで、以下では、まず、「過程」や「内容」の定義や通常用語法を確認し、次に、ジェンドリンが「過程」と「内容」とをなぜあえて対比させるに至ったのかを検討する。

2-2. 通常用法における「過程」

「過程」とは、国語辞典『大辞泉』によれば、「物事が変化し進行して、ある結果に達するまでの道筋」とあり、類義語として「経緯・いきさつ」などが挙げられている(松村, 1998, p.733)。「達するまでの道筋」の方に重きが置かれていることから、過程は「結果」と対比されていることがわかる。「過程」の日常的な使用例としては、「物事は結果だけでなく、それに至るまでの過程が大事だ」、あるいは逆に、「結果さえ良ければ過程は問わない」などが挙げられよう。どちらの使用例も、途中経過としての「過程」が、到達地点としての「結果」の反対語として使われている点で共通である。一方、「内容」とは、国語辞典『大辞泉』によれば、「中に入っているもの」「なかみ」「実質」などとあり、反対語として「形式」が挙げられている(松村, 1998, pp.2667-2268)。つまり、通常用語法としては、過程と内容は同じ土俵には乗っておらず、比較しようがないのである。

結果の反対語として「過程」という言葉が使われるのが通常であることは、日本語に特有のことではない。英語圏での心理療法研究においても、通常用法であった。例えば、「結果研究(outcome studies)」と「過程研究(process studies)」という区分が挙げられる。以下では、この区分を、クライアント中心療法のリサーチの歴史に絞って概観する。ジェンドリンが心理療法の世界に参加して間もない1957年に、デズモンド・カートライトは、「クライアント中心療法の理論と研究に関する文献の解題」という論文を発表した(Cartwright, 1957)。Cartwright (1957)は、ロジャーズ学派の様々な研究者の122本にわたる文献を、研究タイプ別に分類した上で、紹介・解題している。論文の冒頭で、カートライトは、従来のリサーチが「結果研究」と「過程研究」という区分のもとに行われてきた現状を以下のように認めている。「数年間にわたって、心理療法を調査する研究は2つの主要分類に区分することが習慣的になっている。すなわち、(a) セラピーの過程の研究、および (b) セラピーの結果の研究である」(Cartwright, 1957, p.82)。すなわち、従来「過程研究」と呼ばれてきたものに共通するのは、「第1回から最後の面接までの期間中に同一の被験者を数多く観察すること」(Cartwright, 1957, p.82)だけであった。一方、「結果

研究」と呼ばれてきたものに共通するのは、「2つの時点、すなわち、セラピーの開始前とセラピーの終結後においてのみ観察を行なう」ことであった(Cartwright, 1957, p.83)。

セラピーにおける両研究の違いを理解するために、本研究では、ダイエットになぞらえることを試みたい。ダイエット開始前とダイエット終結後の体重のみを調べたのが結果研究であり、リバウンドした経緯も含めて詳細に調べたのが過程研究とされていた、ということである。このように、従来の過程研究においては、英語圏においても「途中経過としての過程」という辞書的意味の通りの使い方がなされていたのが、それまでの現状であった。

第3節. 従来の過程研究への異論

3-1. カートライトからジェンドリンへ

しかしながら、カートライトは上記のように従来の過程研究と結果研究の区分の現状を概観した後で次のような問題点を指摘している。「過程研究と結果研究との違いは、その資料の源（テストに対する逐語記録）の中に存在しないように思われる」。従って、「この区分は、今や、分類の目的には不相当だと思われる」(Cartwright, 1957, p.83)。結論として、カートライトは、『過程研究』と呼ばれてきた諸研究は、主に録音された面接の逐語記録の分析からなる。そうした研究の多くは、『内容分析』と分類するのが適切であろう」と、従来とは別の分類を提唱するに至るのである(Cartwright, 1957, p.82)。

上記のカートライトの問題提起をジェンドリンは継承した。ジェンドリンは、共著論文「心理療法、パーソナリティ、創造性におけるフォーカシング能力」(Gendlin, Beebe, Cassens, Klein & Oberlander, 1968)において、次のような例を挙げる。「面接の初期では他人に言及する発言がより多かった。自分に言及したものは否定的な口調の傾向があった。セラピーが後のほうになると、自分に言及する発言が優位に多くなり、優位に肯定的な口調が増えた」(Gendlin, Beebe, Cassens, Klein & Oberlander, 1968, p. 222)。従来であれば、こうした研究は、カートライトが論じたように「第1回から最後の面接までの期間中に数多くの観察」を行いさえすれば過程研究と呼ばれていた。しかし、ジェンドリンの用語法では、こうした研究における変数の取り方は、途中経過の観察の多い少ないにかかわらず、クライアントが「何を」話すのかを調べているという点で、過程変数とは呼ばれず、内容変数と呼ばれることになるのである。

3-2. 1956年のリサーチの振り返り

以上、ジェンドリンにおける「過程変数」を、内容変数との対比で提唱した経緯も含めて確認した。そこで以下では、リサーチにおいて、どの項目を「過程変数」という言葉で指し示そうとしたのかを具体的に明らかにする。1956年のジェンドリンらの学会で発表したリサーチを詳細に検討する。この発表は、クライアントの発言をいくつかの尺度でセラピストが評定し、治療の成功／失敗との相関を調べるものである。とりわけ、クライアント中心療法において重要とされてきた、「治療関係」と「現在（「今・ここ」でいう「今」）」の重要性を調べたものであった。なお、この発表は4年後に公刊された(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960)ので、以下ではその公刊論文をもとに考察する。

3-2-1. 「治療関係」の重要性：内容変数と過程変数

1956年のジェンドリンらのリサーチ(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960)においては、「治療関係の重要性」を調べた項目が複数ある。しかし、これら複数の項目の中には、治療の成功と相関がなかったものとあったものが存在する。

治療の成功と相関がなかったのは、第1項目「セラピーは、クライアントにとって、クライアント自身の問題を主に焦点を当てているのか、それともあなた[セラピスト]との関係に焦点を当てているのか」であった。第1項目は、発言内容が誰についてであるかという点で、のちのジェンドリンの区分でいえば、内容変数に相当する。

一方、治療の成功と相関があったのは、第4項目「新しい体験の源泉として治療関係はクライアントにとってどの程度重要であったか」であった。尺度の高い発言の具体例を挙げよう。「私は、今でこそ自制心から自由になったり、依存的で無力だとか感じたりしますが、今まではそうすることが決してできなかつたんです」「誰かに対して本当に怒ってしまったのはこれが初めてです」。これらの発言について、ジェンドリンはのちに興味深いコメントをしている。「こうした例から明らかに言えるのは、新しい体験が治療関係によって起こっている限り、クライアントがセラピストのことについて言語的に述べているどうかは問題にならないということである」(Gendlin, Beebe, Cassens, Klein & Oberlander, 1968, p.222)。第4項目は、誰についての発言かという言語的内容は問題とせず、発言と体験とが「いかに」働き合うかを調べているので、のちのジェンドリンの区分でいえば、過程変数に相当する。

3-2-2. 「現在」の重要性：内容変数と過程変数

1956年のジェンドリンらのリサーチ(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960)においては、治療における「現在」の重要性を調べた項目も複数ある。しかし、これら複数の項目の中には、治療の成功と相関がなかったものとあったものが存在する。

治療の成功と相関がなかったのは、第5項目「どの程度まで問題は過去に焦点を当てていたか？(幼少期あるいは青年期)」であった。第5項目は、発言内容がいつについてであるかという点で、のちのジェンドリンに区分でいえば、内容変数に相当する。

一方、治療の成功と相関があったのは、第6項目「どの程度クライアントは自分の感情を『表現する』のか、そしてどの程度クライアントは自分の感情『について話す』のか」であった。感情の直接的な表現かあるいは報告かという違いである。発言の具体例として尺度の低い発言と高い発言それぞれを一つだけ抜き出してみよう。尺度の低い発言が「昨晚怖かったです(I was scared last night)」である。一方、尺度の高い発言が「『今になって』わかるんです、昨晚どれだけ本当に怖かったかってことが (It comes to me *now* how scared I really was last night)」。言語的内容としては昨晚の出来事を話しているという点で全く同じである。しかし、昨晚の出来事について「その当時に」感じたことを報告しているのと、昨晚の出来事について「今まさに」どう感じているかを表現しているのでは、話し方の点で全く違いがある。第6項目について、のちにジェンドリンは、「内容に関しては、過去の出来事でもよく、例えばかなり前の出来事について今まさに悲しみを強く体験していることでもよいのだ」(Gendlin, Beebe, Cassens, Klein & Oberlander, 1968, pp.222-223)と補足のコメントをしている。第6項目は、いつについての発言かという言語的内容は問題とせず、出来事と感情的体験とが「いかに」働き合うかを調べているので、のちのジェンドリンに区分で言えば、過程変数に相当する。

第4節 結語

ジェンドリンは自身の論文において、「過程(process)」という用語を、結果との対比ではなく、内容との対比で用いた。この対比を用いることにより、ロジャーズ学派における、「治療関係の重要性」「現在の重要性」ということで本当に言おうとする事柄を指し示すことができたのである。すなわち、内容変数としての「現在」や「治療関係」ではなく、過程変数としての「現在」や「治療関係」が治療の成功に必要なだという新たな区分を導入し

たのである。

しかしながら、こうした「過程」という語の用法は、やはり、通常の使用とは異なるため、近年になっても文脈を切り離されると誤解される危険性が多分にある。諸富（2009）は、ロジャーズは「現在」を強調する、という考えの単純な誤解がもたらした影響として、以下のような例を挙げている。この例は、内容変数としての「現在」を強調した見解がいまだに根強く残っているということを示唆している。

ベーシック・エンカウンター・グループに参加した折、比較的指示性の強いファシリテーターから、『過去の話』はしないで、『今・ここでの話』をするように促された経験が私にもある。…ロジャーズが言いたかったのは、もちろんそのようなこと（『今・ここでの話をしよう』）ではなく、過去の話でも、未来の話であっても、それを今、この瞬間にどのように体験しながら語っているかが重要なのだ、ということである。（諸富, 2009, p.39）

こうした誤解も、ジェンドリンが、内容変数としての現在ではなく、過程変数としての現在を重視しているという背景がより伝われば、誤解も少しずつ解かれると言えよう。すなわち、上記第5項目のように言語的内容が過去であるか現在であるかよりも、第6項目のように内容が過去の出来事でも今強く体験しているかどうかという視点をもって話し手の発言を聴けばよいということになるであろう。

また、上記のように、現在の重要性ということは何を意味するかを絞り込む際の論述に、第2章で論じていた、ジェンドリンが「経験(experience)」と「体験過程(experiencing)」とを区別していたことの意義が認められる。

ふさわしい用語に恵まれなかったがために、現在の経験(present experience)こそ大切なのだというロジャーズの見解はあちこちで誤解されてきた。クライアントは過去の経験に取り組む必要などないのだという意味にとられてきたのである。ロジャーズの見解をそのようにとると、ロジャーズの言う現在とは、概念的な内容のことを指すのだということになってしまう。ロジャーズは誤解され、クライアントは現在の生活の内容だけに取り組めばよいのであって幼い頃の経験に取り組む必要などない、と言いたかったかのように受け取られてしまっている。だが、ロジャーズが言いたかった

のは、取り組む概念的な内容が過去のものであろうと、現在のものであろうと、クライアントは現在の体験過程を通してだけ(only through present experiencing)、うまい具合に問題に取り組むことができる、ということなのである。(Gendlin, 1962/1997, p.247-248)

このように、治療において現在は重要なのか・重要ではないのかという問題は、「現在の経験」から「現在の体験過程」を区別することによって整理し、説明すると理解しやすいと言えよう。

続いて、上記第6項目補足において「内容に関しては、過去の出来事でもよい」と論じたことの背景として、ジェンドリンが過去と現在の関係についてどのように考察しているのかを論じたい。第6項目では、尺度の低い発言「昨晚怖かったです(I was scared last night)」も、尺度の高い発言「『今になって』わかるんです、昨晚どれだけ本当に怖かったかってことが (It comes to me now how scared I really was last night)」も、「怖かった(was scared)」と文法上は全く同じ過去時制の“was”が用いられている。しかし、後年のジェンドリンは、この2つのwasは「混同されやすいが、全く同じではない」(Gendlin, 1991, p.65)と指摘し、その区分を理論的に考察している。

尺度の低い場合は、出来事が起こった当時に思ったことを、単に「怖かった」と報告しているだけである。このように、過去・現在・未来へと一つの線状の軌跡において我々の背後にあるような過去を、ジェンドリンは「想起的過去(remembered past)」(Gendlin, 1991, p.65)と呼ぶ。想起的過去の場合、出来事をいつ想起した場合であっても、すでに出来上がった静的内容の報告であり、現在の体験とはかかわりなく、常に同じである。すなわち、「怖かった」から他の何かへ変化する見込みは今後もないのである。

一方、尺度の高い発言の場合は、今になって「怖かった」とわかるという話し方であり、上記の報告調の話し方とは全く異なる。当時も何かを感じていたのかもしれないが、その何かは「怖かった」という形では語られておらず、今「怖かった」と初めて語られるのである。このように、現在の観点から遡って意味づけされた過去を、ジェンドリンは「遡及的過去(retroactive past)」(Gendlin, 1991, p.65)と呼ぶ。遡及的過去の場合、「現在が過去に新しい機能、新しい役割を与える」「過去が新しい現在において新たに機能する」(Gendlin, 1996, p.14)のだと言えよう。また、遡及的過去の場合、その時々で出来事が今後も更に意味づけ直される可能性を含み持つ。つまり、今は「怖かった」と感じている出

来事が、いずれは「いや、怖かったというより、あの時はむしろ『途方に暮れた』んだ」と別の形で表現される可能性があるということである。このように、ジェンドリンが「過程(process)」という用語で指し示そうとしたのは、現在の観点からの新たな意味づけによって刻一刻と変化が伴いうる進行中の体験のことだと言えよう²⁾。

また、ジェンドリンにおける「過程」の用語法の背景を知っておくことは、フォーカシングに馴染みのない人たちにフォーカシングを教えるワークショップにおいても、もちろんのこと有益であろう。例えば、ワークショップでの注意事項として、「セッションのとき、話し手の話の内容に共感するのではなく、プロセスに共感しましょう」「セッションの振り返りのとき、話し手の体験の内容にコメントすることは控えてください。プロセスにコメントするのはいいですけど」と単に言われただけでは、何をもってプロセスなのかは、フォーカシング初心者には伝わりにくいきらいがある。なぜなら、結果に対するプロセスという通常用語法に馴染んでいるため、「内容よりもプロセス」という発想が事前にはないからである。上記のような注意事項の前に、「話題が自分のことか／聴き手のことか」「過去の出来事か／現在の出来事か」などが内容の違いであり、「同じ悩み事でも、聴き手がいてくれるからこそ触れられる感情があるか否か」「その当時の出来事を今うまく感じられているか否か」がプロセスの違いである、といった事前の説明があれば、その意味するところがフォーカシング初心者には伝わりやすいと言えよう。

注

- 1) 本章は、田中秀男 (2016a). ジェンドリンの心理療法研究における過程変数. 心理学叢誌(関西大学大学院心理学研究科), **16**, pp.105-111. を加筆修正したものである。
- 2) Gendlin (1991)における、「想起的過去」と「遡及的過去」との対比への言及に関しては、国内において、本研究が初めてではなく、先行研究として三村 (2009)が存在する。だが、Gendlin (1991) においても、三村 (2009)においても、ジェンドリンの「哲学」の枠内でその対比が論じられているのみである。本研究は、その対比がジェンドリン初期の心理療法リサーチにどう対応するかを具体的に解釈することを試みた。

第4章 フォーカシング創成期の2つの流れ：体験過程尺度とフォーカシング教示法の源流¹⁾

第1節 導入：2つのリサーチの区別

ジェンドリンがフォーカシングを提唱するきっかけとなったリサーチ結果は、断片的にはあるが今まで紹介されてきた。例えば、ジェンドリン本人による実践的主著『フォーカシング』(Gendlin, 1981)の冒頭では、以下のように解説されている。

…セラピーの成功した患者をセラピー・セッションの記録からいともたやすく選び出せることがわかった。こうしたまれな患者たちは、セラピーの時間に他の患者たちとどう違っているのか。…[中略]…患者たちが何を話すかという点に違いはない。違いは患者たちがいかに話すかという点にある。(Gendlin, 1981, p.3)¹

こうしたリサーチの中に私たちを最も悩ませた事実がひとつあった。それは、自分の内面で決定的な行為を行った患者を初期の2回の面接までに選び出せるという事実である。初期の面接を分析するだけで、始めから成功か失敗かを予測できることがわかったのである。(Gendlin, 1981, p.4)

しかし、Gendlin (1981)は啓蒙書という性格のため、誰がどこまでどのような側面の先行研究を行っていたか、ジェンドリン本人がどのリサーチにどの程度関わっていたのかについては、つまびらかにされていない。また、今日、フォーカシングとして定着しているものから振り返ってみた場合、それぞれのリサーチがどのような位置づけにあるのかは、最近の文献でも明確にされていない。

そこで、本研究では、日本語で紹介されていない文献、もしくは、近年になって日本語に訳された文献を紹介し、これらを統合的なかたちで整理することによって、フォーカシング創成期のリサーチの様々な流れを提示する。本章の見解を予めかいつまんで論じておく。クライアントが「いかに」話すかに関するリサーチには、ジェンドリンは最初から主導的な立場で参加していた。しかし、「ある種のクライアントたちへの治療は失敗することが予測できてしまう」ことに関するリサーチには、ジェンドリンは最初から参加してはならず、しかも、このリサーチ結果に当初は抵抗を示していた。したがって、両リサーチ

の流れを区別し、それぞれが現在「フォーカシング」と呼ばれているもののどの側面を支えているのか、その対応関係を改めて問い直すのが本章の目的である。

フォーカシング創成期のリサーチの流れを区別するため、本章では、まず、「何を”話すかから”いかに”話すかへ」の尺度の取り方の転換を概観する。次に、「失敗が予測されるクライアント」に関するリサーチ結果とそのインパクトを検討する。続いて、以上二つの先行するリサーチがジェンドリンによっていかに継承され、合流したかを確認する。これにより、最後に、ロジャーズから、ジェンドリンのいわゆる「兄弟子」たちを経て、ジェンドリンへと至る研究の流れの捉え直しを提唱する。

第2節 「“いかに”話すか」の先行研究：フィードラー・シーマン・ジェンドリンら

2-1. 「何を”話すか」から「“いかに”話すか」へ

「何を”話すか」から「“いかに”話すかへ」の尺度の取り方の転換について、本研究第2章では、1956年にジェンドリンらがアメリカ心理学会で初めて発表したリサーチ「セラピーにおける過程と結果のカウンセラーによる評定」(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960)に注目した。以下、このリサーチが、のちの体験過程尺度（以下 EXP スケール）から振り返って、どのように先駆けとなっていたかということからその内容を概観する。

1956年のリサーチは、先行研究としてフレッド・フィードラー(Fred Fiedler, 1922-)のリサーチ(Fiedler, 1950)とジュリアス・シーマン(Julius Seeman, 1915-)のリサーチ(Seeman, 1954)が挙げられている(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960, p.213)。Fiedler (1950)の結論は、「治療の成功は、セラピストの学派の違いよりも、セラピストの熟練度と相関がある」というものだった。Seeman (1954)の結論は、「クライアントが治療関係自体をとりわけセラピーの話題にしていたかは、治療の成功とは相関がない」というものであった。

1956年のリサーチにおいて、治療の成功と相関がなかった項目は、クライアントが「治療関係を取りわけ話題にしていたか」「過去の出来事を話題にしていたか/現在のことを話題にしていたか」だった(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960, p.211)。これは、セラピストがよって立つオリエンテーション（ロジャーズ学派・フロイト派等）によって違ってくると思われ変数だった（田中, 2005, p.72）。フィードラーの研究は、セラピスト側ではな

くクライアント側の発言を変数にとるというかたちで変容・継承され、シーマンの結果は追試された。これら成功と相関がない変数は、クライアントが“何を”話すかに関する変数だった。

1956年のリサーチにおいて、治療の成功と相関があった項目は、クライアントが「治療関係から新しく重要な体験が生じたか」「感情を直接的に『表現した』か／感情について『報告した』か」だった(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960, p.211)。これら成功と相関がある変数は、ジェンドリンらによる新しい尺度で、クライアントが“いかに”話すかに関する変数だった。

2-2. これらのリサーチの限界

上記 1956 年の学会発表には、その基盤として前年にシカゴ大学カウンセリングセンターのディスカッションペーパーにて発表された理論論文(Gendlin & Zimring, 1955)がある。Gendlin & Zimring (1955)では、クライアントの話の内容とは別の変数を取るべきという仮説が提示されていた。

しかし、Gendlin & Zimring (1955)には、難点もある。セラピーが進みさえすれば、クライアントの体験過程は、自ずと「構造拘束的」から「プロセス的」になるとされる(Gendlin & Zimring, 1955, p.9)。今日のフォーカシングの立場と比較すると、比較的素朴で、楽観的である。なぜなら、ある種のクライアントはロジャーズ学派のセラピーで失敗が予測されるという事態は想定されていないからである。

第 3 節 失敗が予測されるクライアントに関する研究：カートナーの研究とそのインパクト

3-1. 従来のカートナーの紹介

本章第2節で挙げたリサーチ(Gendlin, Jenney & Shlien, 1960)の流れとは別の流れが、シカゴ大学学内における、ロジャーズ学派の別の研究者によって行われていた。「ある種のクライアントたちはロジャーズ学派のセラピーで失敗が予測される」という研究がそれであり、リサーチの主導者はウィリアム・カートナー(William Kirtner, 1920-)である。

ジェンドリンによるカートナーの回想(Gendlin, 2002)は、原文の日本語訳(ジェンドリン, 2006)があるだけでなく、日本語二次文献においてもいくつか紹介されている(パート

ン, 2006, p.65; 諸富, 2009, pp.40-41)。しかし、カートナーの研究がロジャーズ学派の中でどのようなインパクトをもたらしたかに関して詳細に明らかにした日本語文献はない。一方、近年の英語圏の文献では、カートナーの業績に言及したものとして、Parker (2014) が挙げられる。しかし、Parker (2014)が、EXP スケールの先行研究としてカートナーの研究に言及している(pp.259-260)点で、本研究とは見解が異なる。

本研究は、フォーカシングの先行研究として、カートナーの研究を、Parker (2014)とは別のかたちで位置づける。具体的には、カートナーの研究は、EXP スケールの先行研究ではなく、フォーカシング教示法の先行研究だというのが本研究の見解である。なぜなら、EXP スケールは、「クライアントが“いかに”話すか」を測る尺度であり、本章第 2 節で論じたように、カートナーの研究結果が出る前にジェンドリンが主導的な立場で参加していた研究に源流を求められるからである。そして、当初この研究は、失敗が予測されるクライアントがいるとは想定されていなかったからである。

3-2. カートナーの研究詳細

ウィリアム・カートナーは、ロジャーズの教え子だという意味では、ジェンドリンのいわゆる「兄弟子」に当たると言える。カートナーは、1955 年に修士論文「パーソナリティ変数の関数としてのクライアント中心療法における成功と失敗」(Kirtner, 1955)をシカゴ大学人間発達コミッティーに提出している。その 3 年後、共同研究者デズモンド・カートライト(Desmond Cartwright, 1924-)との共著というかたちで、カートナーの修士論文の主要部分が心理療法誌に公刊されている(Kirtner & Cartwright, 1958)。

カートナーの研究成果を、公刊された論文をもとに以下に概観する。研究の結論は、「セラピーの期間と結果は治療開始時におけるクライアントのパーソナリティ構造と関連している。最も顕著な差異は、こうした尺度上に見いだされる成功グループと失敗グループ間の差異であった」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.264)というものである。上記の「こうした尺度」と言及されているもののうち、のちのフォーカシングの発展から振り返ってみると、注目すべきは尺度 IV として挙げられたものである。尺度 IV は、「能力感：状況に十分に対処できるという感じから、状況に対処する内的資源の無力感と欠如まで」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.260)とある。例えば、セラピーで成功するグループは、「感じられた不安の原因や解決を自己の内部に求める」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.263)傾向があるという結果であった。また、セラピーで失敗するグループは、「感じられ

た不安の原因や解決を外に求める」(Kirtner & Cartwright, 1958, p.263) 傾向があるという結果であった。

失敗するグループの傾向を今日の心理療法の解説書から具体例を挙げてみたい。池見(1995)は、「自己理解が深まらない場合」として、次のようなクライアントとセラピストの会話例を挙げている。彼との旅行を急に彼からキャンセルされて行けなくなったクライアントに「どう感じているんですか？」とセラピストが問いかけても、「感じるも何も、そういう言い方がヒドイと思うのよ」とクライアントは述べる。急に行けなくなったことへの彼の言い訳について「言い訳されると、どう感じているんですか？」とセラピストが問いかけても、「とにかくズルイと思いませんか？」とクライアントは述べる(池見, 1995, pp.86-87)。池見(1995)は、あくまで EXP スケールを解説する前置きとして上記の例を挙げている。しかし、上記の例は、EXP スケールが開発される前のカートナーの尺度でも、治療の失敗が予測されることであろう。なぜなら、上記のクライアントは、「感じられた不安の原因や解決を外に求め、状況に対処する内的資源が欠如している」グループに入ることになるからである。

のちにジェンドリンは、心理療法が効果的でない様式(ineffective modes)として、「知性化(intellectualizing)」と「外在化(externalizing)」の2つを挙げている(Gendlin, Beebe, Cassens, Klein & Oberlander, 1968, p.217)。カートナーの研究は、2つの様式のうち、後者の「外在化」を研究した先駆けだと言えるであろう。

3-3. カートナーの研究のインパクト：ロジャーズとジェンドリンの反応

次に、ロジャーズ学派内における、カートナーの研究の位置づけを考察してみたい。ロジャーズは、カートナーの修士論文提出と同じ年に、有名な必要十分条件、6つの条件をカウンセリングセンター・ディスカッションペーパーにて提唱したばかりであった(Rogers, 1955)。ところが、カートナーの成果は、ロジャーズの必要十分条件だけでは成功しないクライアントたちがいることを示し、ロジャーズが提唱した内容を早くも覆すような研究結果だったのである。

しかし、カートナーの結果に対するロジャーズとジェンドリンの反応は異なっていた。ロジャーズの6条件の中でも、とりわけ、セラピスト側の態度条件である「受容・共感的理解・一致」の3つが、現在では中核三条件(坂中・本山・三國, 2015, p.i)と呼ばれて重視されている。ロジャーズとジェンドリン、それぞれが最終的に築き上げた理論からすれば、

セラピスト側の条件だけでは、うまくいかないクライアントがいるという結果に反対したのがロジャーズで、賛成したのがジェンドリンという予想が成り立ちそうである。しかし、実際には、ロジャーズとジェンドリンそれぞれの当初の反応は、むしろ逆だったようである。

カートナーの修士論文提出の翌年、シカゴ大学カウンセリングセンターでの出来事をジェンドリンがのちに以下のように回想している。出来事とは、カートナーの研究を一部紹介したディスカッション・ペーパー(Cartwright, 1956)がカウンセリングセンターのスタッフの元に届いたことである。

1956年のこと、カートナーから研究結果を配布されたとき、カウンセリングセンターのスタッフは一同激怒した。とても信じられなかったのだ。研究によれば、自分たちが会っているクライアントには、成果が上がらないとあらかじめわかっている人たちがいるのだという。面接が始まって数回で、このケースが失敗するかどうか、おおよそ見当がついてしまうというのである。きっと何かの間違いでは、そうにちがいない、私たちは口々に言った。(Gendlin, 2002, xviii)

自分たちスタッフがこれ以上面接を続けても結果は変わらない、そういう意味合いのデータを突きつけられてジェンドリンらは信じられなかったと言える。というのも、ジェンドリンは当初このリサーチに加わっていなかったのでカートナーの結果は予期せぬものだったからである。

ただ、そんな中で、ひとりロジャーズだけがじっと黙っていた。そしてこう言ったのである。「事実はいつだって味方だよ(Facts are always friendly)」。ロジャーズのオフィスに行き、カートナーの研究のことで私が喰ってかかろうとしたところ、ロジャーズからはこう言われた。「今回の研究結果が、きっと次の研究への足がかりになると思うよ」(Gendlin, 2002, xviii)

ロジャーズはだれよりも早く、カートナーの研究結果を冷静に受け止めていたのである。しかし、ロジャーズの公刊論文を見た限り、そういう印象はない。ロジャーズが必要十分条件を公刊(Rogers, 1957)した際、6つの条件を提示したあとに「省略された重要なこと

(Significant Omissions)」という見出しのもと、次のような補足文を入れている。

ここに挙げた条件が当てはまるのはある種のクライアントだけだ、とは述べていない。また、クライアントのタイプが違えば、治療して成果をあげるには別の条件が必要になる、とも述べていない。(Rogers, 1957, pp.100-101)

ところが、カートナーの問題提起は、「クライアントのタイプが違えば、治療して成果をあげるには別の条件が必要になる」という性質のものだったのである。そこで、ロジャーズは次のような脚注を急遽挿入している。

先ごろカートナーが仕上げた研究の結果は、私が立てた仮説を覆そうとするものである。…[中略]…だが、カートナーの研究が確かなものだとはっきりするまでは、今のところ、私は自分の仮説にこだわりたい。(Rogers, 1957, p.101)

以上がロジャーズの公式発言である。あたかもロジャーズ個人が研究結果を受け入れられなかったかのような書き方である。

しかし、実際には、当初カートナーの研究結果を受け入れられなかったのは、ロジャーズよりもジェンドリンの方であった。

部屋を出ようとして、ふたりドア口に立っていたところで、ロジャーズは私の肩にぼんと手を置き、ぐっと力を入れながらこう言ってくれたのである。「ほら、ここから先をどう進んでいけばいいかはきっと“君が”見つけ出す、私はそう思っているよ(Look, maybe *you* will be the one to discover how to go on from this)」。おそらくロジャーズは、次へのステップを見出すメンバーのうちの一として私のことを言っただけなのだとおもう。だが、私はもっと深いところでその言葉を受けとめていたのかもしれない。(Gendlin, 2002, xviii)

むしろ、クライアント側の条件を見出すように、ジェンドリンの背中を後押ししたのがロジャーズだったと言えよう。

3-4. カートナーのリサーチの限界

繰り返すが、カートナーはあくまで「ロジャーズの必要十分条件だけでは、セラピーが成功しないある種のクライアントたちがいるのではないか」と問題提起しただけである。そうした失敗が予測されるクライアントたちにセラピストがどう働きかけたらセラピーの軌道に乗せることができるのか、その解決案までは示していなかった。

第4節 2つのリサーチの流れの合流

治療の成功と相関がなかった「何を」話すかに関するリサーチは本章第2節で論じたかたちで終了する。一方、治療の成功と相関があった「いかに」話すかに絞ってその後の研究が進められる。本章第2節で挙げた「感情の『表現』／『報告』」はのちの体験過程尺度(experiencing scale)のレベルの高低に受け継がれる。ジェンドリンの著作目録(Depestele, 2007)において、experiencing scale という用語がタイトルに初めて挙がるのは、ウィスコンシン大学に移ってからの Gendlin & Tomlinson (1960)である、これに改良が加えられ、EXP スケールというかたちで一応の完成を見たのが、Klein, Mathieu, Gendlin & Kiesler (1970)である。

一方、本章第3節で論じたカートナーの問題提起に対し、ジェンドリンが解決案をもって応えるのはやや時間がかかったようである。ジェンドリンは、ウィスコンシン大学へ移る前に博士論文をシカゴ大学哲学部に提出している(Gendlin, 1958a; Gendlin, 1962/1997)。しかし、この論文には、フィードラーやシーマンの名前が挙がっているにもかかわらず、カートナーの名前は一度も挙がっていない。ジェンドリンはウィスコンシン大学へ移った後になって、カートナーの尺度を従来の神経症圏のクライアントから精神病圏のクライアントへ適用を試み、同様の成果を挙げている(Gendlin, 1962, p.207)。

ウィスコンシンでの統合失調症プロジェクトの成果として、ジェンドリンは有名な論文「人格変化の一理論」(Gendlin, 1964)を執筆・公刊する。Gendlin (1964)において、「いかに」話すかのリサーチ結果から、成功するクライアントの中で起こっている現象を記述して「フォーカシングの4つの位相」と名づける(Gendlin, 1964, p.115)。4つの位相とは、「1.心理療法における直接のレファレンス」「2.ひらけ」「3.レファレントの動き」「4.全面的な適用」である(Gendlin, 1964, pp.115-122)。加えて、これら4つの位相が「自己駆進的感情過程(the self-propelled feeling process)」(Gendlin, 1964, p.123)としてクライエ

ントに起こってこそ、セラピーは成功すると論述する²⁾。心理療法が成功するためのクライアント側の条件を論述できたという意味で、カートナーの問題提起にジェンドリンはこの時点でようやく応え始めたといえる。フォーカシング創成期の 2 つの源流が Gendlin (1964)で合流するようになったと言えよう。

次の段階として、ジェンドリンは、フォーカシングの 4 つの位相が起こりにくい話し手を手助けするためのマニュアル(focusing manual)に着手する(Gendlin, Beebe, Cassens, Klein & Oberlander, 1968, p.239)。つまり、従来は治療の失敗が予測されたクライアントをどうセラピーの軌道に乗せたらよいか、その一解決案である。ただし、Gendlin, Beebe, Cassens, Klein & Oberlander (1968)の段階でのマニュアルは、30 秒後に「その感じ全体に注意を向けなさい」、1 分後に「ある感じを追い続けなさい」というような、まだ非常に機械的で自動的な教示の羅列に過ぎない。これに改良が加えられて、その結果、のちの「フォーカシング教示法(Short Form)」(Gendlin, 1981)へと発展するに至るのである。

第 5 節 結語

クライアントが「“いかに” 話すか」に関するリサーチには、ジェンドリンは最初から主導的な立場で参加していた。しかし、「ある種のクライアントたちへの治療は失敗することが予測できてしまう」ことに関するリサーチには、ジェンドリンは最初からは参加しておらず、しかも、このリサーチ結果に当初は抵抗を示していた。

「“いかに” 話すか」を調べただけでは、どういうときにセラピーが成功したかが明らかにされただけだったかもしれない。カートナーの先行研究があったからこそ、セラピーが成功しないと思われていたある種のクライアントにどう働きかけるか、その一つの解決案として、フォーカシング教示法をジェンドリンは提唱できたのであろう。

一般に、ロジャーズとジェンドリンの相異として、次のようなことが論じられている。「ロジャーズの理論がセラピストの態度を中心にすえているのに対し、ジェンドリンの理論はクライアント個人の体験過程が中心である」(田村, 1990, p.16)。この見解は、今日のパーソン・センタード及びフォーカシング指向心理療法の研究者間でおおむね共通理解となっているものであろう。今後も、この見解は支持され続けるであろうし、本研究もこれに異を唱えるつもりはない。ロジャーズとジェンドリンの関係は、二人が結果として理論化したものだけを見ればそのとおりである。しかし、実際のところ、当初は、カートナー

による「クライアント側に別の条件が必要」というリサーチ結果をあっさり認めたのがロジャーズであり、抵抗を示したのがジェンドリンだった。このことを考えると、リサーチの経緯とその結果としての理論との関係はそう単純ではなかったと言えよう。

注

- 1) 本章は、田中秀男・池見陽 (2016). フォーカシング創成期の2つの流れ：体験過程尺度とフォーカシング教示法の源流 *Psychologist: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要*, 6, 9-17 を加筆修正したものである。
- 2) 「自己駆進的感情過程」(Gendlin, 1964)のロジャーズ学派における位置づけに関して、本研究は川上 (2015)とは見解が異なる。川上 (2015)は、「ロジャーズの“中核三条件 (Rogers, 1957 ほか)”の意義を再考しようと試みるにあたっては、その正当な評価をジェンドリンに求めておくことは現代的にも意味がある」とし、「彼 [ジェンドリン] はセラピスト条件の達成によって、彼のいう“体験過程 experiencing”が自己駆進的に進行しているとした」(p.125)と考察している。一方、本研究の見解は、「ジェンドリン当初の目論見(Gendlin & Zimring, 1955)とは異なり、セラピスト条件が達成されていても、ある種のクライアントは体験過程が進行しないことがカートナーの研究において示された。むしろ自己駆進的感情過程がある程度あつてこそ、初めてセラピスト条件が有効に機能することが Gendlin (1964)で提示された」というものである。このように見解の相違が生まれたのは、川上 (2015)が典拠とする Gendlin (1964)の論述において、カートナーが注で軽く触れられているだけでその位置づけが不明確であるという、ジェンドリン本人の書き方に起因すると思われる。

第Ⅱ部 結

以上、第Ⅱ部において、第1次シカゴ時代のジェンドリンの業績を時系列に検討した。

彼は、哲学の修士論文を執筆していた頃から、Rogers (1951)に関心を寄せており、ロジャーズ門下で臨床の仕事を始めからは、まず、Rogers (1951)における「取り入れられた価値のシステム」から「有機体の価値づけのプロセス」へという術語を、彼なりに「構造拘束的な体験過程」から「プロセスと呼ばれる体験過程」へと新たに術語化した。

続いて、「何を話すか」から「いかに話すか」へと変数の転換をはかった。これにより、のちのフォーカシング成立の基盤となるあるリサーチでは、フィードラーやシーマンなど、ロジャーズ学派におけるリサーチの先達との連続性が明らかになった。

また、こうした変数の転換を理論化する際、「内容」と「過程」とにカテゴリー化するには、ロジャーズ学派における別のリサーチの先達、カートライトの影響を受けていることが明らかになった。

一方、のちのフォーカシング成立の基盤となるリサーチには、上記の流れのほかに、「治療の成否の予測」という流れが別があり、こちらのリサーチには、当初ジェンドリンがかかわっておらず、ロジャーズ学派におけるまた別のリサーチの先達、カートナーが主導していた。カートナーが提示した「治療の失敗の予測」という問題は、第一次シカゴ時代のジェンドリンは今後の課題として持ち越し、ウィスコンシン時代・第二次シカゴ時代にいたって、応えを出し始めた。この課題は、治療の成功のクライアント側の条件を明らかにすることであったが、この課題への取り組みに背中を押したのは、逆説的にも、セラピスト側の条件を重視したロジャーズであった。

以上のように、第Ⅱ部では、ロジャーズ学派におけるジェンドリンの出自の特異性を確認した一方で、のちのフォーカシングを支える初期のリサーチは、彼一人の着想に起因するとは限らず、ロジャーズ学派の先達との連続性があることを確認した。これにより、ロジャーズ学派におけるジェンドリンの立ち位置を確定させることができた。こうした成果を踏まえ、第Ⅲ部では、ウィスコンシン以前のジェンドリンの業績に注目するという本研究のスタンスを維持しながらも、着眼点をロジャーズ本人の理論に移し、ロジャーズ理論とジェンドリン理論との非連続性を検討する。

第Ⅲ部 初期体験過程理論の観点から見た
ロジャーズ用語の再検討

第Ⅲ部 序

先の第Ⅱ部でロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけを確認したことをふまえ、続く第Ⅲ部では、ジェンドリン自身が十分なかたちで言及しなかった、ロジャーズの心理療法理論・パーソナリティ理論への批判的検討を筆者の観点から行う。とりわけ、ロジャーズ用語「一致」の検討を行う。

ロジャーズの心理療法論において、近年においても活発に論じられているのは、必要十分条件 6 条件の中の、中核 3 条件である。「言葉と体験（経験）とがいかに働き合うか」というジェンドリンの中心的議論において、先行研究として欠かすことができないのが、Rogers (1957; 1959)における「不一致／一致」である。なぜなら「不一致／一致」は「自己概念」と「経験」とがいかに重なり合うかを論じた構成概念だからである。

しかしながら、ロジャーズの「一致」について、正面切ってジェンドリンが論述しているところは意外にも少ない。そのため、ジェンドリンがロジャーズの何を継承し、何を批判的に検討したのかが見えにくい傾向があった。

そこでまず、一致に関して、一般に Rogers (1957)の中核条件として知られる、「セラピスト側の態度としての」一致が、近年において研究者の間でいかに論じられているかを概観する。加えて、ジェンドリンもまた、もしロジャーズであれば「一致」と呼ぶようなセラピストの態度を重要な態度として具体的に論じていることを確認する。

続いて、セラピスト・クライアントを問わず、人間一般の状態や態度を構成概念として取り扱った、Rogers (1959)による「一致」の定義を確認する。確認した構成概念の定義をもとに、ジェンドリンの体験過程理論に基づけば、クライアントの状態やセラピストの態度に対して、「不一致／一致」という説明図式を用いると、心理療法の変化で見落としてしまいう側面があることを指摘する。

第5章 ロジャーズ中核条件としての一致¹⁾

第1節 導入：近年の研究書『一致』（本山・坂中・三國，2015）レビュー

ロジャーズの必要十分条件 (Rogers, 1957; 1959)において、「不一致／一致」という用語が使われているのは、第2条件「クライアントは、不一致の状態にあり、傷つきやすく、不安な状態にある」と第3条件「セラピストは、その関係の中で一致しており、統合している」である。第3条件が中核3条件の一角を占めることもあり、一般的に一致ということで知られ、研究者の間で議論されることが多いのは、第3条件であるセラピスト側の態度としての「一致」である。

近年になり、ロジャーズの「一致」をテーマとした包括的な図書が初めて国内で出版された。『ロジャーズの中核三条件：カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致』（本山・坂中・三國，2015）がそれである。シリーズ名が示す通り、セラピスト側の態度条件である一致が名目上は主な考察対象とされている。しかし、本書『一致』は、クライアントの状態・セラピストの態度の両方を含めた人間一般の構成概念としての一致にも折に触れて言及されている。本章では、フォーカシング指向の観点から「一致」を問い直すにあたり、本山・坂中・三國（2015）をレビューすることを手掛かりとして論述を始めたい。近年の研究に基づくセラピスト側の「一致」を確認したのち、ジェンドリンはセラピスト側の「一致」した態度に言及していたかを詳述する。これにより、「一致」に対するジェンドリンのスタンスを問うことになる、続く本研究第5章の論考への準備を行う。

第2節 『一致』（本山・坂中・三國，2015）の出版経緯

『一致』（本山・坂中・三國，2015）は、「ロジャーズの中核三条件：カウンセリングの本質を考える」シリーズ三分冊の第1巻として刊行されたものである。中核3条件に関する充実した論文が、入手しやすい図書というかたちで刊行されたことは国内で初めてのことである。本書『一致』が出版されるに至った背景を説明しておく。ロジャーズの必要十分条件、すなわち6条件をめぐる論文は、英語圏で、2001年から2002年にかけて、“*Rogers Therapeutic Conditions: Evolution Theory and Practice*” (PCCS Books) というシリーズの図書が4分冊で刊行されていた。また、6条件のうち、中核3条件をめぐるのは、国内でも、学会誌『人間性心理学研究』において「さまざまな立場からみたロジャーズの“三

条件”という特集が組まれた(第 32 巻第 2 号, pp.117-145)。以上のような経緯があり、一致に関する議論が再び活発となっている。

第 3 節 『一致』(本山・坂中・三國, 2015)の構成と特色

本書『一致』の構成を概観したい。この本は、シリーズ三分冊全体の趣旨を紹介した「Introduction」(坂中・本山・三國, 2015)、本シリーズ編者の一人による「基礎編」、5人の執筆者による「発展・実践編」、外国や他学派からの投稿を収めた「特別篇」などからなっている。

「基礎編」の「一致をめぐる」(本山, 2015)は、ロジャーズが言おうとした「一致」を幅広くおさえるために最適な論文である。この論文は、ロジャーズの一次文献を時系列で丁寧に追っている。ロジャーズの「一致」は、ともすればカウンセリングの入門書において、「セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件」論文(Rogers, 1957)と『クライアント中心療法』(Rogers, 1951)の 2 つの円の重なり (pp.526-7) だけに依拠して説明されがちである。そんな中、本山 (2015)は、それら 1950 年代の著作からはるか遡る『問題児の治療』(Rogers, 1939)に立ち戻る。『問題児の治療』で論じられている、セラピストの「自己理解」に、のちの「一致」の萌芽を本山 (2015)は見出している。その他にも、ロジャーズが一致という言葉を用いずに一致に関することを述べている個所が紹介されている。著作集の索引をみただけでは分からないロジャーズの見解を垣間見ることができる。また、必要十分条件論文以降のロジャーズの見解も、一致に関する国内の先行研究もふんだんに紹介されている。

「発展・実践編」の冒頭を飾る論文は、「治療者がみずからの内的体験をそのままに体験し保持することの意味」(羽間, 2015)である。この論文は、非行臨床を領域としている点で、無条件の積極的関心と共感的理解の態度で相手に接しようにも相手へのネガティブな思いが生じてくる最たる事例を考察していると言えよう。羽間(2015)においては、処遇者自身の規範意識などからくる感情と他の態度条件とのあいだで、「みずからが分裂する感覚」を保持することの重要性が論じられている。

続く論文は、「クライアント中心療法における一致の臨床的検討」(大石, 2015)である。この論文では、クライアント中心的な応答が、精神分析の解釈的応答との対比で具体的に論じられている。また、大石 (2015)では、セラピストの一致について一般に誤解されやす

い点2点が示されている。一つ目は「自分の思いをすぐさま言葉にしてしまうこと」であり、2つ目は「セラピスト側の内的な動きばかりに過敏になってしまうこと」である。クライアントに関するポジティブとは限らない感情が生じたとき、今しばらくはそのことを表明しないでおく作業を大石(2015)は重視し、この作業を「不一致の抱え」と呼ぶ。また、一方で、セラピストが自分の内面の状況にばかりとらわれることを、一致の「神経症的側面」と呼び、むしろ、クライアント側の気持ちの動きをゆったりと観察できる「外向きの」意識も大事であることを説いている。

次に続く論文が、「ファシリテーターの一致について」(中田, 2015)である。往々にして従来は、中核条件があればよいという意味でエンカウンターグループも心理面接も同じとみなす考え方もある中で、この論文はこれら2つの異なる点に注目している。エンカウンターグループにおいて共感的に理解しようとするとき、メンバーが複数いるので、複数の照合枠を同時に抱えることになるという点である。上記の共感的理解に限らず、照合枠の問題は、一致に関してもこの論文の特徴である。一致発言にはセラピスト照合枠とクライアントの内的照合枠からの二通りがあると中田(2015)は指摘する。

その次に続く論文が、「フォーカシング指向の観点から一致を考える」(日笠, 2015)である。先述の“*Rogers Therapeutic Conditions Evolution Theory and Practice*”(PCCS Books)シリーズのうち、“*Congruence*”の巻(Wyatt, 2001)に掲載された論文が端的に紹介されている。

「発展・実践編」を締めくくる論文が、「一致からみた共感的理解」(田村, 2015)である。この論文では、伝統的な「共感」という概念では説明しづらい例として、統合失調症者との面接や夢のフォーカシングセッションが挙げられている。話の中身を確認しようがなかったり、具体的な内容を語らないセッションを聴いたりしている場合を田村(2015)は挙げている。

話し手が何をどのように感じているのかを聴き手が体験しようがないことは、フォーカシングにおいては、夢を素材としない場合でもよく起こりうることである。筆者なりの例を挙げる。例えば、「教室でのことを思い出すと、なんか、胃の辺りにドスンとしたものがあって」「ドスンと」「ああドスンというよりはズキズキですね」「むしろズキズキ」といったやり取りが続き、しばらくして、「今、胃の感じはスッと楽になりました」という展開になったとしよう。この場合、教室でどんなことが起こったのかまったく知らされていないまま「ドスン」→「ズキズキ」→「スッ」と聴き手が応答することが効果的であるとして

も、こうした応答は、聴き手が話し手に共感的理解を伝えるのとは明らかに異なると筆者もかねがね思っていた。よって、田村 (2015)の指摘は大変納得のいくものであった。この議論の延長線上で、本論文は、体験内容から独立したところで双方のフェルトセンスが共鳴するかのように変化していくような治療関係を「レゾナンスモデル」と呼ぶことを提唱している。

「特別編」の一つ目の論文は、「表現すること、一致、そして中核条件」(パートン, 2015)である。パートンの「一致」に関する見解は、彼の翻訳書『パーソン・センタード・セラピー：フォーカシング指向の観点から』(パートン, 2006)で既に論じられている。だが今回の論文での彼は、ウィトゲンシュタイン哲学からの援用をさらに強めている。本書読者の中には、およそロジャーズの枠組みから離れた哲学をなぜ引き合いに出す必要があるのか、疑問に思われる人もいるかもしれない。しかし、パートンが活躍する英語圏では、こと哲学の領域において、言語が介在することなしに内面的な意味というもの予めがあると想定するのは過去の産物である、とする考え方が主流である。ウィトゲンシュタインらの哲学から想定されうる批判に、心理療法研究者の一人としてパートンは応じる必要性があったのだと思われる。パートンのウィトゲンシュタイン解釈が絶対的なものではなく、数ある解釈の一つではあるとしても、こうした考察自体は、議論の活性化(三村, 2016)に貢献するであろう。

「特別編」の続く論文は、「なぜ不可能なのか? からの出発」(成田, 2015)である。精神分析医として高名な成田氏は、ロジャーズの中核3条件について、折に触れて言及していた(成田, 1997)。精神科に入局した頃ロジャーズに感動した成田氏が、中核3条件を「めったに実現されない“理想”」と思うに至った経緯は、今回も論じられている。しかし、今回はそれに加えて、本シリーズ基礎編の本山(2015)などを踏まえた上で、改めてコメントがなされている点が注目される。「一致」に関していえば、「クライアントとの接触がどうもつまらない」場合、分析家なら治療者が患者の無意識を感じ取ったと言うが、無意識という概念を使わないロジャーズではどういう説明になるのかと問題提起している。

以上、各論文を掲載順に追ってきた。だが、一口にロジャーズの「一致」とは言っても、どこに焦点を当てるかで論点がさまざまである。そこで、本書『一致』で論じられている「一致」のさまざまな論点が、どの論文で主に言及されているかを、筆者なりに整理する。「中核3条件、とりわけ一致は、カウンセリングの初学者にはあまりにもハードルが高すぎるのではないか」という点に関しては、本山(2015)、日笠(2015)、成田

(2015)に詳しい。「一致」と「無条件の積極的関心は両立するか」という点に関しては、本山 (2015)、羽間 (2015)、大石 (2015)、成田 (2015) に詳しい。「自己概念と経験との“完全な”一致はそもそも可能なのか」という理論的な問題については、日笠 (2015)や田村 (2015) に詳しい。「セラピストの一致した態度を、どの程度・どのようなタイミングでクライアントに伝えたらよいのか」という点に関しては、本山 (2015)、大石 (2015)、中田 (2015)に詳しい。

第4節 筆者の立場から

本書『一致』は、経験豊かなセラピストによる臨床事例が随所に盛り込まれている。一方、筆者自身はセラピストではない。そこで、職業としてセラピーを行っていない立場から、本書『一致』を読んだ上で、もし自分が援助を受ける立場だと仮定したらどう感じるかを、思い浮かんだ具体例を挙げつつ筆者なりに検討する。

以下のような全く架空の場面を想定してみよう。場所は大学の学生相談室、面接の終了時間が迫っている。にもかかわらず、カウンセラーは微笑みを絶やさず、相槌を打ち続ける。それを見て、クライアントは次のように思う。「この先生は自分の話に分け隔てなく関心を持ってきている。しかも、自分の言いたい事を汲み取ってくれる」。クライアントにとって、相談室の外ではあまりない経験であり、つついもっと話してみたい気持ちに駆られる。「このことは他人にしゃべってもムダ」と思って心の引き出しにしまっていた悩み事が、カウンセラーの微笑みと相槌で、思わず出てくる。普段は自分で強制的にオフにしていたスイッチが思わぬところで入るのである。

そこへ、カウンセラーからクライアントは次のように言われる。「まだ話したいことあるんでしょう？ 私の方は全然かまわないんだけどね。ただ、あなたが5限目の授業にちゃんと間に合うのかなあと思って。とっても心配なんですけど、あなたの方はどうかなあ？」。この発言と同時に、カウンセラーが時計をチラチラと見て、貧乏ゆすりをしていたらどうであろうか。言葉の上では「この場に居続けていい」というメッセージを送られている。にもかかわらず、仕草からすると、カウンセラーの気持ちが見えなくもあり、クライアントは相談室に居続けていいのかよくわからなくなるであろう。

カウンセラー側の都合であるにもかかわらず、カウンセラーはあたかもクライアントの

ためを思ったかのように発言する。こうした場合、カウンセラーの態度は、ある種の不一致であり、誠実でないと言えよう。理論的にいえば、カウンセラーの自己概念「私は予定時間を過ぎても嫌な顔一つせずにクライアントを受容できる」と、カウンセラーの経験「時計のチラ見・貧乏ゆすり」とが不一致であると言える。その結果、クライアントは、苦しい状態となるであろう。眉間のしわの寄り具合や声の調子から、カウンセラーの言っていることとは裏腹な本音を推し量らねばならないからである。クライアントは「また相手を引かせてしまうのではないか」「受け容れてもらえないことをしゃべっているのではないか」「先生がみなまで言わずとも、そろそろおいとまする察しができるようになれない自分が悪いんじゃないか」と自分を責めるようになるかもしれない。日頃の対人関係の失敗をまた面接室でも繰り返すことになり、余計傷つきやすくなるかもしれない。

ロジャーズはセラピストの時計のチラ見・貧乏ゆすり自体が悪いと言っているわけではない。そうしたカウンセラー自身の状態に気づかないまま、表向きだけ受容的な態度であるかのように振舞うことが不一致であり、治療的变化が起こらないと主張しているのである。

では、援助者側が自分の経験を意識し、必要とあればそれを相手に伝えるとは、具体的にはどのようなことであろうか。筆者が興味深い例として以下に挙げたいのは、治療関係の外で起こったことである。本書『一致』においても解説されているように、セラピストは治療関係以外の場で一致している必要は必ずしもない。にもかかわらず、以下の引用文は、図らずしてセラピーの時間外で一致した態度が効果的であった例と思われる。

ある日の午後、わたくしは、一人の感性優れた若い同僚と討論していた。いつものように、心理療法に関する話題であったと思う。話の自然の流れの中で、彼は、自己の幼少期の人間関係を語ろうとしはじめた。突然、私の心の中に、何か、重い、負担になるような感情が起こってきた。そこで、わたくしは、彼を遮り、「今の私とあなたの間柄は、そうした話を聞くのにふさわしいものではないような気がする」と告げた。一瞬、彼の内部に何かがひらめいたように見えた。彼は次のように語った。「先生が聞くまいとしたとたんに、いま自分が話そうとしていた事柄が重要なものだという気持になった。それまでは、重要だという感じではなかったのに」。(神田橋, 1988, p.169)

上記引用文の著者は、パーソン・センタードをオリエンテーションとするセラピストではない。また、上記の会話は、医者と同僚同士の会話であり、治療関係ではない。にもかかわらず、上記引用文はロジャーズの一致を考察する上で参考になるだろう。ここで起こっていることを、筆者なりにあえて段階に分けてみたい。

1. 話し手が、幼少期の人間関係を語ろうとし始める。
2. 聴き手が、自分の心の中に「重い、負担になるような感情が起こってきた」ことに気づく。
3. 聴き手が話し手に、「幼少期の話を聞くのはふさわしくない」と適切に伝える。
4. こうした聴き手の意識と伝達が、話し手に良い影響を与える。

2の段階で、聴き手に何らかの感情が起こっていることに気づかず、ただ話し手から押し込まれるだけであつたら、聴き手の態度は不一致のままであり、上記学生相談室の例と変わらなかったかもしれない。まずは、まだうまく伝えられないものの、話し手への否定的な感情（本山, 2015, p.19）が自分の心の中に起こってきたことに気づくことが大事であろう。

しかしながら、思ったことをただ正直に言いさえすればロジャーズの一致だというのはもちろん誤解（中田, 2015, p.46）である。3のように一個人の意見として誠実に伝えるためには、さしあたって「重い、負担になる」ような心の動きが聴き手の内部に煮詰まってくるまでしばらくは感じ取るような「抱え」の状態（大石, 2015, p.38, 40）が必要であろう。こうした過程を経た上での「そうした話を聞くのにふさわしいものではないような気がする」という伝達であるからこそ、4のように話し手の内部にひらめきが起こるのである。また、こうした「話を聞きながら一人の人間としての自分のなかに起こる反応を表現する」トレーニング手段の一つとして、インタラクティブ・フォーカシングの「相互作用的応答」が本書『一致』では紹介されている（日笠, 2015, pp.63-64）と言えよう。以上が、本書を読んだうえでの筆者の理解の大枠である。

加えて、用語の使い方について以下にコメントする。中田（2015）において、ジェンドリンやクラインのセラピストの尺度では、セラピストの体験過程がクライアントの体験過程と「一体化する」（p.49）ことを目指すという言い回しが使われていた。しかし、「一体化する」ということでどのような状態を指し示しているのかが、中田（2015）を読んだだけでは、筆者には一読してつかめなかった。中田（2002）を併読すると、「自他の境界がなくなり cl の世界を筆者 [=セラピスト] がそのまま感じる」（p.626）ことをおそらくは論じたか

ったと思われる。これによって、晩年のロジャーズが「私が自分の内なる直観的な自己にいちばん近づくとき…私がおそらく軽い変性意識状態にあるとき、…私の内なる魂は他者の内なる魂に触れるようである」(Rogers, 1980, p.129)と論じたことを、「セラピストの体験過程がクライアントの体験過程と一体化する」という言い回しによって中田 (2015)は伝えようとしたのではないか。以上が筆者の最大限の整合的な解釈である。

その一方、筆者は、体験過程という用語に関しては、ジェンドリンの著作でいちばん馴染んでいる。ジェンドリンの著作の中には、「両者の体験過程が“一体化する”」という用語の使い方は存在しない。そのため、筆者は中田 (2015)を一読して咀嚼できなかったのかもしれない。どうやら、ロジャーズとジェンドリンの間で「体験過程」という用語の考え方や使い方にずれがあると思われる。誰の用法が正しいということではなく、今後は、こうしたパーソン・センタードの部族(tribes)(サンダース, 2007)どうして、同じ用語によって何を指し示すのか、その異同を確認し合う作業が必要になってくると思われた。

第5節 結語と課題：ジェンドリンはセラピスト側の「一致」を論じたか

以上、ロジャーズの中核条件である「一致」をテーマとした図書をレビューした。「一致」に関する近年の研究成果を概観した後、筆者なりのセラピスト側の「一致」に関する理解を具体的に提示し、この図書の主要な章で論じられていることとの対応関係を筆者なりに示した。これにより、体験過程理論の観点から一致を批判的に検討する前に、ロジャーズの「一致」がもつ可能性を筆者がどのように把握しているかを提示した。また、「体験過程」という用語の共通理解を研究者どうして行う必要があることも、追記として言及した。

一方、本研究の考察対象である、ジェンドリンの著作においては、「一致」はどう言及されているのだろうか。定説通り、成功するクライアント側の条件に絞った論述に集中し、セラピスト側の条件は考察の対象に置かれていないのであろうか。

実を言うと、ジェンドリンの著作「体験的応答」(Gendlin, 1968)では、もし仮にロジャーズの枠組みで言うとするならば、セラピスト側の一致に相当することが下記のようにふんだんにかつ具体的に論述されている。こうした論述には、自己表明性(Gendlin, 1963b; 大石, 2015)という言葉に代表される外的な様相はさることながら、セラピストが自分の体験過程を意識化しているという内的な様相(Lietaer, 1993/2001; 中田, 2015; 日笠, 2015)もまた含まれているように筆者には思われる。

セラピストは、知っているという快適な場所にいつもいるわけにはいかないのである。セラピストは、混乱や苦しみにも、調子を狂わされる感じにも、窮地に追い込まれ逃れるよい方法も賢く有能な方法も見いだせないことにも、倦まず耐えなくてはならない。(Gendlin, 1968, p. 222; ジェンドリン, 2005)

セラピストは、自分自身の反応、中でも不快な反応(「その場の」感じ、当惑したりいらいらしたりその他もろもろの困った感じ)には、特別注意をしていなくてはならない。…つまり、困難や行き詰まりや当惑の気持ちや、ひっかけられ操作される感じや、嫌悪感等は、関係が治療的になりうる大切な契機なのである。…セラピストは、この感情を、今ここで進行している困難さについての具体的な感覚として貴重なものとしてもとらえなくてはならない。(Gendlin, 1968, pp.221-222; ジェンドリン, 2005)

セラピストは十分安定しており破壊されてはならない。しかし、その安定が真に伝わるのは、自分の反応を隠さず自分の反応にオープンである場合である。クライアントは、セラピストが隠していると感じると、はっきりと反応することができず、セラピストがクライアントの反応に耐えられるかどうかもわからなくなる。オープンであれば、セラピストは自分がどの程度までの煩わしさや怒りや傷つきや動揺に耐えられるかを、簡単に示すことができる。(Gendlin, 1968, p.221; ジェンドリン, 2005)

セラピストのうまさや賢さや強さや健康さ、あるいは、そのような見かけは、ほとんど意味はない。大事なものは、セラピストがもう一人の人間として応答することである。(Gendlin, 1968, p.221; ジェンドリン, 2005)

上記のように、Rogers (1957)で言えば第3条件の「一致」した態度に関する論述がふんだんに、かつ肯定的になされている。

しかしながら不思議なことに、ジェンドリンはこうした文脈において、「一致 (congruence)」という用語を一度たりとも使用していない。この不使用は、何を意図したものであろうか。また、Gendlin (1968)以前のジェンドリンの著作に、この不使用を理論的に裏付ける文献が存在するのであろうか。こうした課題には次の第6章で取り組む。

注

- 1) 本章は、田中秀男 (2017). 「一致」というテーマに関する最適の書 (特集 ロジャーズの中核三条件を読む). 人間性心理学研究, **34** (2), 143-149 を大幅に加筆修正したものである。

第6章 「一致」という用語にまつわる問題点とジェンドリンによる解決案¹⁾

第1節 導入： 「一致」や「ぴったり」という用語法を再検討する意義

第5章末尾では、ロジャーズであれば、セラピストの「一致」した態度と呼ぶべき論述の流れで、ジェンドリンが「一致」という用語を一度も使用していないことを指摘した。こうした不使用の意図を探るためには、Rogers (1957)の第2条件で用いられたクライアント側の「不一致」や第3条件で用いられたセラピスト側の「一致」などといった構成概念(constructs)そのものを問い直す必要があるだろう。そのためには、必要十分条件だけを論じた Rogers (1957)に言及を留めず、構成概念を入念に定義した Rogers (1959)へ言及を広げることが不可欠である。第6章では、クライアントの状態やセラピストの態度を含め、人間一般の状態を指す構成概念「一致」を検討し、Gendlin (1968)以前のジェンドリンの理論的著作(Gendlin, 1962/1997)が、一致という構成概念に対してどんなスタンスを元々持っていたのかを当のジェンドリン以上に明らかにする。

従来、心理療法やフォーカシングにおいて、言葉と経験(体験)とが「一致」することや「ぴったり」することが目標であると素朴に信じられてきた。しかし、「一致(congruence)」や「ぴったり(match)」といった用語を使うことが、時にある重要な治療的变化を捉えそこなう危険性があることを、本章では主にジェンドリンの著作をロジャーズの著作と対比させることによって指摘する。この指摘をもとに、重要な治療的变化を捉えそこなう危険性を防ぐ理論的な解決案を提示する。

一般的に、ロジャーズは、ウィスコンシンでの統合失調症治療プロジェクト(1957~63年)を経て、「それまで以上に、三つの基本的な姿勢の中で自己一致がより重要であると考えるようになっていった」(佐々木, 2005, p.186)とされている。その一方、ジェンドリンは、当プロジェクトの重要な論客であったにもかかわらず、「一致」という用語を使うことは、一部の例外を除いてほとんどない。この事実は、ジェンドリンが、一致の同義語とされる「純粋性(genuineness)」の方であれば一貫して肯定的に使っていたのとは対照的である。「一致」という用語法や説明図式をあえて使わなかった理由として、近年のジェンドリンは、「体験過程は、言語化されたものや行為とは大いに異なり、(二つの三角形どうしのように)型が等しいという意味で一致することなどどだい不可能なのだ」(Gendlin, 1999, p.204)と述懐している。

用語「一致」に対するジェンドリンの批判的見解をおさえるために、まず、「一致」という言葉の原語と訳語を確認することにしたい。ロジャーズの用語「一致」の原語は、“congruence”である。英語の congruence とは、幾何学の「合同」を意味する言葉でもある。先の Gendlin (1999)で指摘されているように、2つの型が等しいことを意味する。congruence の意味として「合同」が含まれることは、『クライアント中心療法』(Rogers, 1951)において、二つの円の重なりを用いてパーソナリティ理論を説明している(pp.526-527)ことから、ロジャーズ本人も当初から自覚していたことがうかがえる。一方、日本語の「一致」とは、国語辞典『大辞泉』によれば、「①二つ以上のものがぴったり一つになること。くいちがいなく同じであること。合致。 ②ごく普通の道理」を意味するとある。このうち、①の例文としては「指紋が一致する」「意見の一致をみる」「満場一致」が挙げられている(松村, 1998, p.165)。これら例文の中では、とりわけ「指紋が一致する」の用例が、合同を意味する英語の congruence のニュアンスを伝えているといえよう。

ジェンドリンは、幾何学の「合同」を意味する「一致」という静的な用語を使うことを意図的に避け、「体験過程(experiencing)」「推進(carrying forward)」などといった、より動的な用語を導入することを提唱した。例えば、「体験過程」という用語を導入したことで、ジェンドリンは、一致に関する論述には「体験過程が概念的内容と同一視されている」「意識的な感情が暗在的な意味を含むことが正確に理解されていない」といった欠陥があることを指摘することができたのである(Gendlin, 1958a; Gendlin, 1962/1997)。こうしたジェンドリンの指摘に基づき、「一致」という用語を使用することにより陥る理論的困難を、筆者は問題点3点に整理する。「1.シンボル化のあとの更なる変化が説明できない。2.シンボル化が様々であることが説明できない。3.シンボル化内容が変わらなくても治療的变化が起こることが説明できない」の3点である。

上記問題点3点とこれら3点への解決案を示すため、以下では、まず、ロジャーズにおける「一致」の定義と、その位置づけの変遷とを確認する。次に、日本語で出版されたフォーカシング先行研究において、「一致」という用語の使用に対する問題提起が近年わずかながら出てきたことを紹介する。続いて、ジェンドリンが「一致」という用語をどのように問題視し、いかにその解決を図ったかを、彼の初期の名著『体験過程と意味の創造』の観点から筆者が具体的に解明する。最後に、「一致」という用語の見直しは、必然的にフォーカシング用語「ぴったり」の見直しも要請することを指摘する。これにより、今後のフォーカシング教育における留意点を提案する。

第2節 ロジャーズにおける「一致」

ロジャーズは、「一致」という用語を、人間一般の状態に関する構成概念として使った(Rogers, 1959)。その後、セラピストの一致した態度は、他の態度条件よりも、ロジャーズ学派が後年になってますます重視するようになった(Rogers, 1966; Gendlin, 1963b)。

一般に、ロジャーズが「(自己)一致 / 不一致 (congruence / incongruence)」という用語を使うとき、一致するものは何か。彼は、「自己(概念)」と「経験」とが一致する／しないと呼んだ。論文「クライアント中心療法の枠組みから発展したセラピー、パーソナリティおよび対人関係の理論」(Rogers, 1959)¹⁾を中心に解説する。

知覚された自己と有機体の実際の経験とのあいだにずれが生じ始めることがよくある。…[中略]…このようなずれが存在するとき、その状態は自己と経験との不一致の状態であるといえる。(Rogers, 1959, p.203)

上記のように、「不一致／一致」などといった用語が使われる場合、Rogers (1959)においては、人間一般の状態に関する構成概念としてまず提示されている。

構成概念の様々な提示(Rogers, 1959, pp.194-212)に続き、セラピーおよびパーソナリティ変化の理論(Rogers, 1959, 212-221)が論じられる。まず、セラピーの文脈における「一致」ということで、一般に知られているのは、セラピスト側の態度のことである。この「一致」は「純粋性(genuineness)」とも呼ばれた。

治療関係におけるセラピストの一致もしくは純粋性が意味するのは、セラピーが最も効果的であるならば、治療関係におけるセラピスト自身の経験のシンボル化が的確でなければならない、ということである。(Rogers, 1959, p.214)

…もしセラピストが治療関係のなかで脅威や不快感を経験していながらも、クライアントを受容し理解していることにしか気づいていないならば、治療関係においてセラピストは一致しておらず、セラピーは阻害されるだろう。(Rogers, 1959, p.214)

ここでいうシンボル化とは、「我々の経験の一部をシンボリックに表わすこと」(Rogers, 1959,

p.198)である。例えば、有機体の実際の経験「脅威・不快感」と、知覚された自己「クライエントを受容し理解している私」とが不一致ならば、シンボル化が不的確ということになる。セラピストが一致した態度を回復することが、セラピーが阻害されないためには望ましいとされた。

次に、セラピーの文脈における「一致」ということで、他にも見過ごせないのは、クライエント側の状態のことである。

…治療的经验の中で人は、的確にシンボル化された経験と一致するように自己概念を改めていくようにみえる。…[中略]…人は自分自身について抱いている概念を、以前には自己と矛盾していた特徴を含むように再体制化する。このように、自己経験が的確にシンボル化され、この的確にシンボル化された形で自己概念の中に含まれる場合が、自己と経験との一致の状態である。(Rogers, 1959, pp.205-206)

例えば、治療の開始時にクライエントの知覚された自己「父への尊敬」と有機体の実際の経験「父への嫌悪」とは不一致であり、治療が進むにつれてクライエントの自己概念が改まる。この改まりによって、「的確なシンボル化 (accurate symbolization)」(Rogers, 1959, pp.198-199)が要請される。クライエントは、自分自身について抱いている概念「父への尊敬」を以前には自己と矛盾していた特徴「父への嫌悪」を含むように再体制化することで、より「一致」した状態に達するとされた。

以上、ロジャーズが「一致」を最初に定式化した様子を確認したのに続き、彼の「一致」に対する位置づけの変遷を検討する。ロジャーズ研究者の間での共有された見解は次の通りである。ロジャーズ学派は、ウィスコンシンでの統合失調症治療プロジェクト(1957～63年)を経て、「無条件の積極的関心(受容)」や「共感」といったセラピストの他の態度条件よりも、「一致」がより重要とされるようになったというものである(佐々木, 2005, p.186)。以下、この見解の根拠と思われる、古くから日本語訳のある2つの文献を確認する。

ロジャーズ自身は「かなりの程度の無条件の積極的関心なくして、十分な強さの共感ほとんど存在しえない」と他の二つの条件を挙げつつも、「治療関係の中で意味をもつ」ためには「純粋性もしくは一致が、三つの条件のうち最も基本的なものであると私には思われる」(Rogers, 1966, p.184)と論じている。

加えて、ウィスコンシン時代のジェンドリンが、こうしたロジャーズの見解を支持したと思われるような見解を述べている。

ロジャーズは、心理療法における必要十分な三条件を設定した。三条件とは、「共感」、「無条件の関心」、そして、「一致」もしくは「純粋性」である。最後の「一致」というのは、セラピストが個人的あるいは職業的な人為性や策略や姿勢を捨てようと試み、「セラピスト自身である」ことを意味する。統合失調症者の治療に我々が従事する際に、この一致という条件は、ますます重要となってきた。(Gendlin, 1963b, pp.109-110)

以上で挙げた Rogers (1966)と Gendlin (1963b)は、早くから日本語訳が出版され、国内で研究対象とされてきた。従って、ロジャーズ学派の発展において、ジェンドリンは「一致」の重視を支持した重要な論客であるとみなされ、とりたてて疑問をもたれることがない時代が長らく続いた。

第3節 用語「一致」に対して：フォーカシング指向の先行研究から

近年になって、日本語のフォーカシング文献においては、「一致」という用語に対して批判的検討が徐々になされるようになってきた。以下の2つの文献は、フォーカシング指向の文脈において、一致という用語法の批判者というジェンドリン像に着目した見解を提示している。

一致・不一致という、すでにある「形」と「形」が同じか同じでないか、という概念で説明すること自体無理があるのです。一致・不一致の図で静的な状態の説明はできても、それでは「変化」の説明にはなりません。(近田, 2002, p.37)

一致(あるものと他のものがぴったりすること(matching))という幾何学的な比喻自体を、撤回する必要があるだろう。(パートン, 2006, p.216. 訳文は筆者改訳)

しかし、近田(2002)やパートン(2006)の両見解をもってしても、一致・不一致という静的な説明・比喻ではどんな困難に陥るのか、より動的な用語法を導入することで治療的

変化の新たな側面がどのように捉えられるのか、そうしたそもそものジェンドリンの意図が具体的に知られるまでには至らなかった。

第4節 用語「一致」に対して：筆者の立場から

実は、本章第2節で引用したようなかたちでジェンドリンが「一致」という用語を使うことは、例外的であり、むしろ「一致」という用語法を当初から問題視していた。ジェンドリンが指摘したその問題点と解決案とを筆者の観点から考察する。

ジェンドリンは、「セラピストが個人的あるいは職業的な人為性や策略や姿勢を捨てようと」試みる態度そのものを支持している点において、終始一貫している。

カール・ロジャーズが、「純粋性(genuineness)」を、「(「共感」および「無条件の積極的関心」とともに)セラピーの三条件の一つとして設定したことは、まことに正しかった。(Gendlin, 1996, p.296)

このように、「一致」の同義語とされる「純粋性」という用語ならば、30年以上経た著作においても、肯定的に使っている。要は、ジェンドリンが問題視したのは、セラピストの態度やクライアントの状態そのものではなく、あくまで、そうした態度や状態に対する呼び名や説明図式の方なのである。

本研究は、基本的には、「一致」批判者としてのジェンドリン像に着目した点に関して、先行研究の近田(2002)やパートン(2006)の見解に賛同する。しかし、パートンの見解の根拠とは異なる点がある。パートンの根拠は、言語が非言語的な現実「一致」という考え方が後期ウィトゲンシュタインの哲学によって批判にさらされたから、というものである(パートン, 2006, p.216)。一方、筆者の見解の根拠は、そうした外からの批判によってではなく、ジェンドリン本人が元々自発的に「一致」という用語法を問題視していたから、というものである。

実際のところ、ジェンドリンの著作において、「一致」という用語が肯定的に使われているのは、ウィスコンシン・プロジェクトの時代に、彼の師匠であるロジャーズの心理療法師論を紹介する文脈においてのみである。例外的に使用された論文の邦訳がたまたま早くから紹介され、注目されてしまったというのが実情である。むしろ、ジェンドリンが持論を展開する大部分の著作において、「一致」という用語は使われていない。

「一致」という用語が持論で採用されなかった理由を探るため、ジェンドリン初期の著、『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)を検討する。この著作は、公刊の4年前に博士論文として既に執筆されていた(Gendlin, 1958a)。すなわち、ウィスコンシン・プロジェクトの成果が十分に上がるよりも前に、後期ワイトゲンシュタインへの積極的な言及(Gendlin, 1973)がなされるよりもはるかに前に執筆されたことを意味する。

Gendlin (1962/1997)において彼は、「経験」についての“ロジャーズの”定義(Rogers, 1959, p.197)を引き合いに出したうえで、批判的コメントをする。

「経験」とは、人の中に設定された内容からなっている。こうした内容は、意識の中にあろうが、意識に昇ることが否認されようが、その性質上、同じであることになる。…[中略]…意識に昇ることが否認された場合、こうした同じ内容が、あたかも概念化なしの明在的な(explicit)内容であるかのように、その人の中にそれでもなお設定されることになる。例えば、「自己概念」は、「経験」と「ぴったりする(match)」とか「ぴったりしない」とか言われる。このことは、「経験」が概念と同じ種類の何かであることを示唆している。(Gendlin, 1962/1997, pp.242-3)

そして、ジェンドリンは、「経験についての設定された概念的内容と、意識的な概念的内容とを、イコールで結ぶこと」(Gendlin, 1962/1997, p.253)が、ロジャーズのいう「一致」とであると特徴付ける。そのうえで、一致に関する論述の欠陥(deficiencies)は、「(1)体験過程が概念的内容と同一視されていること、(2)意識的な感情が暗在的な(implicit)意味を含むことが正確に理解されていないこと」(Gendlin, 1962/1997, p.253)の二点にあると指摘する。このような欠陥ゆえに、ジェンドリンは持論の展開において、「一致」という用語の使用を意図的に避けた。

そこで、「一致」という用語を使うことにより陥る理論的困難について、筆者の観点から問題点3点を改めて挙げ、その理由をそれぞれ述べる。問題点1として、シンボル化のあとの更なる変化が説明できないことが挙げられる。なぜなら、「合同」を意味する「一致」では、心の中にあったモノを言い当てればそれで終わりという印象を与えてしまうからである。問題点2として、シンボル化が様々であることが説明できないことが挙げられる。なぜなら、「合同」を意味する「一致」では、シンボル化が、あたかも一通りしかありえないような印象を与えてしまうからである。問題点3として、シンボル化内容が変わらなく

でも治療的变化が起こることが説明できないことが挙げられる。なぜなら、「合同」を意味する「一致」では、治療開始期と同じシンボル化内容を長い治療期間を経たのちにもクライアントがふさわしいと思って再びシンボル化した場合、そこで起こっている重要な変化を含まないと誤解される危険性があるからである。

こうした問題点に対するジェンドリンの解決案は、「一致」という静的な用語を避け、「体験過程(experiencing)」などの動的な用語法を導入することであった。これにより、実践における治療的变化の新たな側面を理論の上にもすくい上げようとしたのである。

「体験過程」は多くの異なった概念化が可能だが、体験過程そのものはこうして概念化されたものの明在的な概念的内容ではない。体験過程を暗在的に有意味と呼ぶことは、体験過程が多くの概念化を引き起こし得ることと、体験過程を概念化したものをその暗在的な意味に対してチェックすることができることに注目することである。

(Gendlin, 1962/1997, p.243)

以上、ジェンドリンによる解決案を導入することにより、先に挙げた 3 つの問題点が説明可能となる。

まず、「問題点 1 的確なシンボル化の後の更なる変化が説明不可能」だった点は、以下のように捉え直すことができる。

思っていたことがきちんと言えたとき、思っていたことは全く同じままではなくなる。より豊かになり、よりはっきりして、より十分にわかったものになっているのだ。

(Gendlin, 1962/1997, p.120)

そして、概念的内容とは別の種類の性質を表わす用語「体験過程」を導入する。

しばしば見受けられることだが、クライアントが体験過程に注意を向けつつ語っていくうちに、さらに体験過程が生じてきて、いったん言葉にしたものが不十分になるのだ。(Gendlin, 1962/1997, p.235)

このように、シンボル化を二つのモノの一致と見なさなければ、生じた体験過程からさ

らにシンボル化が起こることが説明できる。

次に、「問題点 2 シンボル化が様々であることが説明不可能」だった点は、以下のよう
に捉え直すことができる。ジェンドリンは、「体験過程をどのようにシンボル化するか、そ
の仕方は様々で、数えられない」(Gendlin, 1962/1997, p.208)という。例えば、ジェンド
リンは、同じクライアントの表現でも、異なる学派のセラピストによって、表現の出ど
ころの体験過程をどう見立てて応答するかが、三者三様であるという例を挙げている。

こうした三種類のカウンセラーの誰でも、クライアントがどんな感情をシンボル化す
るにあたって手助けすることができるのだ。手助けする言葉はおのおのかなり違っ
ているかもしれないが、カウンセラーは自分自身の言い方で何かを言うことができる。
これに対してクライアントは、ほっとして「本当にそのとおりです」と言うことであ
ろう。だからといって、どんな言葉かけでも間違いはないなどというつもりはない。
間違いはないどころか、正しくて的確なシンボル化(correct, accurate symbolization)
以外は、すべて間違いである。だが、全く的確なシンボル化が数多くあり得るのだ！
(Gendlin, 1962/1997, p.121)

暗在的に有意味な体験過程は、「多くの概念化を引き起こし得る」。このように、シンボ
ル化を二つのモノの一致と見なさなければ、一通り以上のシンボル化があり得ることが説
明できる。

最後に、「問題点 3 シンボル化内容が変わらなくても治療的变化が起こることが説明
不可能」だった点は、以下のよう捉え直すことができる。ジェンドリンは、治療の開始
期とその後で、クライアントのシンボル化内容が同じである事例に言及する。

クライアントは、自分についてのあることをずっと次のように言い張ってきた。「私
は拒否されるのを恐れているんです」。セラピーの時間が多く費やされたのち、クラ
イアントはそう言い張っていた感情にふと気づく。クライアントは自分が拒否される
のを恐れていることをあらためて発見するのだ。そしてたいていの場合、クライエン
トは次のような事実にいささか困惑する。感情は新しく、違っており、驚くべきもの
だ。にもかかわらず、そうした感情にとって、古くて陳腐な「私は拒否されるのを恐
れている」以上のより良い言葉がないのである。(Gendlin, 1962/1997, p.234)

ロジャーズの実践はともかく、その理論上は、二つの円がより重なるという「合同」の説明図式を用いてしまうため、この事例で起こった治療的变化の重要な側面が見落とされがちになる。一方、ジェンドリンは上記の事例を治療の停滞や堂々巡りとして挙げたのではない。

…クライアントの言葉は以前と同じ古い言葉だが、その言葉が今指し示している体験過程は新しい。関連するもの(relevance)としてのこの新しい体験過程によって、古い言葉についての全く違った理解ができるのだ。(Gendlin, 1962/1997, p.130)

このように、シンボル化を二つのモノの一致と見なさなければ、シンボル化内容が変わらなくても治療的变化が起こっていることにより注目した説明ができる。

第5節 フォーカシングにおける「ぴったり」への留意点

「一致」という用語の見直しによって、フォーカシングにおける「ぴったり」という言葉の用法の見直しも必然的に要請される。

従来のジェンドリンは、『フォーカシング』(Gendlin, 1981)のような一般的解説書において、「ぴったり(match)」という言葉を用いていた。

言葉(あるいはイメージ)とフェルトセンスとの間を行ったり来たりしてみよう。正しいだろうか。言葉とフェルトセンスがぴったりしたら、ぴったりしている感覚(sensation of matching)を何度か味わってみよう。(Gendlin, 1981, pp.173-174)

完全なぴったり(perfect match)が得られ、言葉が感情に対してまさに正しかったとき、しばらくの間それをからだに感じさせてみよう。あなたは、そこで、「そう・・・その通り・・・それでいい」と言いたい気持ちに駆られ、その状態のままにしておきたくなるかもしれない。(Gendlin, 1981, p57)

しかし、ここで言う「ぴったり」を日常語の語感通りに受け取ると、「一致」という用語を採用しなかったジェンドリンの意図は覆い隠され、結局のところ、元の木阿弥と化して

しまう。その理由を知るため、日常語における「ぴったり」の語感とその問題点とを確認する。例えば、日常語では「リーバイス 505 が私の足腰と『ぴったり』する」のように使われる。この場合、特定の型のジーンズが「ぴったり」することによって、私の足腰の輪郭に更なる変化が起こることはありえない。また、一定の輪郭を持った私の足腰に対し、輪郭の異なるリーバイス 505 と 501 とが等しく「ぴったり」することも原理的にありえない。以上のような理由から、日常語の「ぴったり」を、ことばとフェルトセンスとの関係にそのまま当てはめた場合、先に挙げた「一致」という用語の問題点 1 や 2 と同様の困難が生じるのである。

そのため、近年のジェンドリンは、心理療法誌に寄稿した学術論文において、「ぴったり」や「一致」をめぐって起きやすい誤解に注意を促している。

哲学者として、何年か前から私は次のように認識するようになった。発言内容を経験と突き合わせ、それらが「ぴったり (match)」するかどうかを確かめる手立てなどないのだ、と。体験過程は、言語化されたものや行為とは大いに異なり、(二つの三角形どうしのように) 型が等しいという意味で一致すること (congruence) など、どだい不可能なのである。…[中略]…体験過程は、単なる一つの型を持つわけでもなければ、言葉と突き合わされるような「命題的内容」でもない。そして体験過程は、あらゆる発言や思考に応答して刻一刻と変化するのである。(Gendlin, 1999, p.204)

上記の、カッコつきのいわゆる「ぴったり (match)」への批判は、フォーカシング提唱者としての自身の見解を撤回して、共鳴のステップなど不可能だったと言っているわけではない。むしろ、Gendlin (1962/1997)におけるそもそもの持論をより先鋭化したといえる。

「あらゆる発言や思考に応答して刻一刻と変化する」現象を記述するため、彼はのちの「人格変化の一理論」(Gendlin, 1964)以降、「推進(carrying forward)」という動的な用語を導入する必然性があったといえよう。なぜなら、この用語であれば、最初からあったモノを言い当てて終わりではなく、さらに「前へ」という意味合いを持たせることができるからである。

今後も、フォーカシング研究者は「ぴったり」という言葉を使ってフォーカシングを教えざるをえないことはたしかである。しかし、本章第 4 節で挙げた初期ジェンドリンに基づく 3 つの問題提起とその解決案に留意しつつ、フォーカシングが教えられ、研究される

ことが肝要だということを筆者は重ねて提起したい。例えば、まず、心理療法においては、クライアントが使っていなかった言葉を、セラピストが使って応答しても、クライアントの体験過程を進展させることが可能である。次に、ジェンドリン第二の実践 TAE の序盤においては、作ったセンテンスの一部に下線を引き、そこを空欄にして意味の異なる言葉を入れることが可能である(Gendlin & Hendricks, 2004, p.13)。以上二点のようなことが可能な理由は、そもそも体験過程が、さまざまな言葉に応答できるのであって、二つの図形どうしのように型が等しいという意味で言葉と一致するのではないからなのである。

注

- 1) 本章は 田中秀男 (2014a): ジェンドリンにおけるフォーカシングと体験過程理論 関西大学大学院文学研究科修士論文 (未公刊) の第 3 章を大幅に改訂し、田中秀男 (2015): 「一致」という用語にまつわる問題点とジェンドリンによる解決案 人間性心理学研究 **33**(1), 29-38 として刊行されたものを元としている。

第Ⅲ部 結

以上、第Ⅲ部では、ジェンドリンの体験過程理論の観点からのロジャーズ理論の再検討を行った。

再検討を始めるにあたって、中核三条件として、近年もロジャーズ研究者に間で盛んに議論されているセラピスト側の態度としての「一致」(Rogers, 1957)を、先行研究を概観することによって、確認した。確認した内容に対し、筆者なりのセラピストの態度「一致」への理解を提示したあとで、ジェンドリンの著作においても、そうした態度について具体的に言及されているのを確認した。しかし、そうした文脈において、「一致」という用語が使用されていないことの特異性を本研究は指摘した。

用語「一致」の不使用の原因を探るべく、まずは、構成概念「一致」の定義を Rogers(1959)で確認した後、この構成概念に対してジェンドリンがどのように批判的なスタンスを取っていたのかについて、ウィスコンシン時代よりも前のジェンドリンの業績(Gendlin, 1962/1997)を主に検討することによって明らかにした。

しかし、本研究第Ⅲ部までの本研究の主張や成果が、現代の心理療法やフォーカシングの実践研究の新たな理解にどのように結びつくのかに関しては、ごく一部展望を示すのみで、具体的には不問に付したままであった。

続く第Ⅳ部では、ジェンドリンの実践の背景となる体験過程理論をさらに立ち入って検討し、そうした検討の成果を踏まえてフォーカシングの実践において生じていることの新たな理解を考察する。

第Ⅳ部 初期体験過程理論の観点から見た
フォーカシング実践の再検討

第Ⅳ部 序

第Ⅲ部においては、第Ⅱ部と同様にウィスコンシン・プロジェクト以前のジェンドリンの業績を確認し、経験と概念との重なり合いによってパーソナリティを説明するロジャーズの理論と、経験（体験）と言葉との働き合いによってパーソナリティ変化を説明するジェンドリンの理論との非連続性を明らかにした。

続く第Ⅳ部では、経験と概念の重なり合いという説明図式から最もこぼれやすい心理療法上の出来事に光を当てるため、ジェンドリンが導入した「直接参照」という考え方を検討する。経験に対応する概念こそ持たないものの、意味を持たない言葉によって感情や体験を直接的に指し示すこの「直接参照」という作業こそが、治療的变化の中で有意義な沈黙をもたらすことを、逐語記録に基づいて本研究は考察する。

第7章 一致と直接参照：シンボル化をめぐる

第1節 経験の対応する概念が存在しない状態：直接参照

第6章では、ロジャーズの構成概念「一致」を、心理療法における治療的变化を論じる際に用いることで生じる理論的困難を筆者の観点から3点挙げた。「1.シンボル化のあとの更なる変化が説明できない。2.シンボル化が様々であることが説明できない。3.シンボル化内容が変わらなくても治療的变化が起こることが説明できない」の3点である。

しかし、心理療法で起こっている出来事のうち、「概念と経験との一致」という説明図式では説明しきれない代表的な点をあと1点不問に付していた。それは、経験に対応するような概念を持たないような体験過程の様式である。こうした様式のことをジェンドリンは「直接参照(direct reference)」と呼んだ。「直接参照」とは、何も感じられない状態ではなく、確かに感じてはいるがその体験を明確な意味をもった言葉では表せない状態であることを以下、第7章で検討する。

第2節 シンボル化の一種としての直接参照

フォーカシングにおいては、聴き手に十分には伝わらないが、話し手にはわかるような言葉でセッションが進むことがある。本研究第5章で挙げた例で言えば、胃のあたりの感じを表す言葉、「ドスン」→「ズキズキ」→「スッ」である。しかし、これらの言葉は話し手の意図することを相手に十分に伝えられていないものの、感じの質を表してはいる。そういう意味で、「ドスン」や「ズキズキ」や「スッ」といった言葉は一定の意味を持ったシンボルである。

一方、言葉には、感じの質を全く表さないような種類の言葉がある。指示代名詞などを使った「この感じ」「それ」あるいは「何か」などである。例えば、Gendlin (1962/1997) から、クライアントの次のような発言を挙げる。「この感じは確かに強いのですが、それが何なのかはまだよく分からないんです」(p.237)。通常、こうした場合、気持ちを表現する言葉がなく、「何なのか分からない」とクライアントが述べているがゆえに、クライアントは経験を「シンボル化(象徴化)していない」ととらえるのが従来の心理療法の考え方である。それは、下記のように、フォーカシング研究者においても同様であった。田村・村山(1988)は、「フェルトセンスに注意を向けることは人格変化にとって必要かもしれない

が、象徴化、概念化する必要はない」(p.249)という区分を行っていた。この区分では、象徴化(シンボル化)と概念化とは同義である。したがって、田村・村山(1988)の区分に基づけばクライアントはこの発言の時にシンボル化はおこなっていないことになる。一方、Gendlin(1962/1997)はそうした区分とは異なる。「この感じは確かに強いのですが、それが何なのかはまだよく分からないんです」という発言もまた、「シンボルのつながったもの」(Gendlin, 1962/1997, p.237)であると考えられる。こうした直接参照という言葉と体験との働きあい方をジェンドリンは「最小限のシンボル化(minimal symbolization)」(Gendlin, 1962, pp.208-209; 得丸, 2010, p.180; 田中, 2014, pp.101-102)と呼んだ。「最小限のシンボル化」である直接参照の場合、シンボルの役割は『意味をもつ』ことなく、ただ指し示すのみ(do not “mean,” only point) (Gendlin, 1962, p.112)である。したがって、「この感じ」という言葉によってシンボル化はしているが、しかし、シンボル化の仕方が「ドスン」や「ズキズキ」とは異なる、という区分法をジェンドリンはとるのである。以上のように、「この感じ」などといった言葉を使った直接参照の場合にも、「シンボルは欠くことができない」(Gendlin, 1962/1997, p.95)。こうした区分法は、のちの論文「人格変化の理論」においても、「直接参照(あるいは注意を向けること)は、それ自体すでに一種のシンボル化と考えるべきである」(Gendlin, 1964, p.117)と論じられ、保持されている。

第3節 結語：一致／不一致が当てはまらない直接参照

上記のように、「直接参照」はある種のシンボル化であり、「広い意味での」言葉と体験との働き合いの一種である。ただし、直接参照における言葉「この感じ」は、概念的な意味を持たない。こうした種類の働き合いを重視したジェンドリンは、「不一致／一致」という、概念と経験との重なり合いの説明図式に収まり切れないものを、心理療法における重要な変化の兆しとして見ていたと思われる。

例えばクライアントが次のように言う。「今私にある『この感じ』のせいで、私は困ってしまっているんです」。…「私が困ってしまうこの感じ」はクライアントにとって何も概念化をしていない。シンボルがその感じを述べようとしていないので、一致についての可能な等式などないのである。感じを直接参照することによってのみ、「この感じ」という言葉に何らかの意味が与えられる。したがって、一致というのは当てはまらないのである。(Gendlin, 1962/1997, p.263)

上記のように、経験に対応する概念が存在しない状態を心理療法やフォーカシング・セッションにおいて重要な時間を占めているとみなし、考察したのがジェンドリンだというのが本研究の見解である。次の第8章では、こうした直接参照という作業が、聴き手の応答とのあいだで、いかにしてクライアントにおいて成立するかを検討する。これにより、治療的变化における有意義な沈黙の役割を考察する。

第8章 沈黙における直接参照と聴き手の役割¹⁾

第1節 導入：沈黙と直接参照をめぐる先行研究

本章は、公刊図書におけるフォーカシング・セッションの逐語記録を、ジェンドリンの理論的用語である「直接参照 (direct reference)」(Gendlin, 1961; 1962/1997; 1964)に基づいて検討する。検討によって、フォーカシングのセッション中に話し手が個々の局面で行っている作業の違いに応じて、聴き手がいかにかぶさわしい応答をするかを理論的に明らかにすることを目的とする。とりわけ、フォーカシング・セッションにおいて有意義な「短い沈黙」が起こるために聴き手がどのような応答を行っているかを際立たせることを試みる。

フォーカシング・セッションの逐語記録をジェンドリンの理論的用語を用いて検討することは、一見すると目新しさが無いように見えるかもしれない。なぜなら、ジェンドリン自身が既に行っていると思われるからである。しかし、「直接参照」という用語を、フォーカシング・セッションの逐語記録を考察する際に用いた研究はこれまでにない。

従来、フォーカシング・セッションの逐語記録は、『フォーカシング』(Gendlin, 1981)で提唱された「6つのステップ」か、あるいは、「体験過程尺度」(Klein, Mathieu, Gendlin & Kiesler, 1970; Klein, Mathieu-Coughlan & Kiesler, 1986)に基づいて検討されてきた。

「6つのステップ」の内訳は「①空間をつくる」「②フェルトセンスを形成する」「③ハンドルを見つける」「④共鳴させる」「⑤質問する」「⑥受け取る」である。「6つのステップ」は、ジェンドリンのフォーカシング実践の集大成である『フォーカシング指向心理療法』(Gendlin, 1996)においても逐語記録の考察においてほぼ踏襲されていることから、フォーカシングの手順として最も定着したものと言える。一方、「体験過程尺度」は「EXP スケール」とも呼ばれ、クライアントの話し方を評定するものである。この尺度に基づいてフォーカシング・セッションの逐語記録を検討した研究がこれまでに数多く国内で公刊されている(池見・吉良・村山・田村・弓場, 1986; 内田, 2002; 三宅・池見・田村, 2007)。こうした研究が数多くされてきた要因としては、「6つのステップ」と「EXP スケール」の各レベルとは符合するところが多く、「相性が良い」(内田, 2002, p.102)ことが挙げられる。中田(1999)は、「6つのステップ」の「ハンドルを見つける～共鳴させる」が、EXP スケールのレベル 5～6 に符合すると論じている (p.54)。「6つのステップ」や「EXP スケール

ル」は、フォーカシング・セッションで起こっている変化の中で、言葉にされている話し手の体験にとりわけ光を当てるものとして、逐語記録の検討に今まで大きな貢献を果たしてきたと言えよう。

しかし、「6つのステップ」には話し手の「沈黙」そのものに該当する部分がない。一方、EXP スケールの観点からフォーカシング・セッションにおける「沈黙」へ間接的にアプローチした研究には内田（2002）がある。だが、内田（2002）は、長い沈黙の前後共に話し手が発言している逐語記録抜粋を主な対象としており、聴き手の応答との関連で話し手の短い沈黙を理論的に考察する本研究とはその対象も方法も異なる。また、三宅・池見・田村（2007）が指摘するように、EXP スケールは、言葉の「使われ方の変化に注目することによって、見落とされがちな体験の流れを捉える視点を提供」する可能性を暗に示唆してはいるものの、言葉にされていない話し手の体験そのものについては「評定できない」（p.124）という側面がある。

本研究が特に着目するのは、フォーカシング・セッションにおける、聴き手や話し手の発言の間にある短い沈黙の質である。尺度研究のような細やかな数値化とは異なるが、リスニングをする上で見落とされがちな話し手の体験の流れを捉える視点を、理論的考察という別のかたちで提供する。フォーカシングにおける話し手の「沈黙」を検討するにあたって最もふさわしいジェンドリンの用語と筆者が考えるのは、「直接参照」である。「直接参照」とは、フェルトセンスの質を表す言葉を使わず、ただ「この感じ」「それ」などと言いながらフェルトセンスへ注意を向ける作業のことである。

しかし、「直接参照」という用語が、フォーカシングの実践書においてこれまで十分に用いられることはなかった。用いられなかった要因としては、以下の3点が考えられる。第1に、「直接参照」の定義がジェンドリンの各著作によって一貫性を欠く側面があったことである。第2に、ジェンドリン本人が「直接参照」という用語を、逐語記録を考察する際に十分に用いなかったことである。第3に、「直接照合」等の訳語によるバイアスがかかっていたことである。

まず、「直接参照（direct reference）」は、『体験過程と意味の創造』（Gendlin, 1962/1997）において、「概念化の必要が全くない」²⁾（p.95）と論じられていた。にもかかわらず、「人格変化の一理論」（Gendlin, 1964）の直接参照を論じる節において、「概念を形成し、さらに概念をじかにフェルトセンスと照らし合わせる」（p.117）とわずかに書かれている。このため、直接参照における概念化の有無について彼の論文の読者に不明瞭な印象を与えてしま

った。

また、「直接参照」は、Gendlin (1962/1997; 1964)に限らず、ジェンドリンの様々な時代の著作 (Gendlin, 1961; 1968; 1995; 1997)において使用されている。しかし、使用されているのは、彼の理論的・哲学的著作に集中しており、彼のフォーカシングの実践書においては、あまり用いられることがなかった。

さらに、「直接参照 (direct reference)」は、ジェンドリン (1966) での訳語「直接参照」のほかに、『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)の日本語訳 (ジェンドリン, 1993)やその解説 (村里, 2009)において、「直接照合」という訳語も当てられ、ジェンドリン理論の研究者の間では普及してきた。しかし、「直接照合」という訳語には難点がある。

「照合」という日本語が使われていることから、あたかも **direct reference** に「6つのステップ」の「共鳴」が含まれているかのような誤解を与えてしまう難点である。日本語の動詞「照合する」は、「原稿とゲラ刷りを照合する」のように「照らし合わせて確かめる」ことである (北原, 2010, p.826)。こうした照らし合わせ作業は Gendlin (1962/1997)において直接参照とは別の個所で論じられていることを、本研究では以下の III-2 で解説し、IV-3 で考察する。

以上のような三点の要因から、「直接参照」という用語は、「6つのステップ」のどこに該当「しないか」がフォーカシング研究者に十分に伝わらなかった。

三村 (2015)は、「～にリファーする (refer to...)」や「レファランス (reference)」の訳語について、「照合」という定訳を踏襲しつつも「ジェンドリンにあっては、2つのものを比較するというニュアンスはまったくない」(p.106)とただし書きしている。一方、本研究は、三村 (2015)と若干異なり、「～にリファーする (refer to...)」や「レファランス (reference)」には、2つのものを比較するというニュアンスも含まれてはいるが、そうしたニュアンスを含むのは、レファランスが直接的『ではない』ときに限ってである」という見解をとる。

田中 (2004a)は、**direct reference** とフォーカシングのステップとの異同を論じてはいるものの、話し手の作業に応じて聴き手がどのように応答するのがふさわしいかについては、全く示唆されていない。田中 (2014b)は、Gendlin (1962/1997)に基づいて、**direct reference** の概念整理は行っているものの、フォーカシングのステップとどう対応するのかは論じられておらず、フォーカシング・セッションの例は挙げられていない。田中 (2016b)は、フォーカシングの逐語記録が用いられているものの、**direct reference** などの

用語の定義やその意義などがジェンドリンのテキストに基づいて考察されていない。総じて、田中 (2004a; 2014b; 2016b)は、**direct reference** の **reference** への新しい訳語は提唱されていない。

本研究では、**direct reference** の訳語として、「体験的応答」(Gendlin, 1968)の日笠・田村訳 (ジェンドリン, 2005) において、以下のように用いられた「直接参照」を採用する。

クライアントの発言がいくら正確で明瞭であっても、私たちは常に、具体的なフェルトセンスを仮定し、それを指し示さなくてはならない。クライアントは体験的にそれを直接参照 (指示) でき、そこには常に、多くの暗黙の側面や複雑な反応が含まれている。(Gendlin, 1968, p.210; ジェンドリン, 2005)

なぜなら、「参照」であれば、「前章を参照のこと」(北原, 2010, p.700)のように、助詞は「を」一つを取るだけでよく、**direct reference** に共鳴が含まれるという誤解を与えないからである。

以上のことから、本研究は、フォーカシング・セッションで起こっている変化を理解するために、「直接参照」という用語の中核的意味をジェンドリンの理論の中で位置づけ直し、その用語をフォーカシングの逐語記録の考察に用いる。これにより、フォーカシング・セッションにおける細やかな変化のよりよい理解を本研究は目指す。とりわけ、Gendlin (1962/1997)で提唱された「直接参照 (**direct reference**)」の中核的意味がどこにあるかを具体的に明らかにすることが、フォーカシング及びリスニングの実践について研究者間で議論を進める上で有益であることを示す。

第2節 方法

「直接参照」が詳細に論じられたジェンドリンの複数のテキスト(Gendlin, 1961 ; 1962/1997 ; 1964)³⁾をベースに、この用語が持つ中核的意味を筆者が取り出した (以下の III)。取り出した「直接参照」の中核的意味を、公刊図書『フォーカシング指向心理療法』と公刊論文「体験過程スケール」に収録された、同一の面接の逐語記録 (Gendlin, 1996, pp.28-32, 41-45 ; Klein, Mathieu-Coughlan & Kiesler, 1986, pp.61-63) を考察する際に用いた (以下の IV-1 と IV-3)。

この面接のクライアントは女性であり、時には引きこもりが極端になった時期もあったが、数年間大学を休学後、面接開始期には復学していた。彼女は事前にフォーカシング経験があったものの、この逐語記録の時点では、面接がまだ始まってそれほど間がなかった (Gendlin, 1996, p.27, 53)。この面接のセラピストは男性であることが分かるだけであり、誰であるかまでは特定されていない (Gendlin, 1996, pp.41-56)。Gendlin (1996)に掲載された逐語記録のコメンテーターはジェンドリンである。Klein, Mathieu-Coughlan & Kiesler (1986)に掲載された逐語記録では、クライアントやセラピストの各発言が EXP スケールで評定されている。なお、本研究においては、クライアント側の発言の EXP スケール評定を取り上げた。セラピスト側の発言の EXP スケール評定については、中田・越山・樋口・福塚・細見・村田 (2012) を参照いただきたい。また、上記逐語記録の考察を補助するものとして、コーネル (1996) の逐語記録を使用した (以下の IV-2)。

第3節 「直接参照」の中核的意味：文献解題

「直接参照」は、『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)において、言葉などのシンボルとフェルトセンス⁴⁾との関係が7種類 (pp.90-137)に分類された中の1種類として論じられている。他の6種類は、「再認」、「解明」、「メタファー」、「把握⁵⁾」、「関連」、「言い回し」である。本章ではこれら7種類のうち、フォーカシングにおける沈黙の質や「6つのステップ」との関係性を明らかにするため、「直接参照」を「把握」との対比に絞って論ずる。なぜなら、この2種類において、言葉がフェルトセンスの質を表さないときと表すときとが最も対比的に論じられているからである。

3-1. 「直接参照」とは何か

「直接参照」という用語とその内実に関するジェンドリンの主要文献として、「体験過程：治療による変化における一変数」(Gendlin, 1961)や『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)が挙げられる。例えば、「クライアントが『この感じは確かに強いんですけど、それが何なのか、私にはまだ分からないんです』と発言する」とき、こうした発言はフェルトセンスを「表したり描いたりしない (do not represent or picture)」(Gendlin, 1962/1997, p.237)。また、クライアントが自身のフェルトセンスを直接参照しているとき、「『これ』とか『それ』とか『そのすべてが絡まった感じ』などといった指示

代名詞を使う」(Gendlin, 1961, p.235)ことはよくあり⁶⁾、クライアントもセラピストもそう呼ぶが、フェルトセンスが「実のところ何なのか二人とも分かってはいないにもかかわらず、フェルトセンスについて話し合い続ける」(Gendlin, 1961, p.235)。話し合い続けるとき、「これ」などといった言葉は、フェルトセンスについて「情報を何も伝えていない (convey no information)」(Gendlin, 1961, p.235)のだという。「直接参照」のとき、言葉の唯一の役割は、フェルトセンスを「指し示すこと・際立たせること (pointing out, setting off)」(Gendlin, 1962/1997, p.96)である。指し示すだけで何も情報を伝えてないとは、言葉がフェルトセンスの質を表していないということである。質を表していないので、言葉がフェルトセンスに対して「的確でもなければ不的確でもない (neither accurate nor inaccurate)」(Gendlin, 1961, p.235)。つまり、言葉がフェルトセンスと「共鳴する／しない」という次元の問題がそもそも存在しない。よって、話し手が直接参照を行っているとき、以下のように、聴き手が共鳴 (= 照らし合わせ) を促す応答をするのは無意味である。

話し手： 胃のあたりにあるんですよ、なんかまだよくわからないんですけど、「この感じ」。

聴き手： 「この感じ」という言葉でうまく言えてますか？

なぜなら、「この感じ」という言葉はハンドルとしての役割を全く持たないからである。

「直接参照」は、のちの「6つのステップ」との対応をあえて言えば、「フェルトセンスを形成する」ステップや、一度見つけたハンドルを保留してフェルトセンスにただ触れる作業などが挙げられる。本研究は、とりわけ後者の作業に着目したい。なぜなら、後者は「ハンドルを見つける」や「共鳴させる」の後に起こっているものの、一つの独立したステップとして取り上げられることがなかったからである。

3-2. 「把握」とは何か

言葉などのシンボルとフェルトセンスとの関係が「把握 (comprehension)」(Gendlin, 1962/1997, pp.117-127)のとき、次のような例が挙げられている。

既存のフェルトセンスに当てはまるシンボルがないので、我々はいろいろと誤った始め方をすることが多く、全く言いたいことではないことを多く言ってしまう。

自分のことばを聞いて、「いや、それは私が言いたいことではないんです」とか「いや、それはその一部にすぎないんです」とか「いや、そういったようなものですが、確かにそうだというわけではないんです」などと我々は言う。(p.119)

実は、直接参照ではなく、むしろ上記の「把握」の節で挙げられていることこそが、照合（照らし合わせ）の作業である。「把握」におけるフェルトセンスには役割が2つある。役割の1つ目は、フェルトセンスが「多くの異なったあり得るシンボル」(Gendlin, 1962/1997, p.123)を選択することである。役割の2つ目は、フェルトセンスが、そうしたシンボルの「的確さ／不的確さ(accuracy or inaccuracy)」(Gendlin, 1962/1997, p.123)を判定することである。一つ目の「選択する (select)」は、のちの「6つのステップ」で言えば「ハンドルを見つける」に相当する。二つ目の「判定する (arbitrate)」は、のちの「6つのステップ」で言えば「ハンドルをフェルトセンスと共鳴させる」に相当する。「把握」において、言葉がフェルトセンスと「共鳴する／しない」という次元の問題が初めて生じるのである。

第4節 逐語記録と考察

以下では、まずフォーカシングの逐語記録を3つ挙げ、続いて逐語記録を従来のフォーカシング実践研究の中で位置づけ、その後で逐語記録について筆者が考察する。なお、3つの逐語記録すべてにおいて、言葉が持つ役割の違いを際立たせるため、フェルトセンスの質を表す言葉は下線を引き、フェルトセンスの質を表わさずにただ指し示すだけの言葉は“”でくくるという挿入を筆者が行った。

4-1. 「直接参照」の効果が見られる逐語記録

第1の逐語記録として、聴き手（セラピスト）の応答によって話し手（クライアント）の直接参照の効果が見られたフォーカシングの逐語記録を提示する。以下の抜粋部分は、クライアント（話し手）側が、言葉を色々と吟味した結果、「引き下がる (pull back)」というハンドルを選び出したのを受けて、セラピストが発言するところから始まる。

T13 : さっきおっしゃっていた引き下がるのまさにその質感 (just the feel quality)

にも僕は興味を持ったんですけど、少しのあいだでも引き下がるというのを感じられたんですね。

C14： ええ、感じられました。

T14： ちょっと“それ”に軽く触れてみて、そうしたら何が出てくるかを見てみましょう。

(短い沈黙がある)

C15： 怖い…何だか世界が私に噛みついてくる、みたいな (笑)。

T15： あー。そう、そうなんだ。(Gendlin, 1996, p.30, 43 ; Klein, Mathieu-Coughlan & Kiesler, 1986, p.62. 下線と“”は筆者が挿入)

Klein, Mathieu-Coughlan & Kiesler (1986)の EXP スケール評定によれば、クライアントの発言は、C14 でのレベル 4 から C15 でのレベル 6 へと上がっている (p.62)。両発言の間でセラピストが行った教示 T14「ちょっと“それ”に軽く触れてみましょう (Let's just tap “it” lightly)」は、どのような性質のものだろうか。「質問する (asking)」など、「6つのステップ」の教示には該当するものがない。T14について、ジェンドリンは““それ”を感じるための教示であり、それに何も押しつけようとせずに、“それ”から何がやってくるかを見守るための教示である」(Gendlin, 1996, p.43)とコメントしている。

以下では、筆者が「直接参照」(Gendlin 1962/1997)を逐語記録の考察に用いた理論的見解を示す。筆者が着目するのは、T14 と C15 の間にある「短い沈黙」である。この種の沈黙中に話し手に起こっていることこそが、まさに「直接参照」という用語で中核的に論じられている作業である。Gendlin (1962/1997)は、言葉などのシンボルが「それ自体で意味を持っている場合であっても、フェルトセンスをあらためて直接参照することができる」(p.99)と論じている。この種の「意図的な(deliberate)」直接参照は、「創造的遡行(creative regress)」⁷⁾と呼ばれる(Gendlin, 1962/1997, pp.171-172; 村里, 2009, p.93; 得丸, 2010, pp.185-186; 末武, 2014, p.205; 三村, 2015, p.200)。創造的遡行とは、シンボルの「特定された意味から離れて、そのフェルトセンスへと立ち戻ること (leaving the specified meaning and turning to the felt meaning)」(Gendlin, 1962/1997, p.172)である。立ち戻った後、フェルトセンスを「新しく別の仕方と特定する」(p.172)のである。

以上の「直接参照」の論述を、上記逐語記録の考察に用いる。「既に特定された意味から新たな特定された意味へと、フェルトセンスを通じた移行(transition)」(Gendlin,

1962/1997, p.171)は、大きく次の3つに分かれる。第1に、話し手は、「引き下がる」というそれ自体意味を持った言葉を持っている。第2に、話し手は、意味を持った言葉から離れて、“それ”と呼ぶことでフェルトセンスを直接参照する(=創造的に遡行する)。第3に、話し手は、フェルトセンスを「怖い」「噛みついてくる」と新しく別の仕方と特定するのである。図1を参照いただきたい。波は感情の流れ(体験過程)を表し、ぼんやりしたジェル状の円によって、フェルトセンスの移り行きを表した。言葉とフェルトセンスとの働き合い方がどのように「移行」するのかを図解したものである。

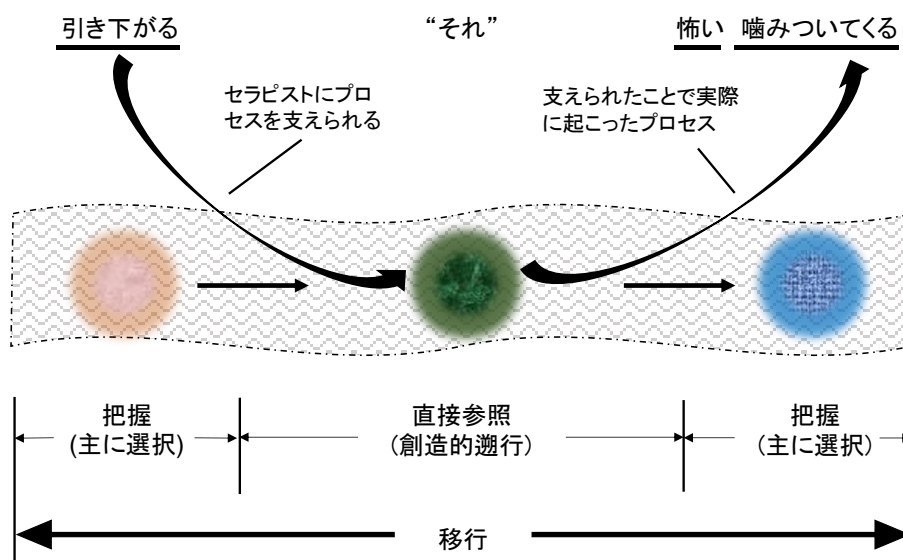


図1 「直接参照」の効果がみられる会話例 (T13 ~ C15)

フェルトセンスを直接参照する段階を細かく追ってみたい。T14 から C15 の直前までの間、ある種の情報の空白が起こっている。話し手も聴き手も、話し手のフェルトセンスをただ“それ”と指し合うだけの作業をしている。“それ”という、フェルトセンスに対して「的確でもなければ不的確でもない」言葉が非常に効果的に使われている。言葉にならないフェルトセンスに話し手が立ち戻る作業は、T14の「ちょっと“それ”に軽く触れてみましょう」という聴き手の応答によって支えられ続けている。この種の教示のおかげで、

話し手は、「引き下がる」という言葉の特定された意味よりも、「引き下がる」が指し示すフェルトセンスの方に注意を向けやすくなるのである。

4-2. 「直接参照」が妨げられる逐語記録

第2の逐語記録として、話し手（フォーカサー）の直接参照が聴き手（リスナー）の応答によって中断してしまうフォーカシングの逐語記録を提示する。

フォーカサー[1]： それが悲しく感じています。

リスナー[1]： 今それが悲しく感じているんですね。

フォーカサー[2]： “それ”が喉の方に上がってきました。

リスナー[2]： 悲しい感じがあなたの喉のほうに上がってきているんですね。

フォーカサー[3]： 今“それ”は左側にあります。

リスナー[3]： 悲しい感じが今左側にあるんですね。（コーネル, 1996, p.111.

[]と下線と“ ”は筆者が挿入

リスナーは、Gendlin (1981)で言えば、「絶対傾聴」(pp.118-122)に相当することを心掛けている。リスナー[1]まではその功を奏しているだろう。しかし実際には、リスナー[2]や[3]のような応答は、「6つのステップ」における、ハンドルとの「共鳴」の作業をフォーカサーに結果として求めている。上のように、良くないリスナーの例をあえて挙げることによって、コーネル (1996)は以下のように注意を促している。

このリスナーは、フェルトセンスはずっと「悲しい感じ」だと微妙に知らせることで、意図せずにプロセスの流れを邪魔しています。フォーカサーが描写を止めたらリスナーのほうもすぐに止めるほうがよいのです。その後は、「それ」とか「あれ」とか「あの場所」のように呼びましょう。(p.111)

つまり、フォーカサー[2]のように悲しい感じというハンドルが使われなくなったら、その後のリスナーは、「[2]：“それ”があなたの喉の方に上がってきているんですね」
「[3]：“それ”が今左側にあるんですね」と応答した方がよいということである。

話し手が描写をやめたら聴き手もすぐに描写をやめた方がよいという点において、本研究はコーネル (1996) の見解に賛同する。そこで以下では、上記逐語記録について、筆者が「直接参照」(Gendlin 1962/1997) を導入した理論的見解を以下に示す。話し手が描写を止めても、聴き手の方だけが「悲しい感じ」という同じ言葉にこだわり続けている。このことが話し手に与えている影響は、次のとおりである。話し手は、離れようとした言葉がフェルトセンスに対する的確か不的確かの判定作業を不必要な場面で強要される。これに伴い、逐語記録 1 と大きく異なり、話し手は「悲しい感じ」という意味を持った言葉から離れてフェルトセンスへ立ち戻り続けるのが難しくなり、「直接参照」が中断するのである。

4-3. 「直接参照」とは呼ばない逐語記録

ハンドルとなる言葉とフェルトセンスとの共鳴の作業そのものは、フォーカシングにおいて重要な位置を占めている。以下に第 3 の逐語記録として提示するもののうち、とりわけ C6 において話し手 (クライアント) が行っている中核的な作業は、直接参照とは呼ばない。(なお、逐語記録 3 は、逐語記録 1 の冒頭で聴き手 (セラピスト) が提示する「引き下がる」というハンドルを、話し手自身が選び出すに至るまでの抜粋である。)

C3: 夢を見たんです…ある男の子と二人っきりで…[中略]…それから自分がなぜこんなに大学を休むんだろうということも考えてました。ぎりぎりのところに来るとレポートを出さないんです。しり込みして、いらいらして、で、そこから離れてしまうんです。

T3: その 2 つのことには何か似たところがあるということをおっしゃってる。

C4: ええ、自分がなぜ最善を尽くそうとしないのかっていう言い訳はたくさんあるんです…

T4: ぎりぎりのところに来る、すると何かがしり込みしてしまう。

C5: ええ。

T5: で、「いらいらする」が、それにいちばんふさわしい言葉だと。

C6: ええ、そう、うーん…引き下がる。

T6: 「引き下がる」っていう方がいい。(Gendlin, 1996, p.29, pp.41-42; Klein, Mathieu-Coughlan & Kiesler, 1986, p.62. 下線は筆者が挿入)

T3 でセラピストは、夢の中の自分と現実の自分に似たところがあるかとクライアントに応答している。しかし、ここではうまくいかず、クライアントは C4 で「自分自身についておなじみの外から観察するように」(Gendlin, 1996, pp.47) 話を続ける。その後セラピストは T5 で、C3 の発言から「いらいらする」が感じ全体の「質を表す言葉 (the quality word)」(Gendlin, 1996, p.42)であると見積もり、クライアントに確かめてもらった。T5 の発言は、「6 つのステップ」で言えば、「共鳴」を促す応答に当たる。だが、セラピストが見積もった言葉自体は外れていたことが、次の C6 でクライアントが別の言葉「引き下がる」を結局自ら選んでいることから分かる。しかしジェンドリンは、T5 に促された C6 は「望んだ結果が出て」いて「クライアントはその何かの質を感じるようになる」(Gendlin, 1996, p.48)とコメントしている。

以下では、上記逐語記録 C6 において、「直接参照」(Gendlin, 1962/1997)とは別の作業が行われているが、これはこれでフォーカシングの実践において重要な作業であることを筆者が理論的に明らかにする。C3 において、話し手のフェルトセンスは、「しり込みする」、「いらいらする」、「離れる」など「多くの異なったあり得るシンボル」を選択した。これらのうち、「いらいらする」の判定を求めた T5 の応答を受けて、C6 で話し手のフェルトセンスは「いらいらする」を不的確と判定し、「引き下がる」を的確と判定した。C6 のような、質を表す言葉とフェルトセンスとの「照らし合わせ (=共鳴)」の作業のとき、話し手の中核的な作業は、「直接参照」というよりも、むしろ、「把握」である。

第 5 節 結語

ジェンドリンは、「ハンドルを見つける」作業や「共鳴させる」作業から、「“それ” “この感じ” などと言いながらただフェルトセンスに触れる」作業を区別し、「直接参照」がどのような作業なのかを『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)の時点で明瞭に論じていた。直接参照という用語のこうした中核的意味をフォーカシング逐語記録の考察に導入することによって、話し手の言葉がフェルトセンスの質を表しているか否かという、言葉の働き方の違いに着目しやすくなるであろう。こうした言葉の働き方の違いは、従来の「6 つのステップ」や「EXP スケール」などの研究成果を保持したまま、聴き手のふさわしい応答を適宜使い分けるための一つの大きな指標となり得るであろう。例えば、逐語記

録3のように、候補となるハンドルがいくつか挙がったとき、話し手における言葉とフェルトセンスとの関係は、「把握」が始まっていると思われる。その場合、聴き手は挙がった候補の中からよりよいと思われるハンドルを返すことによって、話し手にそのハンドルの「的確さ／不的確さ」を確かめてもらうことができる。聴き手が選んだハンドルと違ったハンドルを話し手が結果的に選んだとしても、違った方のハンドルを返すことで聴き手は話し手の体験の流れに寄り添うことができる。だが、逐語記録2のように、聴き手がハンドルを使った描写を止めても、フェルトセンスから離れずにフェルトセンスに触れ続けている場合もある。この時、話し手における言葉とフェルトセンスとの関係は、「把握」から「直接参照」に移り変わったと見積もることができる。そうした場合、聴き手は以前のハンドルは返さず、ただフェルトセンスを指し示すため、指示代名詞など意味を持たない言葉を使って応答する方がよい。こうした応答によって、話し手はうまく言葉にならないフェルトセンスに安心して触れられるようになる。以上のように、「直接参照」という用語の中核的意味をフォーカシング逐語記録の考察に用いることによって、逐語記録1における沈黙のように、言葉にされていない話し手の体験にも光を当てることができると言えよう。

注

- 1) 本章は、田中秀男 (2018). “この感じ” という直接参照：フォーカシングにおける短い沈黙をめぐって. 人間性心理学研究, **35** (2), 209-219 を加筆修正したものである。
- 2) 以下、本研究における英語一次文献の引用文日本語訳は、既訳を大いに参照しつつも、訳語を統一する都合上、Gendlin (1968)の日笠・田村訳を除き、筆者訳である。
- 3) 直接参照が詳細に定義されたこれらの時代の著作に、のちの「6つのステップ」の中の「空間をつくる」に当たる論述は見当たらない。Gendlin (1964) においては、フェルトセンスと情動(emotion)との区別が論じられるのみで、情動から距離をとる作業が一つの方法としてまだ確立されていなかった。当時のジェンドリンは、情動からすでに距離がとれた状態を想定して直接参照を論じていたことがうかがえる。
- 4)近年のフォーカシング実践書 (Gendlin, 1981 ; 1996) で felt sense と呼ばれている用語は、かつてのジェンドリンの著作 (Gendlin, 1961 ; 1962/1997 ; 1964 ; 1968)においては、felt sense の他に felt meaning とも experienced meaning とも言い換えられていた。だが、本研究では、それらの定義の異なる点よりも共通した点に着目するため、訳文では一貫して「フェルトセンス」と訳した。
- 5) 「把握」の原語は comprehension であり、Gendlin (1962/1997)の日本語訳では「理解」と訳されていた。しかし、理解が「言葉 → フェルトセンス」というベクトルを連想してしまうのに対し、Gendlin (1962/1997) における comprehension は、「フェルトセンス → 言葉」という表出のベクトルである。よって、三村 (2015)に倣い、本研究では「把握」を訳語として採用した。
- 6) 狭義の指示代名詞の他に、「何か」という言葉も、フェルトセンスの質を表さずただその存在を感じるために同様の役割を果たしている。(コーネル, 1996, p.99 ; 田中, 2016b, p.58)
- 7) なお、creative regress における regress の訳語に関しては、従来「退行」と訳されてきた(ジェンドリン, 1993; 村里, 2009; 得丸, 2010)。しかし、Gendlin (1962/1997)における regress は、フロイトにおける「退行(regression)」のような、より低次の状態へ「逆戻りすること」や「発達過程における固着とその固着点への退行」(小此木, 2002, p.312)といった意味を全く持たない。あくまで Gendlin (1962/1997)の regress は、シンボルの出どころであるフェルトセンスへと立ち戻る(turning)というだけの意味である。したがって、フロイトの退行と区別するため、本研究では、末武 (2014)に倣い、「遡行」という訳語を採用した。

第IV部 結

第IV部では、まず、心理療法における一瞬一瞬の局面で、概念と経験の「不一致から一致へ」という説明図式では、光が当たりにくいところに、ジェンドリンが「直接参照」という用語を用いて光を当てようとしたことを確認した。

次に、現代のフォーカシングにおいても、「ハンドルをつけ、共鳴させる」ステップの前後でわずかに起こっている有意義な沈黙にピンポイントで光を当てるためには、ジェンドリンの初期体験過程理論の考え方を導入することが有効であることを示した。導入したのは、言葉とフェルトセンスの働き合いのうち、「把握」と「直接参照」として定式化された違いである。こうした働き合いの違いを、逐語記録の考察に導入することは、従来のフォーカシングの6つのステップといった手順の研究や体験過程尺度に基づいた研究の成果を保持したまま、聴き手の応答を適宜使い分けるための指針となりうることを本研究は提唱した。

第V部 総括

第9章 総合的考察

第1節 本研究で明らかになった知見

本章ではこれまでの議論、特に第Ⅱ部(第2～4章)、第Ⅲ部(第5～6章)、第Ⅳ部(第7～8章)での議論を俯瞰的に整理し、その内容について概観した上で、本研究の意義に関して、今後のさらなる検討事項を提示しながら、いくつかの観点から総合的に考察する。

第2章では、フォーカシングという言葉が用語として確立する(Gendlin, 1964)よりも前、第1次シカゴ時代のジェンドリンが、ロジャーズ学派のいわゆる「兄弟子」の心理療法研究者からいかに多くの影響を受けたかを検討した。セラピストのよって立つオリエンテーションにかかわりなく成功する要因を探る姿勢はフィードラーから学び、クライアント側の発言と成功との相関を検討する姿勢はシーマンから学んだ。Seeman (1954)で有意な差が出なかった治療関係の発言という結果から、何を話すかに加え、いかに話すかをジェンドリンが項目に入れて再検証したことを検討した。

第3章では、第2章で紹介したジェンドリンらの再検証リサーチをのちに考察する際に用いる、「内容」に対する「過程」という奇妙な対比の用法が、ジェンドリン個人の恣意的な言葉の選択ではなく、兄弟子カートライトの影響を受けたものであることを検討した。内容と過程の区別を導入することで、クライアント中心療法における「現在の重要性」「治療関係の重要性」をより精密に捉えられるようになったことを本研究は指摘した。とりわけ、現在や過去についてのリサーチの項目がのちのジェンドリンの時間論の観点から見ると、示唆的であることを示した。加えて、現代のカウンセリングやフォーカシングのワークショップにおいて、「今ここが大事」「プロセスが大事」ということで何を言おうとしているかを伝えるために必要ないくつかの注意事項を提示した。

第4章では、従来、フォーカシング成立の背景として紹介されてきた「治療失敗の予測」に関するリサーチが、「いかに話すか」に関するリサーチとは、別の流れに由来することを指摘した。兄弟子カートナーの失敗予測研究はロジャーズのセラピスト三条件を揺るがすような結果が出ていたが、ここからクライアント側の条件をジェンドリンが探るきっかけになったことを明らかにした。また、失敗予測研究は、先行研究(Parker, 2014)と異なり、EXPスケールの先駆けというよりも、フォーカシング教示法の先駆けと位置付けられると筆者が結論づけた。

総じて、第5章から第6章までで得られた知見はウィスコンシン・プロジェクト以前の

シカゴ大学学内の準公刊資料によって、裏付けを取ることができた。ジェンドリンが頭角を現し、業績を挙げたのは、ウィスコンシン時代からではなく、第一次シカゴ時代からであることを本研究は明らかにした。一般にフォーカシング、及び、フォーカシング指向心理療法の成立が紹介されるとき、ロジャーズとジェンドリンだけが取り上げられることが多い中、本研究は、ジェンドリンのいわゆる「兄弟子」に当たる心理療法研究者の業績を検討することで、ロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけを示し、先行するロジャーズ学派の研究との連続性を明らかにした。

第5章では、前章までで確保したロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけをもとに、ロジャーズのパーソナリティ理論・心理療法理論を検討した。とりわけ概念と経験との重なり合いを論じたロジャーズの「一致」が、言葉と体験との働き合いを考察したジェンドリンの先行研究にあたりと本研究はみなし、考察対象とした。考察の端緒として、セラピスト条件の一致を論じた近年の研究書をレビューし、本研究の立場からセラピスト条件の一致を検討した。ここで検討した態度に関して、ジェンドリンの著作(Gendlin, 1968)に目を向けてみると、セラピストの一致した態度が十分に記述されているにもかかわらず、その考察に「一致」という用語が一度も使用されていないことに本研究は注目した。

第6章では、一致という用語の不使用の原因を探るべく、ウィスコンシン以前のジェンドリンの著作(Gendlin, 1962/1997)を検討すると、一致という説明図式に対するジェンドリンの批判的スタンスが断片的にみられることがわかり、これらを包括的に検討した。本研究の観点から整理すると、一致という用語を使用することによる問題点として、「1.シンボル化のあとの更なる変化が説明できない。2.シンボル化が様々であることが説明できない。3.シンボル化内容が変わらなくても治療的变化が起こることが説明できない」の3点が挙げられた。こうした問題点に対する体験過程理論に基づく解決案を提示した。また、一致に関する問題点は、フォーカシングにおける「ぴったり」という言い回しが持つ問題点にも同様に当てはまることが示唆された。フォーカシングにおける「ぴったり」は輪郭鮮やかな二つのものが重なり合うのとは異なることに、フォーカシングを教える場面で留意することが肝要であると本研究の立場から提唱した。

総じて、第2章から第4章までで言えるのは、ロジャーズに対するジェンドリンの批判的な言及は控えめであったため、二人の理論の非連続面が見えにくい傾向があった点である。しかし、理論間に明らかな相違点が存在した。少なくとも「フォーカシングを体験す

れば、その技法を用いなくても、セラピストは一致した態度が身につく」といった言い回しは、ジェンドリン本人の著作には見当たらないことが明らかとなった。

第7章では、一致という説明図式が一番当てはまりにくい状態として、経験に対応する概念が見当たらない状態を Gendlin (1962/1997)が「直接参照」と命名し、詳細な議論を展開している点に着目した。こうした議論から、概念化だけに限らず「直接参照」も含めてジェンドリンの著作ではシンボル化と呼ばれていることを確認した。以上の概念整理により、「心理療法においてシンボル化（象徴化）は必要か」という研究者どうしの議論への基盤を提供した。

第8章では、直接参照の中核的意味をジェンドリンの複数のテキストをベースに取り出し、フォーカシングセッションの考察に適用した。直接参照は、フォーカシングにおける有意義な沈黙において機能していることが多く、こうした種類の沈黙が話し手に起こるための聴き手のふさわしい応答を検討した。

総じて、第7章から第8章で言えることは、ジェンドリンが直接参照ということと言おうとしたことは、数秒単位で変化する言葉と体験の働き合いのことであり、クライアントが不一致から一致へという長いスパンを論じたものとは異なるということであった。

以上、本研究第2章から第8章までを概観した。フォーカシングの成立にかかわる複数のリサーチの流れとジェンドリンの着想との連続性を示し、得た着想からロジャーズの理論を再検討し、現代のフォーカシング実践への基盤の提示と実際の場面への理論の適用を行った。

以上のような作業を通じて本研究は、ジェンドリンの用語の意味を次のような3点において明らかにした。

用語の意味ついて、1つ目に行ったのは、用語の由来を明らかにし、他の用語との対比の中でその意味を確定することであった。例えば、「体験過程」という用語の由来をデイルタイの哲学に求め、「現在の体験過程」を「現在の経験」との対比することによって得られる意義を論じた。以上のような作業は、野球のセンターの守備の役割を、レフトやライト、セカンドとの守備との相対的な役割の中で確定することに等しい作業であった。

用語の意味ついて、本研究が2つ目に行ったのは、その用語の理解の妨げになっているのは、原語の英語が持つ多義性に起因するのか、翻訳により被った変容に起因するのかを確定することであった。例えば、**process** という日常語の辞書的意味は英語圏でも結果(**outcome**)の反対語として用いられ、心理療法研究においても同様の意味で用いられてき

た。このことから、過程を内容との対比で用いるジェンドリンの用法にこそ特異性があるため、訳語を「過程」から「プロセス」に置き換えても、問題がすべては解決しないことが明らかとなった。一方、reference を照合と訳すことで、本来照らし合わせを行えない direct な reference の方に不都合が生じることから、訳語を「参照」に変えることを先行研究に基づいて提唱した。「直接照合」よりも「直接参照」の方がふさわしいと考えたのは、「青い曇り空」というよりも「青い空」といった方が、形容による限定のコントラストをはっきりできるのに等しいという理由からであった。

用語の意味について、本研究が3つ目に行ったのは、用語を実際の場面に適用することによってその意味を明らかにすることであった。例えば、direct reference という用語を実際の状況に適用することで、この用語がどのような場面を指し、どのような場面を指さないのかを明らかにした。以上のような作業は、サッカーのオフサイドの意味を、各辞書の定義どうしを詳細に比較検討するにとどまらず、実際に動画を再生停止させて、「動画1はオフサイドになる。なぜなら…」 「動画2はオフサイドにならない。なぜなら…」と明らかにすると同様であった。3つ目の作業を行ったことが従来の体験過程理論研究に対して、本研究が意図的に加えたアプローチである。こうしたアプローチは、理論は理論として汎用性を持たせたままの有効性を、特定の場面に落とし込むことで減じてしまうリスクもはらんでいる。結果的には本研究の用語解釈が違っていたことが明らかになることもあるであろう。しかし、誰かが誤用しなければ正当な使用も存在しないと言えよう。以上が、序論で提示した、フォーカシング実践を介することによって意図的にバイアスをかけるということで筆者が言おうとしたことである。

さらに、本研究の意義について論じておく。本研究は、フォーカシングの重篤例への適用という臨床的議論には立ち入らなかった。むしろ、そうした議論が行われる手前のところで、研究者間の共通理解が得られるよう基盤づくりの一端を担うことであった。こうした基盤づくりにより、逆説的ではあるが、研究者の間で、重篤例におけるフォーカシングの適用の是非について、より細かい検討が可能となるであろう。例えば、「把握のように明確な言語化が起こらなくても、そもそもフェルトセンスを直接参照するよう促すこと自体が重篤例には難しい」あるいは「直接参照でさえ、重篤例の患者に促すことは症状を悪化させるのか」など、より細かい整理ができるといえる。

第2節 本研究の課題と今後の展望

最後に、本研究の課題と、今後の展望について、以下に3点まとめる。ジェンドリンの体験過程理論の中でも初期の著作(Gendlin, 1962/1997)を主な素材として用いたため、研究の範囲が限定されている側面があった。

課題の第1点目は、具体的には、Gendlin (1962/1997)を検討すればするほど、他者の心情の理解という側面がますます希薄になっていくことであった。元々ジェンドリンは、「他人と彼らの生の表出の理解」(ディルタイ, 2010, pp.225-251)を自身の修士論文で主な考察と対象としていた(Gendlin, 1950, pp.33-43)。しかし、本研究でフォーカシングの実践をGendlin (1962/1997)に基づいて考察すると、他人の言いたいことをすべて理解しなくても治療的なセッションが成り立つようなことの有効性に注目することになる。第1に、胃が「ドスン」「ズキッ」「スッ」とだけ応答しても、他人の生の表出の「理解」とは異なるプロセスである。第2に、フェルトセンスの質を全く表さない「それ(it)」は情報の空白が起こっている時間で、第1よりもさらに、いわゆる「理解」から離れることとなる。果たしてジェンドリンの体験過程理論が他者理解を意図的に排除しているのか、あるいは、Gendlin (1962/1997)という単独の著作に限ったことなのかは、今後の課題としたい。

課題の第2点目は、ウィスコンシン時代のGendlin (1964)において、従来の代表的なパーソナリティ理論が持つ問題点として、抑圧パラダイム(repression paradigm)と彼が命名したことを取り上げられなかったことである。抑圧パラダイムはフロイトの理論に限らず、Rogers (1959)にも見出されると邦訳書(ジェンドリン, 1966, pp.81-83)を見る限り論じられているが、英語の出版稿では削除されているため、検討できなかった。今後、ジェンドリンの遺稿の編集・出版を待つことにしたい。ウィスコンシン・プロジェクト以前のジェンドリンの先達や同僚(Shlien, 1956; Zimring, 1958)が抑圧パラダイムをどう検討し、ジェンドリンが継承したのかが解明されれば、ロジャーズ学派からジェンドリンへの連続性がさらに多面的に明らかになると言えよう。

最後に、3点目の検討課題は、第6章で論じた「暗在的に有意味な体験過程は多くの概念化を引き起こしうる」ことが、どこまで多くのシンボル化を許容するかという点である。後年のジェンドリンは「あたかも人々が自らフィクション作家であるかのように、あたかも創意を持てば、どんなものからどんなものでも作り出せるかのように」(Gendlin, 1990, pp.213-214)セラピーを考えることを批判している。初期体験過程理論の時点においても、フェルトセンスは、「恣意的に機能しているわけではない」(Gendlin, 1962/1997, pp.140-

148)と主張しているが、多様な概念化を語った一方で、どんなものでも作り出せるわけではないことも同様に論じ切っているかという点、現時点では、まだ十分な論拠を筆者は見いだせていない。これは、第3章の結語で挙げた「想起的過去」に対する「遡及的過去」の議論についても当てはまる。「現在によって過去を、結果によって原因を絶えず作り直す作業が、前からうしろへと続けられる」(ベルクソン, 1965, pp.130-131)ことや「現在のただなかで創発的の事象が生じると、過去は、創発的な観点から見直され、そうして異なった過去になる」(ミード, 2001, pp.45-46)ことは、従来の哲学でも論じられていた。しかし、それが「ソビエトの百科事典でなされたように、現在の価値観で過去の事象を歪曲することではない」(Gendlin, 1996, p.15)ということを経ンドリンの著作は論じ切っているのであろうか。論じ切れていないとすれば、我々が批判的に継承すべきであろう。3点目を今後の最重要検討課題とすることで、本研究を締めくくることとする。

文献

- Adorno, T. W. (1950): *The authoritarian personality*. Harper & Brothers. テオドール・W・アドルノ 田中義久・矢沢修次郎・小林修一(訳) (1980): 現代社会学大系 第12巻 権威主義的パーソナリティ 青木書店.
- Bollnow, O.F. (1936): *Dilthey: eine Einführung in seine Philosophie*. B.G.Teubner. オットー・F・ボルノー 麻生建(訳) (1977): デイルタイ : その哲学への案内 未来社.
- アンリ・ベルグソン 矢内原伊作(訳) (1965): ベルグソン全集 第7巻 思想と動くもの 白水社.
- Cartwright, D.S. (1956): A synthesis of process and outcome research. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), **2**(19) 1-17.
- Cartwright, D.S. (1957): Annotated bibliography of research and theory construction in client-centered therapy. *Journal of Counseling Psychology*, **4**, 82-100. デズモンド・カートライト 古屋健治 (訳) (1967): クライエント中心療法の理論と研究に関する文献の解題 伊東博(編) ロージャズ全集 第17巻 クライエント中心療法の評価 岩崎学術出版社 249-308.
- 近田輝行 (2002): フォーカシングで身につけるカウンセリングの基本: クライエント中心療法を本当に役立てるために コスモス・ライブラリー.
- アン・ワイザー・コーネル 大澤美枝子 (訳) (1996): フォーカシング入門マニュアル 金剛出版.
- Depestele, F. (2007): *Primary bibliography of Eugene T. Gendlin* (2007 revision). URL: http://www.focusing.org/gendlin/gol_primary_bibliography.htm
- Dilthey, W. (1927): *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*. (Gesammelte Schriften. 7), B.G.Teubner. ヴィルヘルム・デイルタイ 長井和雄・竹田純郎・西谷敬 [ほか] (訳) (2010): 歴史論 デイルタイ全集 第4巻 世界観と歴史理論 法政大学出版局 1-392.
- Fiedler, F.E. (1949): *A Comparative Investigation of Early Therapeutic Relationships Created by Experts and Nonexperts of the Psychoanalytic, Non-directive, and Adlerian Schools*. University of Chicago, Department of Psychology.
- Fiedler, F. (1950): A comparison of therapeutic relationships in psychoanalytic,

- nondirective and Adlerian therapy. *Journal of consulting psychology*, **14**, 436-445.
- フレッド・フィードラー 伊東博 (訳) (1960): 精神分析、非指示的方法、アドラー療法における治療関係の比較 伊東博 (編) カウンセリング論集 第1巻 カウンセリングの基礎 誠信書房 239-261.
- ガダマー (1986): 嚮田収ほか (訳) 真理と方法: 哲学的解釈学の要綱1 法政大学出版社.
- Gendlin, E.T. (1950): *Wilhelm Dilthey and the problem of comprehending human significance in the science of man*. MA Thesis, Department of Philosophy, University of Chicago.
- Gendlin, E.T. (1957): A process concept of relationship. *Discussion Papers* (Counseling Center, University of Chicago), **3**(2), 22-32.
- Gendlin, E.T. (1958a): *The Function of Experiencing in Symbolization*. Doctoral dissertation. University of Chicago, Department of Philosophy.
- Gendlin, E.T. (1958b): Experiencing: a variable in the process of therapeutic change. (abstracts) *The American psychologist*, **13**, 332.
- Gendlin, E.T. (1958c): Experiencing: a variable in the process of therapeutic change. *Discussion Papers* (Counseling Center, University of Chicago), **5**(1), 1-19.
- Gendlin, E.T. (1959). The concept of congruence reformulated in terms of experiencing. *Discussion Papers* (Counseling Center, University of Chicago), **5**(12), 1-30.
- Gendlin, E.T. (1961): Experiencing: a variable in the process of therapeutic change. *American Journal of Psychotherapy*, **15**(2), 233-245. ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄 (訳) (1966): 体験過程——治療による変化における一変数 村瀬孝雄 (編) 体験過程と心理療法 牧書店 19-38.
- Gendlin, E.T. (1962). Client-centered developments and work with schizophrenics. *Journal of Counseling Psychology*, **9**(3), 205-212.
- Gendlin, E.T. (1962/1997): *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*. Evanston, IL: Northwestern University Press. ユージン・T・ジェンドリン 筒井健雄 (訳) (1993): 体験過程と意味の創造 ぶっく東京.
- Gendlin, E.T. (1963a). Process variables for psychotherapy research. *Wisconsin Psychiatric Institute Discussion Paper*, **42** ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄

- (訳) (1966). 心理療法研究のための過程変数 村瀬孝雄 (編) 体験過程と心理療法 牧書店 3-18.
- Gendlin, E.T. (1963b): Subverbal communication and therapist expressivity: trends in client-centered therapy with schizophrenics. *Journal of Existential Psychiatry*, 4(14), 105-120. ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄 (訳) (1966): 言語下のコミュニケーションと治療者の自己表明性 村瀬孝雄 (編) 体験過程と心理療法 牧書店 190-206.
- Gendlin, E.T. (1964): A theory of personality change. In Worchel, P. & Byrne, D. (Eds.), *Personality change*. New York: John Wiley & Sons. 100-148. ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄 (訳) (1966): 人格変化の一理論 村瀬孝雄 (編) 体験過程と心理療法 牧書店 39-157.
- ジェンドリン (1966): 村瀬孝雄 (訳) 体験過程と心理療法 牧書店.
- Gendlin, E.T. (1973): Experiential phenomenology. In Natanson, M. (Ed.), *Phenomenology and the Social Sciences*. 1, Evanston: Northwestern University Press, 281-319.
- Gendlin, E.T. (1968): The experiential response. In Hammer, E. (Ed.), *Use of Interpretation in Treatment*. New York: Grune & Stratton. 208-227. ユージン・T・ジェンドリン 日笠摩子・田村隆一 (訳) (2005): 体験的応答. <http://www.focusing.org/jp/expresj.htm> (2017年6月12日取得)
- Gendlin, E.T. (1981): *Focusing*. 2nd ed. New York: Bantam Books. ユージン・T・ジェンドリン 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) (1982): フォーカシング 福村出版.
- Gendlin, E.T. (1986). What comes after traditional psychotherapy research? *American Psychologist*, 41 (2), 131-136.
- Gendlin, E.T. (1989): Phenomenology as non-logical steps. Kaelin, E.F. & Schrag, C.O. (eds.) *American phenomenology. Origins and developments*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 404-410.
- Gendlin, E.T. (1990): The small steps of the therapy process: how they come and how to help them come. In Lietaer, G., Rombauts, J. & Van Balen, R. (eds.) *Client-centered and Experiential Psychotherapy in the Nineties*, 205-224. Leuven: Leuven University Press. ユージン・T・ジェンドリン 池見陽(訳) (1982): セラピープロセスの小さな一歩 ユージン・T・ジェンドリン・池見陽 セラピープロセスの小さな一

- 歩：フォーカシングからの人間理解 金剛出版 27-63.
- Gendlin, E.T. (1991). Thinking beyond patterns: Body, language and situations. In B. den Ouden & M. Moen (Eds.), *The Presence of Feeling in Thought*. New York: Peter Lang. 21-151.
- ユージン・T・ジェンドリン 筒井健雄 (訳) (1993): 略歴 体験過程と意味の創造 ぶっく東京 5.
- Gendlin, E.T. (1995): Crossing and dipping: some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation, *Minds and Machines*, **5**(4), 547-560.
- Gendlin, E.T. (1996): *Focusing-Oriented Psychotherapy: A Manual of the Experiential Method*. New York: Guilford. ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子 (監訳) (1998): フォーカシング指向心理療法 金剛出版.
- Gendlin, E.T. (1997): How philosophy cannot appeal to experience, and how it can. In Levin, D.M. (ed.) *Language beyond postmodernism: saying and thinking in Gendlin's philosophy*. Northwestern University Press, 3-41.
- Gendlin, E.T. (1997/2018): *A Process Model*. Evanston: Northwestern University Press.
- Gendlin, E.T. (1999): Authenticity after postmodernism. *Changes: An International Journal of Psychology and Psychotherapy*, **17**(3), 203-212.
- Gendlin, E.T. (2002): Forward. In Russell, D. (Ed.) *Carl Rogers: the quiet revolutionary: an oral history*. Roseville: Penmarin Books, xi-xxi. ユージン・T・ジェンドリン 島瀬直子 (訳) (2006): 序文 デイビッド・ラッセル (編) カール・ロジャーズ: 静かなる革命 誠信書房 i-xii.
- Gendlin, E.T. (2004): The new phenomenology of carrying forward. *Continental Philosophy Review*, **37**(1), 127-151.
- Gendlin, E.T. & Zimring F. (1955): The qualities or dimensions of experiencing and their change. *Discussion Papers* (Counseling Center, University of Chicago), **1**(3), 1-27.
URL: http://www.focusing.org/gendlin/docs/gol_2139.html
- Gendlin, E.T. & Jenney, R.H. (1956): Counselor ratings of process and outcome in client-centered therapy. (abstracts) *The American psychologist*, **11**, 363.
- Gendlin, E.T., Jenney, R.H. & Shlien, J.M. (1957): Counselor ratings of process and

- outcome in client-centered therapy. *Counseling Center Discussion Papers*, **3**(15).
- Gendlin, E.T., Jenney, R.H. & Shlien, J.M. (1960): Counselor ratings of process and outcome in client-centered therapy. *Journal of Clinical Psychology*, **16**(2), 210-213.
- Gendlin, E.T. & Tomlinson T.M. (1960): *Experiencing scale manual*. Unpublished manuscript.
- Gendlin, E.T., Beebe, J., Cassens, J., Klein, M., & Oberlander, M. (1968). Focusing ability in psychotherapy, personality and creativity. In Shlien, J.M. (Ed.), *Research in psychotherapy*. **3**. American Psychological Association. 217-241.
- Gendlin, E.T. & Lietaer, G. (1983): On client-centered and experiential psychotherapy: an interview with Eugene Gendlin. In Minsel, W.R. & Herff, W. (Eds.) *Research on psychotherapeutic approaches. Proceedings of the 1st European conference on psychotherapy research, Trier, 1981, Vol. 2*. Frankfurt: Peter Lang, 77-104
- ユージン・T・ジェンドリン・伊藤義美 (2002): ジェンドリン, E.T.博士が物語る 伊藤義美 (編) フォーカシングの実践と研究 ナカニシヤ出版 197-216.
- Gendlin, E.T. & Hendricks, M. (2004): Thinking at the edge (TAE) steps. *The Folio: A Journal for Focusing and Experiential Therapy*, **19**(1), 12-24.
- Hart, J. (1970): The development of client-centered therapy. In Hart & Tomlinson (Eds.), *New Directions in Client-Centered Therapy*. Houghton Mifflin. pp.3-22.
- 羽間京子 (2015): 治療者がみずからの内的体験をそのままに体験し保持することの意味：非行臨床の経験から 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件：カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創元社 26-34.
- 日笠摩子 (2003): セラピストのためのフォーカシング入門 金剛出版
- 日笠摩子 (2015): フォーカシング指向の観点から一致を考える：セラピストの真実性はどのようにクライアントの変化に貢献するのか 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件：カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創元社 55-65.
- Hodges, H.A. (1944): *Wilhelm Dilthey: an introduction*. London: Routledge & K. Paul.
- Hogan, R.A. (1949): *The Development of a Measure of Client Defensiveness in a Counseling Relationship*. University of Chicago, Department of Education.
- 池見陽 (1995): 心のメッセージを聴く：実感が語る心理学 講談社.

- 池見陽・吉良安之・村山正治・田村隆一・弓場七重 (1986): 体験過程とその評定 : EXP スケール評定マニュアル作成の試み 人間性心理学研究 4 50-64.
- 伊藤義美 (1998): 体験過程療法 : 1957 年以降の理論 現代のエスプリ 374, 56-64.
- 神田橋條治 (1988): 発想の航跡 [1] 岩崎学術出版社.
- 川上範夫 (2015): ロジャーズの三条件をめぐる : 精神分析、対象関係論、ウィニコットの観点からの検討 人間性心理学研究 32(2), 125-132
- Kirtner, W.L. (1955): *Success and Failure in Client-Centered Therapy as a Function of Personality Variables*. Master's thesis. University of Chicago, Committee on Human Development.
- Kirtner, W.L. & Cartwright, D.S. (1958): Success and failure in client-centered therapy as a function of client personality variables. *Journal of Consulting Psychology*, 22(4), 259-264. ウィリアム・カートナー&デズモンド・カートライト 伊東博 (訳) (1964) : クライエントの人格変数による成功と失敗 伊東博 (編) カウンセリング論集 第3巻 カウンセリングの過程 誠信書房 239-261.
- 北原保雄 (編) (2010): 明鏡国語辞典 第2版 大修館書店.
- Klein, M.H., Mathieu, P.L., Gendlin, E.T. & Kiesler, D.J. (1970): *The experiencing scale: A research and training manual*, 1, Wisconsin Psychiatric Institute. 池見陽・吉良安之・村山正治[ほか] (訳)(1987): 体験過程とその評定 : EXP スケール評定マニュアル作成の試み 人間性心理学研究 4, 50-64.
- Klein, M.H., Mathieu-Coughlan, P.L. & Kiesler, D.J. (1986): The experiencing scales. In Greenberg, L. & Pinsof, W. (Eds.), *The Therapeutic Process: A Research Handbook*. New York: Guilford Press. 21-71.
- Krycka, K.C. (2018): In memoriam: Eugene T. Gendlin. *American Psychologist*, 73(3), 293.
- Lietaer G. (1993/2001): Being genuine as a therapist: congruence and transparency. In Wyatt, G. (Ed.) (2001): *Rogers Therapeutic Conditions: Evolution Theory and Practice*. 1 *Congruence*. Ross-on-Wye: PCCS Books, 36-54.
- マックリール(1993): 大野篤一郎ほか (訳) デイルタイ : 精神科学の哲学者 法政大学出版局.
- 松村明 (監修) (1998): 大辞泉 増補・新装版 小学館.

- ジョージ・H・ミード 小川英司(2001): 「現在の哲学」第一章の一 季刊社会学部論集
19(2), 43-59.
- 三村尚彦 (2009): ジェンドリンとポストモダニズム: プロセスの論理 關西大學文學論集,
59(3), 1-26.
- 三村尚彦 (2015): 初期ジェンドリン哲学と体験過程理論 体験を問いつづける哲学 第
1巻 電子書籍 PDF版 ver1.0 ratik.
- 三村尚彦 (2016): フェルトセンスは、身体的なフィーリングなのか 關西大學文學論集,
65(3・4), 1-23.
- 三宅麻希・池見陽・田村隆一 (2007): 5段階体験過程スケール評定マニュアル作成の試み
人間性心理学研究 25(2), 193-205.
- 諸富祥彦 (2009). フォーカシングの原点: その哲学の基本的特質及びロジャーズとの関係
諸富祥彦 (編) フォーカシングの原点と臨床的展開 岩崎学術出版社 3-41.
- 諸富祥彦・末武康弘・村里忠之 (編) (2009). ジェンドリン哲学入門: フォーカシングの根
底にあるもの コスモス・ライブラリー.
- 本山智敬 (2015): 一致をめぐって 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャ
ーズの中核三条件: カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創元社 4-23.
- 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件: カウンセリングの
本質を考える 第1巻 一致 創元社.
- 村里忠之 (編) (2009). 『体験過程と意味の創造』について 諸富祥彦・末武康弘・村里
忠之 (編) (2009). ジェンドリン哲学入門: フォーカシングの根底にあるもの コスモ
ス・ライブラリー 51-101.
- 村山正治 (1982): 訳者あとがき ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄・池見陽・日笠
摩子 (監訳) (1998): フォーカシング指向心理療法 金剛出版 231-235.
- 村山正治 (編) (1998): クライアント中心療法理論の発展と展開 現代のエスプリ 374,
35-85.
- 中田行重 (1999): 体験過程スケール 現代のエスプリ 382, 50-60.
- 中田行重 (2002): フォーカシングにおけるリスナーのファンクショナル・モデルの提示
心理臨床学研究 19(6), 619-630.
- 中田行重 (2015): ファシリテーターの一致について 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編)
(2015): ロジャーズの中核三条件: カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創

- 元社 44-53.
- 中田行重・越山綾・樋口隆弘・福塚夢野・細見知加・村田悠香 (2012): 体験過程スケールのセラピスト・バージョンに関する一考察 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要 3, 55-63.
- 成田善弘 (1997): めったに実現されない“理想”:精神科医の立場から こころの科学 74, 95.
- 成田善弘 (2015): なぜ不可能なのか? からの出発 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件: カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創元社 90-94.
- 小此木啓吾 (2002): 退行 小此木啓吾 (編) (2015): 精神分析事典 岩崎学術出版社 312-313.
- 大石英史 (2015): クライアント中心療法における一致の臨床的検討 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件: カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創元社 35-43.
- Parker, R. (2014): Focusing-Oriented Therapy: The Message from Research. In Madison G. (Ed.) *Theory and practice of focusing-oriented psychotherapy: beyond the talking cure*. London: Jessica Kingsley Publishers, 259-272.
- Purton, C. (2004): *Person-Centred Therapy: The Focusing-Oriented Approach*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. キャンベル・パートン 日笠摩子 (訳) (2006): パーソン・センタード・セラピー: フォーカシング指向の観点から 金剛出版.
- キャンベル・パートン (2015): 表現すること、一致、そして中核条件 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件: カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創元社 76-87.
- Rogers, C.R. (1939): *The clinical treatment of the problem child*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C.R. (1951): *Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications, and Theory*. Boston: Houghton Mifflin. カール・R・ロジャーズ 保坂亨・諸富祥彦・末武康弘 (訳) (2005): クライアント中心療法 岩崎学術出版社.
- Rogers, C.R. (1955): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. *Discussion Papers* (University of

- Chicago, Counseling Center), 1(5), 1-69.
- Rogers, C.R. (1956): The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), 2(8)1-19.
- Rogers, C.R. (1957): The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95-103. カール・R・ロジャーズ
伊東博 (訳) (2001):セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件 カー
ーシェンバウム&ヘンダーソン (編) ロジャーズ選集 上 誠信書房 265-285.
- Rogers, C.R. (1959): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.), *Psychology: A Study of Science*. 3, New York: McGraw-Hill. 184-256. カール・R・ロジャーズ 畠瀬稔 [ほか] (訳) (1967): クライアント中心療法の立場から発展したセラピー、パーソナリティおよび対人関係の理論 伊東博 (編) ロジャーズ全集 第 8 巻 パーソナリティ理論 岩崎学術出版社 165-270.
- Rogers, C.R. (1966): Client-centered therapy. In Arieti, S. (Ed.), *American Handbook of Psychiatry*. 3, New York: Basic Books. 183-200. カール・R・ロジャーズ 伊東博 (訳) (1967): クライアント中心療法 伊東博 (編) ロジャーズ全集 第 15 巻 クライアント中心療法の最近の発展 岩崎学術出版社 255-297.
- Rogers, C.R. (ed.) (1967): *The Therapeutic Relationship and its Impact: a Study of Psychotherapy with Schizophrenics*. Madison: Wisconsin U.P.
- Rogers, C.R. (1980): *A Way of Being*. Boston: Houghton Mifflin. カール・R・ロジャーズ 畠瀬直子(訳) (1984): 人間尊重の心理学：わが人生と思想を語る 創元社。
坂中正義・本山智敬・三國牧子 (2015): Introduction 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件：カウンセリングの本質を考える 第 1 巻 一致 創元社 i-vi.
- ピート・サンダース (編) 小野京子 [ほか] 訳 (2007): パーソンセンタード・アプローチの最前線：PCA 諸派のめざすもの コスモス・ライブラリー。
- 佐々木正宏 (2005): クライアント中心のカウンセリング 駿河台出版社。
- Seeman, J. (1954): Counselor judgments of therapeutic process and outcome. In Rogers, C.R. & Dymond, R. (Eds.) *Psychotherapy and Personality Change: Co-ordinated Research Studies in the Client-centered Approach*. Chicago: University of Chicago

- Press, 99-108. ジュリアス・シーマン 伊東博 (訳) (1967): セラピイの過程と所産に関するカウンセラーの判定 友田不二男 (編) ロージャズ全集 第 13 巻 パースナリティの変化 岩崎学術出版社 129-141.
- Sheerer, E.T. (1949): *An Analysis of the Relationship between Acceptance of and Respect for Self and Acceptance of and Respect for Others in Seven Counseling Cases*. University of Chicago, Committee on Human Development.
- Shlien, J. (1956): Some notes on the concept of "repression" and the concept of the self. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), 2(30).
- Standal, S.W. (1954): *The Need for Positive Regard: A Contribution to Client-centered Theory*. University of Chicago, Department of Psychology.
- 末武康弘 (2014): ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究 法政大学博士論文 <http://hdl.handle.net/10114/9497>(2018年5月29日取得)
- 田嶋誠一 (1987): 壺イメージ療法: その生い立ちと事例研究 創元社.
- 田村隆一 (1990): フォーカシングにおけるフォーカサー-リスナー関係と floatability との関連 心理臨床学研究, 8(1), 16-25.
- 田村隆一 (2015): 一致からみた共感的理解: レゾナンスモデルをささえるセラピストの一致 本山智敬・坂中正義・三國牧子 (編) (2015): ロジャーズの中核三条件: カウンセリングの本質を考える 第1巻 一致 創元社 66-73.
- 田村隆一・村山正治 (1988) 人格変化の過程において象徴化は必要なのか?: フォーカシングの事例からの考察 九州大学教育学部紀要 教育心理学部門 33(2), 241-250.
- 田中秀男 (2004 a): 「直接参照」の「直接の」って? : 「レファランス」と「照合」の異同を見定める *The Focuser's Focus* : 日本フォーカシング協会ニュースレター 7(2), 1-6.
- 田中秀男 (2004 b): ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究(上): 心理療法研究におけるディルタイ哲学からの影響 図書の譜, 8, 56-81.
- 田中秀男 (2005): ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究(下): 心理療法研究におけるディルタイ哲学の影響 図書の譜: 明治大学図書館紀要, 9, 58-87.
- 田中秀男 (2014a): ジェンドリンにおけるフォーカシングと体験過程理論 関西大学大学院文学研究科修士論文.
- 田中秀男 (2014b). そもそも「象徴化」とは?: 「象徴化は必ずしも必要か」の議論の前に.

- 第1回 TAE 質的研究国際シンポジウム報告書（宮崎大学）, 98-103.
- 田中秀男 (2015): 「一致」という用語にまつわる問題点とジェンドリンによる解決案 人間性心理学研究 **33**(1), 29-38.
- 田中秀男 (2016a). ジェンドリンの心理療法研究における過程変数. 心理学叢誌（関西大学大学院心理学研究科）, **16**, pp.105-111.
- 田中秀男 (2016b). 感じと言葉. 池見陽（編）傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング：感じる・話す・聴くの基本 ナカニシヤ出版 53-59.
- 田中秀男 (2017)：「一致」というテーマに関する最適の書（特集 ロジャーズの中核三条件を読む）. 人間性心理学研究, **34** (2), 143-149.
- 田中秀男 (2018): “この感じ”という直接参照：フォーカシングにおける短い沈黙をめぐって. 人間性心理学研究, **35** (2), 209-219.
- 田中秀男・池見陽 (2016): フォーカシング創成期の2つの流れ：体験過程尺度とフォーカシング教示法の源流 *Psychologist: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要*, **6**, 9-17.
- 得丸さと子 (2010): ステップ式質的研究法：TAE の理論と応用 海鳴社.
- 徳永恂 (1980): アドルノにおける批判的理論と経験的調査：『権威主義的パーソナリティ』をめぐって 現代社会学大系月報 第13回配本 2-4.
- 内田和夫 (2002): フォーカシングにおける沈黙と語り——体験過程スケールを用いて 人間性心理学研究 **20**(2), 101-111.
- Wach, J. (1946): Critical review: Wilhelm Dilthey: an introduction. by H. A. Hodges. *The Journal of religion*, **26**, 217-218.
- Wyatt, G. (Ed.) (2001): *Rogers Therapeutic Conditions: Evolution Theory and Practice. 1 Congruence*. Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Zimring, F. (1958): The concepts of set and the unconscious. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), **4**(10).

謝辞

本論文を執筆するにあたり、お世話になりました皆様に、御礼申し上げます。

関西大学大学院心理学研究科教授の池見陽先生には、博士課程後期課程でご指導を賜りました。

同大学院心理学研究科教授の中田行重先生、また同大学院文学研究科教授の三村尚彦先生には、ご多忙の中、副査をお引き受けくださり、大変感謝いたします。

大学院池見研究室ゼミ生の皆様には、数多くの議論や共同での研究、ゼミ以外でもたくさん時間を共に過ごす中で、多くの学びを共有させていただいたこと、大変感謝いたします。

河崎俊博さん、山形碧子さん、筒井優介さんには誤字脱字のチェックをしていただきました。ファイル作成では、小野真由子さんにご協力いただきました。ありがとうございます。

最後に、応援してくれた家族に、心から感謝します。

皆様、ありがとうございました。

2018年5月

田中秀男